

博士論文

日本語とモンゴル語における身体語彙慣用句の対照研究

－「目」を含む慣用句を中心に－

SURENJAV OYUNZUL

広島大学大学院国際協力研究科

2014年9月

日本語とモンゴル語における身体語彙慣用句の対照研究

－「目」を含む慣用句を中心に－

D105492

SURENJAV OYUNZUL

広島大学大学院国際協力研究科博士論文

2014年9月

広島大学大学院国際協力研究科

論文名: 日本語とモンゴル語における身体語彙慣用句の対照研究
—「目」を含む慣用句を中心に—
学位の名称: 博士 (学術)
学生番号: D105492
氏名: SURENJAV OYUNZUL

平成 26 年 7 月 29 日

審査委員会

委員長・教授

佐藤 暢治



教授

マハラジャン ケシャブ ラル



准教授

深見 兼孝



広島大学名誉教授

浮田 三郎



大阪外国語大学名誉教授

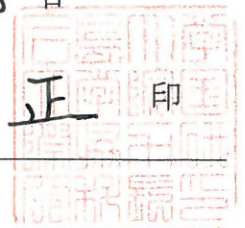
橋本 勝



平成 26 年 9 月 5 日

研究科長

藤原章正



第1章. 序論

1.1. 研究の目的と背景

外国語の慣用句の解釈や理解度に関わる調査は、これまでも日本人、外国人を問わず数多くなされている。たとえば、森田（1966）は、日本語の慣用的についての理解度調査を行い、留学生の誤解率が 79.26%、日本人学生の誤解率が 14.15%であるという数字を報告している。また、ダニーミン・佐野（2001）は 24 カ国の留学生が 20 個の慣用句をどの程度理解しているのかを調査し、その平均理解度は 52%であると報告している。これらの数字は、外国人日本語学習者の慣用句における理解が十分でないことを端的に示すものである。

日本語とモンゴル語も他の言語と同様に、慣用句を豊富に持つ言語である。しかも日本語とモンゴル語とも慣用句は日常的によく使われるものであり、相互に慣用句の用法・解釈を深く理解することが言語研究だけでなく、異文化理解においても欠かせないものとなる。

本研究の目的は、日本語とモンゴル語の「目」を含む慣用句を対象に慣用句の統語的な構成要素が意味成立に貢献できる可能性を検討すると共に、さらに慣用句の意味に反映する文化的背景を考察し、統語的・文化的な面から慣用句の意味成立に対する各要素を明らかにすることにある。

慣用句の中で、その大多数を占めるのは身体語彙慣用句である。身体語彙慣用句に関して、星野（1976：155）は「身体語彙による表現とは、人間の身体やその部位を指示する名称を使用しながら、身体の状態・活動を直接指示するというよりは、むしろ別の精神状態や活動を暗示的比喩的に指示している」と述べている。また林（2002：5）も、「身体語彙とは、基本的に人間の身体の各部位であり、人間の一番身近なものとしての性格が強く、人間の感情や微妙な心理状態には関わりが深い」と指摘している。従って、身体語彙慣用句は身体部位を通じて得られる人間の精神状態に関する意味が一般的であることが分かる。

日本語とモンゴル語における慣用句から身体語彙慣用句が占める数を見てみると、日本語は宮地（1988）「常用慣用句一覧」に従うと慣用句 1261 句のうち身体語彙慣用句は 498 句、モンゴル語は Г.Аким（1999）”Монгол өвөрмөц хэллэгийн товч тайлбар толь“に収録されている慣用句 1393 句のうち身体語彙慣用句は 605 句であり、日本語もモンゴル語も慣用句の約半数が身体語彙慣用句で占められていることになる。日本語とモンゴル語の身体語彙慣用句を分析することで、個々の言語の言語表現を司る人間の精神・感情という内心世界の在り方、さらには外界世界の捉え方・表出様態が見えてくるものと思われる。

各国語における身体語彙慣用句を見ると、「頭部」に関する慣用句が圧倒的に多い。笠川（2007）、林（2002）、支・吉田（2002）、筆者（2010）を参考にして、英語、日本語、中国語、韓国語、モンゴル語における身体語彙慣用句の数を示せば、表1のようになる。

表1 日・英・中・韓・モ語における「頭部」に関する身体語彙慣用句数

研究者	笠川（2007）		支・吉田（2002）		林（2002）		S.Oyunzul（2010）	
順	日本語	英語	中国語		韓国語		モンゴル語	
I	目 176	head (頭) 156	目、眼、眼睛 (目) 128		눈 (目) 93		нүд (目) 128	
II	口 97	eye (目) 110	嘴、嘴巴、嘴子、口 (口) 97		입 (口) 47		ам (口) 102	
III	耳 45	face (顔) 69	脸、脸皮、脸子、面 (顔) 95		얼굴 (顔) 42		толгой (頭) 58	
IV	鼻 41	ear (耳) 42	脑袋、脑瓜、脑壳、 头(頭) 82		귀 (耳) 31		нүүр, царай (顔) 36/ 13	
V	顔 36	nose (鼻) 42	耳朵、耳 (耳) 30		머리 (頭) 34		хэл, хэл ам (舌・舌口) 51	
VI	頭 35	tongue (舌) 40	舌头、舌 (舌) 26		코 (鼻) 16		чих (耳) 33	
VII	舌 22	mouth (口) 33	鼻子 (鼻) 22		혀 (舌) 5		хамар (鼻) 12	
VIII	齒 16	tooth (齒) 30	牙 (齒) 15		이 (齒) 5		эрүү (顎) 9	
IX	顎 10	jaw/chin (顎) 3/4	唇 (唇) 6		이마 (額) 4		шүд (齒) 10	
X	眉 9	eyebrow/brow (眉毛) 3/1	眉毛 (眉毛) 5		뺨 (頬) 3		дух,магнай (額) 5/3	

表1からわかるように、数的には日本語、モンゴル語、韓国語、中国語で「目」と「口」を含む慣用句が一位と二位を占め、他の部位に比べ順位が高い。その一方、「耳」と「鼻」と「頭」を含む慣用句は言語間で差が目立ち、日本語は「耳」と「鼻」を含む慣用句の数が他の言語よりも多い。

本研究では、日本語とモンゴル語における慣用句の中でも、このように数的に一番多い「目」を含む慣用句を研究対象とする。目は外界と真っ先に接する器官であり、人間の内外世界を結ぶ部位とされる。「目は口ほど物を言う」、「目は心の窓」という諺が示すように「目」を対象にすることにより、日本とモンゴル語の相違点だけでなく、両国民の感情を始めとする精神的な面も明らかにできると思われる。

但し、同じ身体部位でありながら、日本語とモンゴル語において慣用句の構成や意味解釈、その全てが類似しているわけでもない。S.Oyunzul(2010:34)が示めたように、日本語(172句)とモンゴル語(130句)の「目」を含む慣用句のうち、語彙構成・意味対応が基本的に対応するのは54.5%にすぎない。

文法構造が似ていると言われる日本語とモンゴル語であるが、慣用句において類似しない表現も半数近く現れる。これは、日本語とモンゴル語両言語間において言語構造やその解釈における違いが少なくないことを示すものでもある。このような、慣用句における解釈の違いは、言語間の統語的な構造や意味的な背景によって左右されるものであると思われる。その背景には、言語産出の基盤と考えられる文化や社会的な差異の反映も大きいと考えられる。

モンゴルにおいて慣用句の研究は少なく、慣用句の意味解説と分類に留まっており、意味成立や統語的分析に関する研究はまだ見当たらない。一方、日本においては近年慣用句の研究を言語要素だけでなく、その意味成立を認知的な面から説明している研究が進んできている。

有菌(2009:5)は、「慣用句の研究に関わる伝統的な見解では、慣用句の構成要素の意味と個々の語の知識とは統語規制に従って予測できないため、非構成的であるとされる。ただし、多くの研究者はイディオムの統語的振る舞いを予測する方法を提案しているが、統語的固定性を単に規則によるものとして説明しており、統語的固定性に対する動機づけについては説明していない。いわば、イディオムの意味の成立を分析対象とするものは殆ど無いに等しい」と述べている。そして、有菌(2009:5)はさらに「伝統的研究においても、「イディオムの統語的固定性に対して意味の観点から説明を与えようと試みた研究もある。その中で、Nunberg(1978)によってイディオムは構成要素の意味が全体の意味にそれぞれ貢献する分解可能なものであるとし、イディオムの振る舞いは単に文法形式や比喩的意味に基づいて予測されるのではなく、個々の構成要素と全体の比喩的意味の間に何らかの関係にある程度左右されるものであるということの意味している」ということも述べられている。

このように、イディオムの意味的側面についての分析が発展するのと並行して、認知言語学が発展がイディオム研究に大きな転機をもたらしている。それまで、無関係で恣意的であるとして研究対象とされなかったイディオムの形式と意味のリンクは、人間の身体や

経験に根ざした認知システムによって動機付けられるものであるということが明らかにされたのである。

「慣用句は固定された構成であり、分析不可能に近い」という見方を変える認知言語学的なアプローチに従い、日本語において橋本(2000)、山梨(2001)、初山(2002)、有菌(2009)らが「慣用句は人間の認知システム・概念体系に動機づけられたものであり、慣用句の構成語彙やその意味分析が慣用句の固定性に影響する」と指摘し、慣用句の分解可能性を論じている。

近年では、従来単なる言語の問題として扱われてきた見解が広げられ、慣用句の意味成立を語彙分析に留まらず、その動機づけを認知的概念との関係や統語的分析などの多面において説明する研究が進んでいる。これは、慣用句研究の視野を広げ、慣用句の構成や意味に影響する各要素を確定できる可能性を促す展開であると言える。

他方では、慣用句の意味成立に影響する統語的振る舞いの分析や、慣用句の意味成立に影響し得る言語ごとの独特な背景に関する分析は少ない。特に「語彙的にも統語的にも固定されている」と言われる慣用句の固定性を成すと予想される統語的な構成要素の分析が求められており、それによって各言語ごとの慣用句構成の特徴が浮き彫りになると期待する。

さらに、慣用句が口語に染み込んだ文化的要素を持ち得るという点にも留意しておくことが重要である。たとえば、Д.Бадамдорж(2006: 124、141)の「慣用句とは、意味においてその構成要素単独の意味が失われ、総和した一つの意味や概念を表し、当国民の思想や生活、習慣、慣習、宗教などを反映した定型的な総和表現である」という指摘は、慣用句に当該国民の生活習慣をはじめとする文化的な背景が反映されていることを示唆している。

身体語慣用句の研究に関しては、基本的に「史的考察」と「現代語における捉え方」といった二つがなされてきた。「現代における捉え方」とは、主に下記を言う。

- a. 身体語彙の概念、規定、分類、範囲に関する理論的・体系的な考察
- b. 身体語彙使用例を資料に、それらの意味と用法に対する解説

この二つにおいては後者の立場から論じた研究が前者よりも多いようである。本研究ではその後者の方法に沿い、慣用句の意味は外界にどのように動機づけられ、それがどのような構造により表現されているかの関連性を探っていくこととする。特に身体語彙慣用句が成す言語表現は人間の身体を通じた外界認識の表出であることに注目しながら、当該言語独特な意味成立を明らかにしていく。

本研究を通じて慣用句から、それをを用いる人間の言語と文化の関連性が伺われることを指摘し、それは言語の比較研究だけでなく、人間の文化的な一面をも参考にできる資料になることを期待したい。

1.2. 研究の方法と対象

日本語とモンゴル語は、語順と文法が似ていると言われる通り、慣用句の構成においても同様な構成を持ち、意味的にも対応する表現が多い。上に述べたように、日本語とモンゴル語における「目」を含む慣用句のうち、54.5%が語彙構成や意味において基本的に対応していることが明らかにされている(S.Oyunzul 2010:34)。例えば、「目がある」～「нүдтэй (逐語：目がある)」(意味：物事の本質や真の価値を見抜く力で、鑑識目を持っている)という表現が語彙的な構成や意味が類似する表現である。このように、基本的に類似しているもの以外にも、言語個々に独特な構成や意味を持つ表現もある。その違いの要因を探るために、統語的構成や意味が違う表現に注目していくこととする。

日本語とモンゴル語慣用句の意味対応における相違点が見える用例は基本的に下記の6種にまとめられるが、今後分析する際、統語や意味的な分類においてさらに増えていく。

(a) 「目に入る」～「нүдэнд тусах (逐語：目に映る)」

日本語とモンゴル語はともに「自然に目に見える」という意味を表すが、構成要素として「入る」～「тусах (映る)」という異なる動詞が使われており、外界を受け入れる認識において差異が見られ、構成要素の語彙が異なるが意味が類似する表現は少なくない。

(b) 「目が光る」～「нүд нь гялалзах (逐語：目が光る)」

日本語は「監視が厳しい、不正やあやまちを見逃さない」という意味であるが、モンゴル語は「怒り、興奮」の感情を表す。日本語とモンゴル語両者の構成要素として「光る」という動詞がともに使われているにも関わらず、意味が異なる。「光る」という動詞の意味は日本語でもモンゴル語でも共に良いイメージの「プラス」の意味で捉えられるのが一般的なようであるが、慣用句の場合は「マイナス」の意味に転換している。ここでは日本語の方が構成語彙の意味転換のように観察され、モンゴル語は統語的な構成要素により意味ニュアンスが左右される。具体的に言えば、モンゴル語の「нь」所有接合語(第4章にて分析)が意味構成に関与しているのではないかと考えられる。このように両言語において同様な語彙構成であっても、日本語に現れずモンゴル語独特に現れる統語的な構成要素が意味成立に影響する可能性を示唆していると思われる。

(c) 「目を白黒させる」～「нүд нь улаанаар эргэлдэх (逐語：目が赤くなって回る)」
色彩を表す語彙を構成要素に含む表現には感情を表すものが多い。ここでは日本

語は「白黒」、モンゴル語は「赤」を使用しており、日本語は「ひどく驚いたり苦しんだりして目の玉をしきりに動かす」、モンゴル語は「怒って目が赤くなって回っているように見える様子」といった怒りを表す。統語的構成においては「自・他」の違いもあるであろうが、ここでは色彩を通じる感情表現に着目し、その背景を考察の対象とする。

(d) 「目を落とす」～「нүдээ унагах (逐語：目を落とす)」

語彙構成は同一であるが、意味は一致しない。日本語は「視線を下に向ける、力を落としたときのしぐさ」といった意味であるが、モンゴル語は「良いものを見張る、惚れる」といった意味である。同一構成要素によらず、意味が異なる要因として、異なる文化・社会的な背景があるのではないかと考えられる。

(e) 「目が出る」～「хоншоортой (逐語：口先がある)」

構成要素に使用される身体部位は異なるが、意味は「幸運が回ってくる」のように類似している。「目」と「口」という異なる身体部位が「幸運」として取り扱われることには、人間の身体部位というよりは自然現象が関わる表現であるかと思われ、その背景を探ることとする。

(f) モンゴル語独特な「нүд бэлчээх (逐語：目を放牧させる)」(意味：目を配る、周りを遠くまで見る)、日本語独特な「目から鱗が落ちる」(意味：何かがかきかけとなって、急に物事の事態が良く見え、理解できるようになる)などのような当該言語独特な表現も少なくない。語彙から見ると、当該国民ならではの習慣・生活環境などが反映されている表現であろうかと思われる。

このように、身体と同じ部位名称を使用する表現においても感情の捉え方は様々であり、構成要素の分析と共に、慣用句の意味成立の動機づけや背景を探求する必要性がある。

従って、上記のような相違表現や当該言語独特な表現を対象に両言語の対象慣用句の意味成立に対する各要素(統語的要素かつ文化・社会的な背景)を確定しながら両言語間の相違点を明らかにすることを試みる。

分析の対象項目として、特に両言語の比喩表現や感情表現、モンゴル語独特に現れる統語的な構成要素(共同格・所有接辞「-тай」、再帰所有接合語「нь」、所有接辞「-ээ」)の用法や意味に着目し、慣用句の意味に貢献する可能性を確定することに重点を置く。

慣用句分析に使用する主な資料は、次の通りである。日本語慣用句の主資料は『広辞苑』、井上(2008)『例解慣用句辞典』などであり、モンゴル語慣用句の主資料は小沢(1983)『現

代モンゴル語辞典』、Г.Аким（1999）”Монгол өвөрмөц хэлцийн товч тайлбар толь”、Я.Цэвэл（1966）”Монгол хэлний тайлбар толь”などである。

『広辞苑』は、総項目数 24 万語を収録し、国語辞典であると共に、学術専門語ならびに百科全般にわたる事項・用語を含み、現代語と百科項目を充実した辞書である。

井上（2008）『例解慣用句辞典』は会話・文章に役立つ慣用句 3 千 7 百項目が収録されたものであり、テーマ別・キーワードごとに分類され、すべての句に適切な用例が掲げられ、慣用句の意味が詳しく解説されており、意味と用法上の参考となる。

小沢（1983）『現代モンゴル語辞典』は、見出し語 2 万 5 千語を含め、用例等を含めて 5 万語を収録した蒙日辞典の中で収録数をもっとも多い辞書である。慣用句の用例は少ないが、モンゴル語の単語の意味と用法を調べるには役に立つ辞書である。

Г.Аким（1999）”Монгол өвөрмөц хэлцийн товч тайлбар толь”は、約 2 千項目の慣用句が収録されたモンゴルを代表する慣用句辞典である。モンゴル語の慣用句の意味が説明され、その例文は文学作品からも採られている。

Я.Цэвэл（1966）”Монгол хэлний тайлбар толь”は、現代モンゴル語辞典として使われている唯一の国語辞典である。収録語は 3 万語であり、一般・専門・文学・科学用語などを含め、文献から引用された例文による説明も収録されている。そこで慣用句のみならず、単語の意味を確認するためにも使用する。

これら以外にも、白石（1977）『国語慣用句大辞典』、東郷（2003）『からだことば辞典』、土肥（1996）『からだ語辞典』、丹野（1988）『意味から引ける慣用句辞典』、D.トゥムルトゴー（1977）『現代蒙英日辞典』やその他の文法辞典や先行研究資料や文学作品なども参照する。

上記の資料を元に分析を進めるが、研究方法は下記の通りとする。

- i. 日本語とモンゴル語における「目」を含む慣用句の意味対応に基づき、分類を行う。
- ii. 日本語とモンゴル語における独特な表現を対象に意味成立に關与する統語的な構成要素を含む表現を抽出し、両言語間の構造や意味対応を分析する。
- iii. モンゴル語独特に現れる「所有接合語」「再帰所有接辞」「所有接辞」などを対象に、慣用句の意味成立に影響する統語的な構成要素の役割を分析し、慣用句の意味に貢献できる可能性について検討する。
- iv. 日本語とモンゴル語両言語における対象表現の意味分類を行い、それに基づき当該言語特有に現れる表現に着目しながら、それらの文化・社会的な背景について考察する。
- v. 対象慣用句の分析や考察をまとめ、慣用句の意味成立に貢献する統語的な構成要素や文化的背景などの各要素の分析の可能性を指摘し、慣用句に見られる両言語の相違点を考記述する。

1.3. 本論文の構成

本論文の構成は以下の通りである。

第2章では、日本語とモンゴル語における「慣用句」の定義を取り上げ、両言語における定義や概念や身体語彙慣用句の位置づけの共通性を確認する。それに基づき、本研究で対象とする慣用句の統一性を確定しておく。

第3章では、日本語とモンゴル語の「目」を含む慣用句の統語的な分析を行い、意味的な分類を行った上で、両言語における対象慣用句の構成を対照する。両言語の対象慣用句における形式的な分析を行うことによって、同じ文法構造と言われる日本語とモンゴル語の慣用句構造に見られる相違点を明らかにし、従って、独特な統語的な構成要素を選出することに致し、統語的な分析を進める前提とする。

第4章では、統語的な対照分析に基づき、モンゴル語独特に現れる統語的な構成要素が慣用句の意味成立に関与する可能性について検討する。日本語とモンゴル語両言語の動詞慣用句を中心に、下記の通りに分析を進める。

- 日本語とモンゴル語の対象慣用句における統語的分析、特に格助詞分布率を示し、対照考察し、以下の分析の基盤とする。
- 日本語とモンゴル語の主格使用例を中心に分析し、その中で、主格に後置されるモンゴル語独特な「所有接合語（**нь**）」の通常の意味と、慣用句における意味を検討し、「**нь**」が慣用句の意味成立にどのように貢献しているかを明らかにする。
- 日本語とモンゴル語の「対格」使用慣用句を対象に、モンゴル語に現れる対格後続の「再帰所有接辞（**-ээ**）」が慣用句の意味成立への影響について検討する。
- 日本語とモンゴル語の所有構造の意味を対照分析し、身体語彙慣用句に現れる日本語の「ある」動詞と、モンゴル語の「所有接辞（**-тай**）」の慣用句における意味やその特徴について対照考察する。
- 上記のような統語的分析を行うことで、モンゴル語における統語的な構成要素が慣用句の意味成立に貢献できる可能性について議論することを試みる。

第5章では、日本語とモンゴル語の「目」を含む慣用句の語彙的構造を対照し、独特に現れる表現を中心に意味成立の背景を考察する。背景として文化・社会や生活環境を視野に入れながら、考察を行い、言語と文化の関連性の一部を記述することを試みる。

第6章では、本研究の結論を述べると共に、今後の課題を示す。

第2章.

日本語とモンゴル語における慣用句の概念

2.1 日本語とモンゴル語における慣用句の定義

日本語とモンゴル語における慣用句の定義と対象範囲は研究者により異なる。そのため、本研究で取り扱う研究対象の範囲を明確にすることが重要である。

日本語とモンゴル語は文の構造が似ていると言われる。ただし、文の構造が似ているとは言え、慣用句は統語的構成上にも意味上にも固定されているという性質を持つため、その固定性の中で個々の言語ならではの統語的・意味成立の特徴が現れるはずである。従って、慣用句の比較分析の前提として、本研究の基礎知識となる慣用句の概念を明示しておかなければならない。以下、日本語とモンゴル語における慣用句の定義をそれぞれ確認していく。

2.1.1 日本語における慣用句の定義

日本では慣用句に関する研究として、「慣用表現」と「慣用句」表現が用いられているようであるが、研究者により対象範囲が異なっており、その概念は一筋ではないようである。

以下に、言語研究者による慣用句の定義を示しておく。

- 宮地（1982：238）は「語の二つ以上の連結体であって、その結びつきが比較的固く、全体で決まった意味を持つ言葉」であると定義し、慣用句を下記のように分類している。「慣用句」は「連語成句的慣用句」と「比喩的慣用句」から成り、「比喩的慣用句」はさらに「直喩的慣用句」と「隠喩的慣用句」に分けられる。それぞれの分類に相当する用例は下記の通りである。

(1) 連語成句的慣用句： 手を染める、苦になる、電話をかける

(2) 比喩的慣用句

直喩的： 赤子の手をひねるよう、水を打ったよう

隠喩的： 羽をのぼす、兜をぬぐ、烙印を押す (238pp)

宮地(1982)では、一般の連語句より結合度が高いものを「連語成句的慣用句」と言い、比喩表現の中で『～のよう』、『～の思い』などを伴っているものを「直喩的慣用句」、語句の意味が派生的・象徴的で、全体として比喩的な意味を示すものを「隠喩的慣用句」としている。

- 国広(1985)は、「二語以上の連結使用が固定しており、全体の意味は構成語の意味の総和から出て来ないもの」と定義している。

国広(1985)は、宮地(1982)の定義をさらに詳しくし、形式と意味の両面からの分類を行っている。

- 初山(1997:30)は、「複数の語の連結使用が固定しており、全体の意味は、個々の構成語がその連結の一部でない時に持つ意味の総和からは導き出せないもの」と指摘している。

初山は、表現全体の意味が構成語の意味の総和から導き出せない場合のみ慣用表現と指摘し、構成語の一部のみが字義的でないものは慣用表現に含めていない。

この点に関して、宮地では「目が高い」は、それぞれに「鑑識力」「厳しい試練」という転義であるだけで、構成語の意味の総和として句全体の意味が理解可能であり、慣用表現であるよりもむしろ連語の部類に属すると指摘している。

- 田中(2002a:6)は「その構成語の基本的な意味から直接に予測される意味とは多少とも異なる意味を表現全体として表すもので、しかもその意味と形式の結びつきが慣習的に定着している表現である」と定義している。

以上から、「日本語の慣用句は2語以上から成り、構成要素の総和により全体的に一つの意味を表し、構成語個々の意味から予想しにくい表現である」のようにまとめられる。さらに、辞書記述による定義も参照する。

- 慣用句とは、二語以上の語から構成され、句全体の意味が個々の語の元来の意味から決まらないような慣用的表現である。骨を折る、油を売るなど。『広辞苑』第六版(岩波書店、2008)
- 二つ以上の語が結びついて、習慣的に使われ、特別な意味を表す言い回し。例えば、油を絞る、道草を食う。『精選国語辞典』(明治書院、1994)

- 二語以上が結合し、その全体が一つの意味を表わすようになって固定したもの。例：道草を食う、耳にたこができる。『大辞林』第二版（三省堂、1995）
- 各語の総和では説明しにくい固有の意味を構成するという点で、意味的には一語であり、かつ、接合部に他の要素を挿入することを許すという点で、文法的には一語でない、文節以上文以下のまとまりを慣用句という。『日本語表現・文型辞典』（朝倉書店、2002）

2.1.2 モンゴル語における慣用句の定義

モンゴル語における「慣用句」の位置付けを示しておきたい。モンゴル語では日本語の「句」に当たる概念は「Холбоо үг（連語句）」であり、意味的に下記の二種に分けられる。

- (1) Чөлөөт холбоо үг（自由連語句）
- (2) Чөлөөт бус холбоо үг（不自由連語句）か、Тогтвортой холбоо үг（定型連語句）

上記の「定型連語句」は Хэлц үг（成句）とも言われるが、定型連語句の分類に含まれる。

(2)の「定型的連語句」の中には Оноосон нэр（固有名詞）、Өвөрмөц хэлц（慣用句）、Нийлмэл үг（複合語）、Хэвшмэл хэлц（定型句：諺、格言、謎）などが含まれる。

モンゴル言語学では上記の（1）を統語論の対象として取扱い、（2）を語彙論の対象として扱っている。

Б.Рагчаа（1975）は「...自由連語句（Чөлөөт холбоо үг）と定型連語句（Тогтвортой холбоо үг）を別々に取り扱わなければならない。「定型連語句」は構成要素が固定しており、意味的にも一定している。但し、連語と成句の文法的な構成が同じような場合が多く、形式的な差が現れないようにみられる」と述べている。ここでの Тогтвортой холбоо үг（定型連語句）は逐語訳が少々ずれるが、概念的に日本語の「成句」に相当すると考えられる。

モンゴル語学者による「Өвөрмөц хэлц（慣用句）」の定義を述べる。

Г.Аким（1985：3）が定義するように「慣用句とは、当言語においては構成要素の単語の意味が失われ、表現全体で一つの意味を表す固定的な結合語である。慣用句は、二つ以上の語彙から成るが、文の中で一つの単位として扱われている」のようである。さらに、慣用句の特徴として、

- ① 二つ以上の言葉から成り、総和的に一つの意味を持つものである
- ② 慣用句の構成語は個々に扱われない
- ③ 外国語への直訳は不可能

と指摘している。

- Д.Бадамдорж (2006 : 124, 141) は「慣用句とは、意味においてその構成要素単独の意味が失われ、総和した一つの意味や概念を表し、当国民の思想や生活、習慣、慣習、宗教などを反映した定型的な総和表現である」と述べている。例えば、магнай тэнийх (逐語：額が伸びる、意味：喜ぶ)、модоо барих (逐語：棒を取る、意味：貧乏になる)、гуяа алгадах (逐語：太ももを叩く、意味：興奮する) 等。
- Ж.Төмөрцэрэн (1974 : 118pp) は「ある成句を成す語彙を別々に取り扱うことができず、個々の意味が失われ、総和的に一つの意味を表す連語を慣用句という」と述べている。例えば、хөх инээд (逐語：青笑い、意味：からかって笑う)、нүдээ жартайлгах (逐語：目を鋭くする、意味：怒り) 等。
- モンゴル科学アカデミー言語学研究所編集 (1986 : 146, 151) “Орчин цагийн монгол хэлний үгийн сангийн судлалын үндэс” には「成句の意味的な単位は単語に相当する。成句の構成要素の一素か全要素が単語の意味を失い、及び個々で文法的な活用や役割がなくなり、意味的に分解不可能な成句を慣用句という」と記述されている。
- Б.Сумьяабаатар (1986 : 148-151) は「語彙的に構成要素の一部か全体が単語の意味を失い、統語的に文法上の役割を果たせなくなり、分解不可能な成句を慣用句という」のように定義している。
- Н.Нансалмаа (2005 : 147) “Үгийн сан судлал” は、「慣用句は文法上、定型的に構成され、一つの単語の役割を果たし、総和的に一つの独特な意味を持つ言語単位・総和語である」と述べている。
- Ц.Өлзийхутаг (1973 : 91) “Монгол хэлний үгийн сангийн судлал” は「成句の構成要素は意味的に分解不可能であり、単語個々の意味が失われ、総和的に一つの意味を持つ表現を慣用句」と述べている。例えば、хөл алдах (逐語：足を失う、意味：嬉しく歓迎する) 等。

2.1.3 慣用句と諺の違い

日本語とモンゴル語において慣用句と諺の違いは定義されているものの、慣用句辞典に諺が載っていることもあり、両者は混同されているように思われる。

日本語において、土屋（2009：60pp）が慣用表現を定型表現の一部として位置付け、定型表現の下位カテゴリーを精緻化している。そして「慣用表現」と「諺」の特徴と違いについて下記のように記述している。

a/ 形式的に

慣用表現： 語数が殆ど2語以上からなり、末尾が動詞が多く、動詞には命令形使われず、形容詞が「い」という現代形を持つ、助動詞には古語否定辞が少ない。

諺： 語数が主に4～5語からなり、末尾が名詞が多く、動詞に命令形が使用され、助動詞が古語の否定辞で終わる形が多く、形容詞の殆どが「し」で終わる。

b/ 意味的に

慣用表現： 複数の構成要素から成り、一部の表現は語の構成や配列が不明瞭である。また、たとえ語の構成や配列が不明瞭でなくても、表現全体に関連したイベントを表したり、構成要素が比喩的な意味へと拡張している。

諺： 複数の構成要素からなり、語の構成や配列は慣用表現よりも相対的に明瞭かつ分析的である。全体として教訓的な意味を表すが、構成要素の意味が比喩的に拡張している場合と、構成要素の意味がそもそも抽象的である場合がある。

モンゴル語における *Өвөрмөц хэлц*（慣用句）と、*Хэвшмэл хэллэг*（定型表現：諺、謎、格言）の違いは下記のように指摘されている。

- Ц.Өлзийхутаг “Монгол хэлний үгийн сангийн судлал”（1973：91）（モンゴル語の語彙学）では、

a/ 慣用句は表現全体で一つの意味を表すが、構成要素は分解不可能な単位である一方、定型表現の構成要素は一つの単位として扱われない。

b/ 慣用句の構成要素の意味が隠喩的であるが、定型表現の構成要素には隠喩的な意味がない。

c/ 慣用句は外国語に直訳不可能であるが、定型表現の直訳は可能とも言える。

- М.Базаррагчаа (1987:94) は、慣用句と諺の違いについて、「慣用句」は語彙的な形成、「諺」は語彙的、かつ統語的な形成を持つと示している。

上記の定義や分類などから、慣用句に関して、日本語とモンゴル語両言語に共通する概念は下記のようにまとめられる。

- i. 二つ以上の語から成るが、文節以上の構成である
- ii. (接合部に他の要素を挿入することを許される場合もあるが) 形式上、基本的に定型的な構成を持つ
- iii. 表現全体で示す意味としては一語であるが、統語上いくつかの構成要素を持つ
- iv. 構成要素全体で一つのまとまった意味を表すものであり、構成語彙の意味から想定しにくい
- v. 語彙・統語的に分析不可能な点、末尾が動詞が多いこと、比喩的な意味が多いこと、さらに教訓的な意味を示さないことなどにより諺とは異なる性質を持つ

上述の通り、日本語とモンゴル語における定義では「慣用句の分析は不可能」と指摘されているが、近年、構成語彙による分析がなされており、個々の意味から慣用句の意味をある程度予測できる可能性について論じられるようになってきた。

諺と違って、慣用句が統語的に分析不可能とされていることは、慣用句が固定された表現である概念に有効であろう。しかし、その固定化を成す各要素の役割は軽視されており、その分析は欠かせないものであると考える。

2.2. 日本語とモンゴル語における身体語彙慣用句について

2.2.1 身体語彙慣用句の概念

本節では、身体語彙慣用句に関する先行研究を整理し、身体語彙を構成要素にする慣用句の概念やその位置づけについて示しておきたい。

「身体語彙」とは、基本的に人間の身体の各部位を示しており、人間の一番身近なものとしての性格が強く、人間の感情や微妙な心理状態には関わりが深いものである(林、2002:5)。

「身体語彙による表現」とは、人間の身体やその部位を指示する名称を使用しながら、身体の状態・活動を直接指示するというよりは、むしろ別の精神状態や活動を暗示的かつ比喩的に示している。従って、「身体語彙慣用句」とは、身体語彙をもとになされる慣用句

のことである（星野、1976：155）。

身体語彙慣用句数と、その範囲は取り扱う分析や辞書などによって様々である。森田（1966）は、身体を用いた語彙が 300 語以上あり、身体語彙を用いた慣用表現が日本語の慣用表現の 23.4%を占めているという。

程（1996）は、『慣用句辞典』（1991）に載っている慣用句を調べた結果、3500 項目も収録され、その中で人の体に関する慣用句が 747 句あり、所載総数の 38%を占めていることを明らかにしている。その中では「目」の慣用句が 87 項で一番多い。

林（2002）は、先行研究を通して慣用句総数を調べた結果、慣用句の中で身体語彙慣用句の占める割合が、研究者により多いものは 30%あまり、少ないものは 25%前後と、平均として全体の約四分の一を占めることを明らかにしている。林（2002）では、身体語彙を、基本的な身体部位である一次的なもの、一定の部位とは言いにくい性格のものとなる「ほくろ、しわ、しみ、えくぼ」などの二次的なものとして扱っている。一次的なものは捉え方によって、さらに二つに分けられる。身体の各部位を部分として捉える場合、例えば「頭・首・顔・目・口・鼻・耳・胸・腹・肩・手・足」など、身体の全体を指す「身・骨・毛・皮・肌・筋・血・神経」などに分けられる。

和田（1967）は、体ことばとして 65 項目に及ぶ身体語彙を挙げている。その中には身体部位名称だけでなく、身体の排泄物、必物なども含まれている。

星野（1976）は、身体語彙として身体部位を表わす語彙と、それから派生した「力、熱、痛み、血、涙、汗、へど、息」、さらには「気」も身体語彙による表現に含めてさしつかえないであろうとして広く捉えている。

宮地（1988）は「常用慣用句一覧」全 1261 表現の内、身体部位詞を含む表現が 498 例であり、圧倒的に多いことを明らかにしている。

一方、モンゴル語の場合、身体語彙慣用句数を確定したデータは見当たらないため、Г.Аким（1999）”Монгол өвөрмөц хэлцийн товч тайлбар толь”を対象に調べた結果、収録されている 1393 項目の内、人間の身体部位名称を使った慣用句は全 72 項目（内臓名称などを含めて）の 605 句があり、身体語彙慣用句は全項目の 43.4%を占めている。

「目」を含む慣用句について、その位置づけを「頭部」に関する慣用句の中での比率により把握したものは、表 1 に示した通りである。以下、表 2 は日本語の慣用句の各部位にモンゴル語の相当する部位項目を記したものである。

表 2 日本語とモンゴル語の「頭部」語彙の慣用句数や順

順	数	日本語の部位	モンゴル語の部位	数	順
1	176	目	нүд	128	1
2	97	口	ам	102	2
3	45	耳	чих	33	6
4	41	鼻	хамар	12	7
5	36	顔	нүүр/ царай	36/13	5
6	35	頭	толгой	58	3
7	22	舌	хэл (хэл ам)	51	4
8	16	歯	эрүү	9	9
9	10	顎	шүд	10	8
10	9	眉	дух/магнай	5/ 3	10

出所：笠川（2007）、S.Oyunzul（2010）を参考に作成

表 2 から分かるように、日本語とモンゴル語ともに一番多いのが「目」と「口」を含む慣用句であり、両言語で 1 位と 2 位である。

その次に「顔」と「耳」を含む慣用句が多く、慣用句に広く使われる身体部位であることが分かる。その他の部位に関しては、日本語とモンゴル語両言語における「鼻」、「舌」、「頭」を含む慣用句はその数において差が大きく、一方、「歯」「顎」「額」を含む慣用句はその数が少ないことが共通しているように見える。

このように、日本語とモンゴル語に豊富に存在している「目」を含む慣用句を対象語彙の中心にしていく。

2.2.2 「身体語彙慣用句」に関する先行研究

モンゴル語における身体語彙慣用句研究は、慣用句の意味分類や意味説明に留まっている。近年では外国語との比較対照研究がされているが、意味成立の動機づけや統語的分析に関する研究は無いと言えよう。日本語においては日本語と外国語との比較対照考察が一般的であり、近年では身体語彙慣用句の意味分析や意味成立の動機づけを認知的な観点から説明する傾向にある。

以下、日本語の身体語彙慣用句と、日本語の身体語彙慣用句を英語、中国語、韓国語、モンゴル語との対照比較研究を参照する。先行研究は以下の通りである。

a/ 日本語を対象とする慣用句研究

I. 日本語の身体部位詞の意味的役割

伊藤 (1999) 「慣用句の具象性についての一考察」

目的：日本語の身体語彙慣用句の意味成立のプロセスに関わる分類を行い、その性質を確定し、身体部位の典型的行為に基づく可能性についての議論

対象：日本語とドイツ語の身体部位詞を構成要素に持つ慣用句・慣用連結句

方法：身体部位詞慣用句の意味成立に関する分析、分類、定義

結果：身体部位詞慣用句の意味成立に関わる性質を三つ（身体部位の具象性・身体部位の典型的な機能・身体部位の典型的機能にとっての不都合性）に分類している。その中、慣用句の比喩的意味と具象性¹を定義し、比喩的意味を持たない慣用句の意味は、それらの具象性に基づくことを主張している。従って、身体部位の典型的行為・機能が喚起し、慣用的意味の成立に重要な要因であることを示している。

II. 日本語の身体語彙慣用表現の統語的・意味的固定性の関連について

有菌 (2009) 「身体部位詞を構成要素に持つ日本語慣用表現の認知言語学的研究」

目的：日本語の身体部位詞を構成要素に持つ慣用表現の分類や、意味的分解可能性と統語的固定性の関連性と意味成立の認知的プロセスを主張し、身体部位詞を構成要素に持つ慣用表現の性質を明らかにすること

対象：日本語の身体語彙慣用表現

方法：認知言語学アプローチによる主要概念の整理と分類、慣用的連結句と慣用句区別分類、身体部位詞を構成要素に持つ慣用表現の統語的固定性と意味成立関連に対する分析、考察

結果：慣用表現の文字通りの意味と意味成立の認知プロセスの関連性が我々の日常的経験に動機付けられていることを明らかにし、慣用表現における身体部位詞の意味拡張の基盤としての「行為のフレーム」を設定した上でその拡張の過程を論じている。さらに、統語的固定性に対する意味的分解可能性の影響を確定し、また慣用表現に対する文法操作の適応性を的確に捉えている。

以下、日本語と外国語の身体部位詞を含む慣用句の比較対照研究を述べる。

¹ 比喩的意味：慣用句の中で、意味的に中核的機能を果たしている構成要素が担っている比喩的意味； 慣用句の具象性：「慣用句の中でそれぞれの構成要素が、その文字通りの意味により表している事柄」（伊藤 1999：95-97）

b/ 日英語の対照研究

I. 身体語彙を含む日英イディオムの数量分析

笠川 (2007) 「身体語彙を含むイディオムの日英比較」

目的： 日本語と英語の身体語彙慣用句の用例数、腹、腰、頭、目の慣用句の捉え方の違
について比較分析

対象： 人間の主要部位30種類を含む慣用句として日本語の985例、英語の1031例

方法： 数量的分析、意味分析

順位	日本語	英語	順位	日本語	英語
1	目	hand	6	耳	finger
2	手	head	7	足	ear/nose
3	口	eye	8	鼻	nose/ear
4	腹	face	9	尻	tongue
5	胸	foot	10	頭	back

(笠川 2007 : 37-38頁参照)

結果： 日本語と英語と共に数量的に1-10位に入っているのが顔、目、耳、鼻、手、足で
あり、英語で「口」は日本語の3位に対して11位、日本語で「頭」は英語の2位に
対して10位に入っているのが数量の差が大きい部位であった。アメリカやイギリ
ス人は「意識」が頭にあることと、日本人は腹、腰にあると考える思想が慣用句
の捉え方や数量にも反映されている。両言語に「目」の慣用句には多少違いがあ
るものの、捉え方が一般的に似ているのを明らかにしている。

II. 日英語の「目」の慣用句語の意味的分析

石田プリシラ (1996) 「日英語の対照研究 ～目の慣用句を中心に～」

目的： 日英語の慣用句を意味論・語彙論の観点から同異を明らかにする対照分析

対象： 日英語の「目・eye」の慣用句に関する25の「語の場」を設定し、その中から<
注目する>という価値を有する慣用句間の対立により慣用句各々の意味特徴(主
体・対象の関係、注意の範囲、意図性、自動性・他動性など)を取り出した。慣
用句例：(日本語の) 目をつける、目が光る、目を光らせる、目を配る、目が届
く、(英語の) have an eye on, keep an eye on, keep an eye out, keep an eye open, keep
one's eyes skinned, keep one's eyes peeled.

方法： 語彙分析(成分分析)、構造的意味分析

結果： 両方の慣用句には対応しそうなものも見られるが、意味の区切りや意図性、自動性・他動性、対象の現れ方が違う。

c/ 日韓語の対照研究

III. 日・韓両国語の慣用的表現の特性・類型

林（2002）「日・韓両国語の慣用的表現の対象研究」

目的： 身体語彙の特性、類型、範囲規定を通じ、両国語の身体語彙の比較対照

対象： 身体の「頭部」「胴体部」「四肢部」「全身部」との四つの部分に属する 19 項目の日本語の 907 例、韓国語の 626 例の身体語彙慣用句

方法： 辞書用例採取、類型、語彙分析。

結果： 身体語彙的表現を大きく四つの部位に分類し、「概念とのかかわり」「感情とのかかわり」に対して分析を行った。「頭・顔・血・目・胸・首」が 4 割以上の類似率を見せる一方、「腸・腰・尻・腹・鼻・肝」の類似率が僅かしかない。

IV. 日本語と韓国語の慣用表現の分類や意味特徴についての比較分析

李（2007）「日本語と韓国語の慣用表現の差違」

目的： 比較言語文化学立場から日韓慣用表現の類似点と相違点を明らかにし、慣用的表現形式の特徴やその分類を行い、地理・歴史的な背景から両国民の社会・文化・考え方の違いを考察した。

対象： 両国語の文学作品の中から採取した慣用表現の用例

方法： 用例採取、アンケート調査、表現形式分析、慣用表現のタイプ、意味効果、特徴に関する分析

結果： 身体を「頭部」「四肢」「胴体」の三つに分けた身体語彙慣用表現を四つのタイプに分類し、意味的に大きく「概念的意味」「心理的な態度・感情」に分け、意味的な特徴として五つに分類し、さらに意味効果と発せられる状況などを考察している。

両国語の慣用句に関する表現と感情の相違点に関して説明している。例えば、日本語の「水をさす」の場合は、純粋な慣用的表現を用いたタイプであり、意味はネガティブ価値を示し、さらに情報性や隠蔽の効果を示しながら、正しくない行動を表す際の状況にある表現であると示している。

さらに、慣用的表現が用いられる状況や使用効果が異なることを明らかにしている。研究の一部として、準慣用的表現形式を三つの形式（～にする、～をのむ/～をくう、～がたつ/～を立てる）を対象に意味や文法的特徴を考察している。

d/ 日中語の身体語彙慣用句対照研究

V. 中国語と日本語の身体語彙慣用句の数量的分析

支・吉田（2002）「中国語と日本語の身体語彙慣用句の数量的分析」

目的： 日本語と中国語の身体部位名称を含む慣用句について計量的分析を行う。

対象： 合計 55 個の部位名称を含む慣用句を対象とした。そのうち、日本語の慣用句の 55 個の身体部位名称と、中国語の 41 個の身体部位名称

方法： 身体部位別の慣用句を収集し、数量的な順位を並べた

結果： 目、手、口、顔に関する慣用句は両言語に 1-4 位まで一致していたが、第 5 位に日本語では「腹」、中国語では「頭」が入っていた。上位 10 位の中で、日本語では「胸」「腹」が、中国語では「骨」がそれぞれ入っていることが注目される。身体部位名称を「頭部」「四肢」「胴体」「内臓」「体全体」という五つに分けて、分類した。

VI. 中国語と日本語の「目」の慣用句の意味分析

支・吉田（2003）「中国語と日本語の身体部位名称を含む慣用句についての対照研究 ～目の場合～」

目的： 日本語と中国語の身体部位名称を含む慣用句の中で「目」を取り上げ、意味分類を行う。

対象： 日本語の 155 句、中国語の 101 句を対象とした。国語辞典によって 3 類 18 種に弁別された「目」の多義的な意味を基準に、日中語の目の慣用句はどの語義に由来しているかを検討し、表現のニュアンスを判定している。

方法： 日中言語の目の部位名称慣用句を抽出し、意味の語義ごとに句数を表示し、「目」の意味を日本語では①～⑳種、中国語では（1）～（22）種に弁別している。

結果： 日本語の「目」の慣用句の約半数（47.7%）、中国語の場合 62.4%が目の「物を見る器官」としての意味が維持されていることを明らかにした。その次に、目の「視力」の意味を示す表現が現れる。さらに、表現の意味ニュアンスに関しては、全 155 句の半数がプラスイメージ（日：14 句、中：5 句）や、マイナスイメージ（日：23 句、中：33 句）を示す意味であり、またニュートラル（日：47 句、中：29 句）の意味であることを判明している。中国語は日本語に比べ、目を含む慣用句においてはマイナスの意味が多く、プラスの意味が少ないことが特徴であると示している。

e/ 日蒙語の対照研究

モンゴル語においては、慣用句比較研究が非常に少ない。管見の限り日本語とモンゴル語における慣用句の分析は、その意味解説に過ぎないものが多い。本研究では、日本語とモンゴル語の慣用句を対照研究として、橋本（1999）を参照する。

VII. 日蒙語の慣用句の意味的分析

橋本（1999）「目のメタファー 日本語とモンゴル語の対照研究」

目的： 日本語とモンゴル語の目の慣用句のメタファー分析、比較考察。

対象： 日本語とモンゴル語の目を見出しにした慣用句

方法： 認知言語学の立場から目に関わる慣用句の概念メタファーを一を指摘し、考察を行った。概念メタファーとして「目は〇〇である」と指摘し、慣用句の比喩が生み出される基盤を検討している。

分析：

両言語共通のメタファー

「移動可能な物」： 目が飛び出る、 нүд орой дээрээ гарах（逐語：目が頭のとっぺんの上に出る）

「変化する物」： 目を丸くする、 нүд үзүүрлэх（逐語：目をとがらせる）

「容器」： 目に入る、目から鱗が落ちる、нүднээс гал бутрах（逐語：目から火が出る）

「所有物」： 目を盗む、目がない、нүд булаах（逐語：目を奪う）

「液体」： 目を注ぐ、 нүдний хор орох（逐語：目の毒が入る）

「特定の状態を持つ」： 目が高い、目が堅い、 нүд муутай（逐語：目が悪い）

「感覚器官」： 目に見る、目に物見せる、нүдээр үзэх（逐語：目で見える）

「触覚を持つ」： 目に触れる、目に暖かい、нүдэнд дулаан（逐語：目に暖かい）

「心」： 目を疑う、目の敵にする、нүд сэргэх（逐語：目が生き返る）

日本語特有のメタファー

「道具」： 目で殺す、目で合図をする

「場所」： 目に角を立てる、目に付く、目に留まる

「口」： 目の薬、目が物を言う

「食物」： 目を食わず

「布」： 目をさらす

「畑」： 目が肥える、目を肥やす

モンゴル語特有のメタファー

「家畜」: нүд хужирлах (目に塩を与える)、 нүд тайлах (目を解く)

結果: 目の機能が視覚に留まらず、認知的なプロセスによる拡張である中、日本語の「場所」や「移動」のメトニミーが特徴的で、モンゴル語には文化的な要因を媒介にした「所有物」と連結している等の異なる点がある。両言語ともに人間の概念による類似性に動機付けられていることが設定されている。

2.3 本章のまとめ

日本語とモンゴル語における慣用句の定義を調べたところ、慣用句について共通する概念を持つことが分かった。

日本語において、宮地 (1982 : 238) は「語の二つ以上の連結体であって、その結びつきが比較的固く、全体で決まった意味を持つ言葉」と定義している。他に、国広 (1985) においても「二語以上の連結使用が固定しており、全体の意味は構成語の意味の総和から出て来ないもの」とし、初山 (1997 : 30) は「複数の語の連結使用が固定しており、全体の意味は、個々の構成語がその連結の一部でない時に持つ意味の総和からは導き出せないもの」とし、田中 (2002a:6) では「その構成語の基本的な意味から直接に予測される意味とは多少とも異なる意味を表現全体として表すもので、しかもその意味と形式の結びつきが慣習的に定着している表現である」とそれぞれ定義している。

モンゴル語の慣用句 (Өвөрмөц хэлц) に関して、Г.Аким (1985 : 3) では「慣用句とは、当言語においては構成要素の単語の意味が失われ、表現全体で一つの意味を表す固定的な結合語」である。さらに、Д.Бадамдорж (2006 : 124, 141) では「慣用句とは、意味においてその構成要素単独の意味が失われ、総和した一つの意味や概念を表し、当国民の思想や生活、習慣、慣習、宗教などを反映した定型的な総和表現である」とし、Ж.Төмөрцэрэн (1974 : 118pp) では「ある成句を成す語彙を別々に取り扱うことができず、個々の意味が失われ、総和的に一つの概念を表す連語を慣用句という」とし、Б.Сумьяабаатар では (1986 : 148-151) 「語彙的に構成要素の一部か全体が単語の意味を失い、統語的に文法上の役割を果たせなくなり、分解不可能な成句を慣用句という」のように定義している。

以上から日本語とモンゴル語の慣用句について、下記のようにまとめられる。

- i. 二つ以上の語から成るが、文節以上の構成である
- ii. (接合部に他の要素を挿入することを許される場合もあるが) 基本的に、定型的な形式構成を持つ
- iii. 表現全体で示す意味としては一語であるが、統語上ではいくつかの構成要素から成る

- iv. 表現全体で一つのまとまった意味を表すものであり、構成語彙の個々の意味からは想定しにくい
- v. 語彙・統語的に分析不可能な点、末尾が動詞が多いこと、比喩的な意味が多いこと、さらに教訓的な意味を示さないことなどにより諺とは異なる性質を持つ

両言語の身体語彙慣用句に関する先行研究を整理し、身体語彙を構成要素にする慣用句の概念やその位置づけについて確認した。

各言語において身体語彙慣用句は圧倒的に多く、日常的によく使われていることが知られているが、日本語とモンゴル語も同様に観察される。

身体部位の名称から内臓の名称までに、さらに身体の排泄物や気なども身体語彙慣用句に用いられており、従って、対象範囲においては研究者により様々である。日本語の身体語彙慣用句の数量確定として、程（1996）では、全慣用句数の38%を身体語彙慣用句が占めており、林（2002）は、25～30%あまりであると確定し、宮地（1988）では、およそ4割が身体語彙慣用句であることを確定している。

モンゴル語の場合、身体語彙慣用句数を確定したデータは見当たらず、Г.Аким（1999）”Монгол өвөрмөц хэлцийн товч тайлбар толь”を対象に調べた結果、身体語彙慣用句は全項目の43.4%（全1393項目の内、内臓の名称などを含めて72項目）を占めることが明らかになった。その内、日本語とモンゴル語ともに一番多いのがI位を示す「目」であり、次に「口」を含む慣用句である。

先行研究に対する考察をまとめると、身体語彙慣用句に関する研究は日本語の身体語彙慣用句を外国語と対照比較し、数量・形式・意味に対する同異が検討されることが殆どであり、さらに日本語の身体語彙慣用句の意味成立のプロセスや動機付けに着目している研究も進んでいる。そこで、上述している先行研究らの研究方法は下記の四種に分けられる。

- ① 身体語彙慣用句の数量的分析・身体部位詞や意味に対する分類
- ② 日本語の身体語彙慣用句の外国語との対照比較分析による意味的説明・比較考察
- ③ 身体語彙慣用句の意味成立のプロセスに対する分析や意味成立の動機づけの検討
- ④ 身体語彙慣用句の意味的分解可能性と、それに伴う固定性と統語的固定性の関連性に対する議論

対照比較研究に対して、林（2002）、李（2007）の分類や分析方法や、支・吉田（2002）と、笠川（2007）の慣用句の数量的分析資料、石田（1996）が論じている慣用句の意味特徴などを参照しながら、日本語とモンゴル語の身体語彙慣用句の数量的・形式的な分析を行っていく。日本語とモンゴル語の比較研究では、橋本（1999）が検討している両言語の慣用句の意味成立プロセスの分析用例を参照し、モンゴル語の「目」を含む慣用句を中心にそれらの文化的な背景も視野に入れて考察することを目指す。

日本語の慣用表現における意味と統語の関連性に関して、伊藤（1999）による身体語彙慣用句の意味成立のプロセスに現れる「具象性」、有菌（2009）の慣用表現の統語的固定性と意味的固定性の関連性についての議論などを参照とし、日本語とモンゴル語の身体語彙慣用句における統語的分析を進める。

上述の通りに先行研究を述べてきたが、各章それぞれにおいて関連される先行研究や議論をさらに詳しく述べていく。

第3章.

日本語とモンゴル語の「目」を含む慣用句の品詞的・

統語的構成に対する対照分析

3.1. 両言語における「目」を含む慣用句の品詞的構成

日本語とモンゴル語の句や文の成立は重要な役割を果たす格助詞には類似点も多いが、対応しない点も少なくない。

日本語とモンゴル語は文法構造が似ているがゆえに、慣用句の構造においても大きな差は見られないと考えられがちである。しかし、慣用句の分析の前提として品詞や形式などの構成を分析することが両言語の相違点が明白になり、対照考察を進めるために有効であると思われる。従って、本章では日本語とモンゴル語の「目」を含む慣用句を対象に形式的分析を行い、統語上の相違点を明らかにすることを目的とする。

先行研究によると、日本語の慣用句の構成語彙に対する形式的分類は、慣用句の品詞性に基づく分類が一般的である。伊藤（1989、1992：7）は「慣用句は形式的に、少なくとも2語以上から成り、統語論的、また意味的に一つの統一体を形成し、語と同じような機能を持つ語の結合である」と示している。また、土屋（2009）によると、慣用句の56%が「3語・動詞末尾」の表現であることが特徴的であり、これに対して諺が3語からなり動詞で終了する表現は2%にすぎないという。

以下（表3）は、土屋（2009）の分類である。動詞・名詞慣用句のみを表示する。

表3 日本語の慣用句の構成

末尾語品詞 /語数	～2	3	4	5	6	7	8～	総計
動詞	22	1081	105	97	13	3	1	1322
名詞	37	85	24	26	9	6	4	191
(以下省略)								

出典：土屋（2009:63）参照

表3から見ると、日本語では3語構成の動詞慣用句が56%を占め、一番高い分布率を見せる。このような分類を参照しながら、日本語とモンゴル語の「目」を含む慣用句の形式

に対する対照分析を行っていく。

先行研究の通り、慣用句の形式的構成に対する分類は構成要素の後項である自立語の品詞によって決まるようである。そこで、宮地（1982）、土屋（2009）らに基づき、日本語とモンゴル語の「目」の慣用句の語彙的構造による品詞分類を行うこととする。さらに、固定された構成要素となる助詞や述語による下位分類も考えられ、詳しくは3.1.2において後述する。

分析の対象語彙とする「目」を含む慣用句は、日本語は142句、モンゴル語は114句とする。これらの用例の基本的な構成は「名詞+格助詞+動詞」形である。分析の結果から末尾語の品詞による個数を表4において示す。

表4 日本語とモンゴル語の「目」を含む慣用句の品詞的構成

言語	動詞慣用句	名詞慣用句	形容詞慣用句	合計数
日本語	121	10	11	142
モンゴル語	99	12	3	114
合計	220	22	14	256

表3で示した通り、日本語では動詞慣用句が56%を占めていたが、ここで取り扱う「目」を含む慣用句においては日本語は85.2%、モンゴル語は86.8%を占めている。

上記の通り、動詞が多いことは、文字通りの語彙が目の行為や変化などを表す意味が多く、慣用句の意味に拡張していることが予想される。先行研究においても指摘されている通り、有菌（2009）においては、身体部位を含む慣用句の意味的な拡張プロセスに関して3種に分類している。

- ①文字通りの意味が身体部位の特徴を表す慣用句は人間の性質に関する意味
- ②文字通りの意味が身体部位の特定の行為を表す慣用句は人間の行為に関する意味
- ③文字通りの意味が身体部位の状態を表す慣用句は人間の精神状態に関する意味を示す、という（有菌 2009：248－250）。

「目」を含む慣用句においても、身体部位詞の具体性から生まれる表現を生み出す構成には「動詞」が重要な役割を果たすものであろう。

形式から言えば、両言語ともに ① N+助詞+動詞、② N+助詞+名詞、③ N+助詞+形容詞、が一般的である。

動詞慣用句以外に「名詞慣用句」（日：7%、モ：10.5%）や、「形容詞慣用句」などが現れる。形容詞慣用句は数が少ないが、日本語のほうが僅かに多い。

以下、それぞれの用例を示そう。

① 動詞慣用句 「N+助詞+動詞」

J: 目が明く、目が届く、目を回す、目に浮かぶ、目が飛び出る

M: нүд онгойх, нүд тусах, нүдэнд тусах, нүд хужирлах

② 名詞慣用句 「N+助詞+名詞」

J: 目の正月、目の毒、目の保養

M: нүдний гэм, нүдний хор, нүдний булай

③ 形容詞慣用句 「N+助詞+形容詞」

J: 目が早い、目が高い、目が長い、目がない

M: нүдэнд дулаан, нүдэнд хүйтэн, нүд дүүрэн

このように日本語とモンゴル語は慣用句構成が似ており、つまり「動詞慣用句」、「形容詞慣用句」、「名詞慣用句」や、さらに「副詞慣用句」が共通に見られ、数量的にも近い。

しかし、基本的な構成が似ているとは言え、慣用句の意味が一致するとは限らない。構成要素の意味から予想できないのが慣用句の特徴であり、各言語における慣用句は当該言語ならではの背景や特徴を持っている。殆どが語彙的構成においては類似しているが、構成語彙が類似すれば統語的に異なり、統語的に類似すれば意味が異なる場合も少なくない。例えば、

a. 「目が鋭い」 = нүд хурц (逐語：目が鋭い)

両言語は同様に「形容詞慣用句」であり、構成語彙の形容詞が同一であるが、意味は異なる表現である。日本語の場合は<目付きが厳しく、人の心に突き刺さるような様子>を言い、感情を表す。モンゴル語の場合<鑑識力が高い>、「目が速い」という意味であり、目の様子で現れる感情とは無関係となる。しかし、感情とは無関係に、元々視線が鋭い人の目の様子を言う場合は、хурц нүдтэй (逐訳：鋭い目を持つ) というように、統語的構成が変わっていく場合もある。

b. 「目に余る」 = нүд алдрам (逐語：目が見渡らぬ)

両者とも「動詞慣用句」であり、意味も類似している。ただし、動詞の活用形には差が見られ、モンゴル語は「副詞慣用句」となる。

このような統語的固定性に多少差が生じるのは当然なことであろうが、その差が意味を左右させる機能を含んでいるのではないかと思われる。

両言語の対象慣用句における基本的な構造は似ているようであるが、意味的・統語的な分析により相違点がより詳しくなることを期待する。近年、慣用句の構成語彙の分解可能性が指摘されているが、語彙の意味からは十分に理解されないこともあり、その一面として統語的要素の分析が必要であると考えられる。統語的分析について以下の第3章、第4章で記述する。

3.2 両言語における「目」を含む慣用句の統語的構成

モンゴル語は類型論上膠着語に属し、文構造においては語順が日本語と同様に「主語—補語—述語 (SOV)」である。モンゴル語には主格、属格、与格、対格、奪格、造格、共同格という日本語の格助詞用法に似ている7種の格助詞が存在しており、用法も類似している。モンゴル語には形式として「格語尾」と「ゼロ形」(以下、表等における記号は「 \emptyset 」形とする)が存在している。

特に、主格や対格は「ゼロ系」で表されるのが多いため、日本語の書き言葉の用法と違って、話し言葉の用法に近いように考えられる。しかし、両言語の慣用句における主格と対格の用法に目立つ差がないものの、モンゴル語は主格と対格に所有接辞か他の特殊接辞を後続する用法も現れ、注目される。

このような格助詞だけではなく、他の接辞も伴う用法がモンゴル語独特ではあるが、これらが句や文の意味に影響を及ぼすものではないかと考えられる。慣用句は統語的に固定されていることが先行研究等において論じられているが、その固定性の構成要素の役割に対する研究はまだなされていないようである。両言語の慣用句は基本構造において似ているように見えるが、統語的な詳細な分析により慣用句の意味成立の一面も見えることと考えられる。従って、ここでは第4章の前提として、日本語とモンゴル語の対象動詞慣用句を中心に統語的構成の分類や分析を行う。

2.1 で慣用句の定義及び概念について述べたが、ここで、慣用句の統語的固定性について確認しておく。

文法辞典(2001)によると「慣用句とは、いつも一続きに用いられる、二つ以上の単語から成る表現が、全体として、もとの語同士の意味的な結びつきを超えた、ある固定した意味を表すのに用いる句である」という。

伊藤(1992:7)では「慣用句は形式的に少なくとも2語以上から成り、統語論的また意味的に一つの統一体を形成し、語と同じような機能を持つ語の結合である」と示される。第2章でも見てきた通り、慣用句は統語的かつ意味的に固定されたということが強調されつつある。さらに、伊藤(1992)では、慣用句の統語上の特徴として三つの性質を指摘している。これに関しては、村木(1985:15-18)においても、伊藤(1992)が指摘している三つの性質に加え、「特殊性」、「単語なみ」の特徴も現れることを提案している。

これらの特徴を表5においてまとめよう。

表5 慣用句の統語的・意味的な性質

	性質	説明	用例	出典
1	不透明性	意味のレベルでの特徴であり、慣用句を構成する要素の意味と、慣用句全体の意味の間に関連性がない	猫を被る	伊藤 (1992 : 7)
2	固定性	構造的、統語的特徴であり、慣用句の構成要素を別の要素に置き換えることができない		伊藤 (1992 : 7)
3	既製品性	語彙的な特徴であり、慣用句が一つの語彙単位と同様に、統一体として文の中で繰り返し用いられる		伊藤 (1992 : 7)
4	特殊性	(一部の慣用句は) 構成要素の結びつきが不規則で、つまり自由な語結合の法則から外れている	道草をくう	村木 (1985 : 15pp)
5	単語並み	慣用句は二つ以上の連続体であるにもかかわらず、レキシコン上にはひとまとまりの単位であり、語のレベルである		村木 (1985 : 15pp)

慣用句の一般的な意味や統語上の特徴が示されているが、これらの性質には程度があり、慣用句ごとに絶対的なものでもないということも示されている。例えば、不透明性の程度が低いものとして「目を落とす」「目を向ける」などが挙げられ、構成要素の意味の間に関係が認められる場合もあることを指摘している。

先行研究によると「慣用句の構成要素を別の要素に置き換えることができない」のように、統語的な「固定性」が挙げられている。この「固定性」により「単語並み」や「既製品性」が導かれているかと思われる。

慣用句の「固定性」について、村木（1985 : 15-18）ではさらに三つのレベルにおいて説明している。

① 意味の非分解性

単語の意味が失われて、全体で新たな一つの意味を表す。例：泡をくう

② 統語上の拘束

構成要素の間に他の言語形式が入りにくい、名詞と動詞を入れかえ不可能、名詞が自由に連体修飾をうけない、構成要素の一つを類義語や対義語で置き換えない等、として内容と形式の両方の側面から指摘している。例：泡をくう ×「くう泡」、×「白い泡をくう」などの構造が不可能

③ 形式上の拘束

一部の慣用句のみに現れる一定した形式。例：「泡をくう」慣用句の「を」を他の助詞にとりたてることができない。助詞以外には、動詞の語形もある特定のものに制限されることがある。例えば、「気にくわない」のような否定形のみ等。

慣用句の先行研究ではこのように慣用句の「固定性」が強調されており、統語・形式的に拘束されている表現であることが示されている。従って、本研究では、村木² (1985)、伊藤³ (1992) が示している「固定性」の特徴を参照とする。

日本語の慣用句の「統語的固定性」については飛島 (1982)、石田 (2000)、有菌 (2009) らが分析し、文法操作適応による階層やその制限を確定し、さらに意味と統語の関係性について論じている。

しかし、慣用句の特徴に従い、慣用句の固定性を成す一面である統語的構成に対する分析が軽視されているため、そのような分析の可能性に視点を向けることが、特に各国語間の対照比較分析においては当該言語の特性を見せ、相手言語との相違点も浮き彫りになることと思われる。

従って、本研究で対象とする両言語の慣用句の統語的構成の対照分析をはじめ、当該言語独特に現れる統語的な構成に着目していく (統語的な分析は第 4 章参照)。

そして、両言語の統語的構成の対照分析を「動詞慣用句」を中心に行っていく (3.2.1 や、3.2.2 参照)。

3.2.1 両言語における「動詞慣用句」の構成

ここで、両言語共に 8 割以上を占める「動詞慣用句」の統語的な構成における助詞分布を対照する。対象にする全ての慣用句は「目」が主語の動詞慣用句である。形式は基本的に「名詞+格助詞+動詞」である。ここで取り扱う用例と分析は、慣用句辞典や文法辞典などを参照しながら、両言語における対象慣用句の統語的な分析を示す表を作成した。

まず、日本語の動詞慣用句を二種に分け、統語的な構成要素の分布を示す (表 6a, 6b)。分類の一つは、日本語における「目が明く」「目を落とす」「目も当てられず」などの構成要素が動詞の「動詞慣用句」であり、全て 107 句が存在している (表 6a)。

もう一つは、構成要素の後項は名詞や形容詞が助動詞などにより動詞形に活用される慣

² 村木 (1985 : 15-18) 「構成要素の間に他の言語形式が入りにくい、名詞と動詞を入れかえ不可能、名詞が自由に連体修飾をうけない、構成要素の一つを類義語や対義語で置き換えない」;

³ 伊藤 (1992 : 7) 「構造的、統語的特徴であり、慣用句の構成要素を別の要素に置き換えることができない」

用句を「その他の動詞形慣用句」とし、そこには14句が現れる(表6b)。この場合、慣用句の構成は「名詞+形容詞+助動詞」や「名詞+名詞+動詞」の構成であり、後項の構成要素は述語活用となる。例えば、「目を丸くする」「目の色を変える」「目に角を立てる」「目から鱗が落ちる」などの場合である。「その他の動詞慣用句」はこのように、名詞構成の場合は述語が「目」に直接関係せず、形容詞構成の場合は述語が使役形により「目」の変化を示す場合が多いため、動詞構成に比べて動作の性質が弱い点を示すため、「動詞慣用句」とは別に扱うこととする。

動詞の語尾活用形によりいくつかの固定形に分かれるが、日本語は8種(表6a、6b)、モンゴル語は19種(表7)がある。

表 6a 日本語の動詞慣用句

		形式	格助詞対応	数	例
1	主格	N(ガ)+V	N(主格)+V	21	目が明く、目がある、目が飛び出る、 目が解ける
2	与格	N(ニ)+V	N(与格)+V	16	目に入る、目に見える、目に留める、 目に浮かぶ
3	対格	N(ヲ)+V	N(対格)+V	62	目を落とす、目を通す、目を抜く、 目を離す、目を合わす
4		N(ヲ)+V(セル)	N(対格)+V(使役)	2	目を潤ませる、目を遊ばせる
5		N(ヲ)+V(セナイ)	N(対格)+V(可能)(否定)	1	目を離せない
6	助詞	N(モ)+V(ズ)	N(係助詞)+V(否定)	3	目もくれず、目もふらず、目も及ばず
7		N(モ)+V(ラレズ)	N(係助詞)+V(受身)(否定)	1	目も当てられず
8		N(ニ)(モ)+V(ヌ)	N(与格)(係助詞)+V(否定)	1	目にも留まらぬ
					合計 107

表 6b その他の動詞慣用句

9	主格	N(ガ)+N1(ヲ)+V	N(主格)+N1(対格)+V	1	目が物を言う
10	属格	N(ノ)+N1(ガ)+A (ナル)	N(属格)+N1(主格)+A(助動 詞)	1	目の前が暗くなる
11		N(ノ)+N1(ヲ)+V	N(属格)+N1(対格)+V	2	目の色を変える、目の玉を食う
12		N(ノ)+N1(ニ)+V	N(属格)+N1(与格)+V	1	目のやり場に困る
13	与格	N(ニ)+N1(ヲ)+V	N(与格)+N1(対格)+V	1	目に角を立てる
14	対格	N(ヲ)+A(スル)	N(対格)+A(助動詞)	2	目を丸くする、目を細くする
15		N(ヲ)+A(サセル)	N(対格)+A(使役)	1	目を白黒させる
16		N(ヲ)+N1(ニ)+V	N(対格)+N1(与格)+V(助動 詞)	2	目を三角にする、目を皿にする
17	奪格	N(カラ)+N1(ガ) +V	N(奪格)+N(主格)+V	2	目から火が出る、目から鱗が落ち る
18		N(カラ)+N1(へ) +V	N(奪格)+N(方向格)+V	1	目から鼻へ抜ける
					合計 14
		総計		121	

表 7 モンゴル語の動詞慣用句

		形式	格助詞対応	数	例
1	主格	N(∅)+V	N(主格)+V	26	нүд онгойх, нүд сэргэх, нүд тусах, нүд хужирлах
2		N(∅)+V+Adv	N(主格)(所有)+V+Adv(程 度)	1	нүд нь унах шахан
3		N(∅)+V(-iin)+Adv	N(主格)+V(属格)+Adv(時 間)	1	нүд урвуулахын хооронд
4		N(∅)(ni)+V	N(主格)(所有)+V	9	нүд нь гялалзах, нүд нь гүйлгэнэх, нүд нь улаанаар эргэлдэх
5		N(∅)+V(-gui)	N(主格)+V(否定)	1	нүд гүйцэхгүй
6		N(∅)(ni)+V(-gui)	N(主格)(所有)+V(否定)	1	нүд нь цадахгүй
7	属格	N(-nii)+N1()+V	N(属格)+N1(対格)+V	3	нүдний хор гаргах, нүдний хор орох, нүдний гал буурах

8		N (∅) +V	N(対格)+V (終止)	21	нүд үзүүрлэх, нүд хариулах, нүд ирмэх, нүд буруулах
9		N (∅) (-ee)+V	N (対格) (所有) +V (使役)	17	нүдээ эргэлдүүлэх, нүдээ аниад өнгөрөх, нүдээ бүлтийлгэх
10	対格	N (∅) (-ee)+V(-tel)	N (対格) (所有) +V (程度)	1	нүдээ ширгэтэл
11		N (∅) +V(-gui)	N (対格) +V (否定)	2	нүд салгахгүй, нүд цавчилгүй
12		N (∅) (-ee)+V(-uu)(-gui yu)	N (対格) (所有) +V (選択)	1	нүдээ хуулав уу, үгүй юу
13		N (∅) (-ee)+V (-sen) +met	N (対格) (所有) +V (過去) +よう	1	нүдээ тэвхдсэн мэт
14		与格	N(-nd)+V	N(与格)+V	8
14		N (-n) (-ee)+V	N(与格) (所有) +V	1	нүднээ үзэгдэх
15		N (-nd) (-ee)+V (-gui)	N(与格) (所有) +V (否定)	1	нүдэндээ итгэхгүй
16	奪格	N (-ees) +V	N (奪格) +V	1	нүднээс гарах
17		N(-ees) (ni) +V	N(奪格)+ (所有) + V	1	нүднээс нь унших
18	造格	N (-eer) (-ee) +V	N(具格) (所有) +V	2	нүдээрээ дохих, нүдээрээ инээх
		総計		99	

表 6a, 6b, 7 において、両言語の動詞の末尾の殆どが文中で活用可能であるが、元々固定された活用形で使用される表現の末尾をそのままに示しておく。活用形が固定されている表現として、日本語においては「ーナイ」「ーズ」「ーヌ」などの否定形や、「ーセル・ーサセル」の使役形が目立ち、さらに「受身+否定」、「使役+否定」形も現れる。

一方、モンゴル語には日本語同様の「否定形」が活用固定形で現れ、構成も意味も日本語の同じ場合と変わらない。例えば：「目を離せない」 = 「нүд салгахгүй」（意味：監視する、注目する）

また、動詞の末尾活用により副詞形にするか、動詞に副詞を後続させる表現が見られる。このような場合、動作の程度(時間・空間)を示すものが殆どである。例えば：нүдээ ширгэгтэл (逐語：目がなくなるほど)、нүд урвуулахын хооронд (逐語：目をまたたく間)、нүдээ хуулав уу, үгүй юу (逐語：目が覚めるや否や)

動詞の活用形は上記の通りであるが、以下、動詞慣用句の構成における「助詞」の分布に触れておく（格助詞の対照分析の詳細は第4章にて後述）。

対象用例において、両言語に共通に現れる格助詞は「主格」、「与格」、「対格」であり、

分布率も大きく変わらない (4.2 参照)。それ以外に、日本語特有に「モ係助詞」と、モンゴル語特有に「奪格」や「造格」構成の表現も現れる。

対象使用例の中で、モンゴル語特修法である「格助詞 (ゼロ形) + 所有接辞 (接合語)」などの構成が独特に現れる。それらを「主格」、「対格」使用例に含め、統語的な分析の対象にしていく。

そして、両言語において共通に現れる格助詞使用例を下記 (a~c) に分布率の高い順で並べよう。

a/ 「主格」	日本語	「N+ガ+V」
	モンゴル語	「N+ \emptyset +V」
		「N+ \emptyset +НБ+V」
b/ 「対格」	日本語	「N+ヲ+V」
	モンゴル語	「N+ \emptyset +V」
		「N+ \emptyset +᠑᠑+V」
c/ 「与格」	日本語	「N+ニ+V」
	モンゴル語	「N+НД+V」
		「N+НД+᠑᠑+V」

モンゴル語の場合は「主格」と「対格」に相当する接辞語尾が存在するものの、通常は「ゼロ形」が一般的であることが慣用句においても同様に見られる。さらに、モンゴル語独特に現れる格助詞後続の「接合語」や「接尾辞」使用例も少なくなく、その役割に注目していき、それらに関する分析を後述する (第4章)。

3.2.2 「その他の慣用句」の構成

動詞慣用句以外では「形容詞慣用句」と「名詞慣用句」が両言語同様に現れる。対象にした日本語の142句、モンゴル語の114句の中でそれぞれの割合が下記の通りである。

「名詞慣用句」:	日本語	7% (11句)
	モンゴル語	10.5% (15句)
「形容詞慣用句」:	日本語	6.9% (9句)
	モンゴル語	4.3% (5句)

また、若干の用例を挙げると以下の通りである。

- (ア) 「名詞慣用句」: N+助詞+名詞
 J: 目の正月、目の毒、目の保養
 M: нүдний гэм, нүдний хор, нүдний булай, нүдэн дээр

(イ) 「形容詞慣用句」 N+助詞+形容詞

J: 目が早い、目が高い、目が長い、目が無い

M: нүдэнд дулаан, нүдэнд хүйтэн, нүд дүүрэн

下記、表 8a, 表 8b において「形容詞慣用句」、表 9a, 表 9b では「名詞慣用句」による分析を示す。

表において使用する記号は、N—名詞（主語の「目」）、A—形容詞、N1 と N2—その他の名詞（主語以外）である。

表 8a 日本語の形容詞慣用句

		形式	格助詞	数	例
1	主格	N (ガ) +A	N (主格) +A	8	目がいい、目がない、目が早い、目が高い、目が低い、目が長い、目が堅い、目が近い
2	属格	N (ノ) +A	N(属格)+A	1	目の黒いうち
		合計		9	

表 8b モンゴル語の形容詞慣用句

		形式	格助詞	数	例
1	主格	N (∅) +A	N (主格) +A	3	нүд хурц, нүд муу, нүд дүүрэн
2	与格	N (-nd) +A	N(与格)+A	2	нүдэнд дулаан, нүдэнд хүйтэн
		合計		5	

表 9a 日本語の名詞慣用句

		形式	格助詞	数	例
1	属格	N (ノ) +N1	N(属格)+N1 (主格)	4	目の正月、目の保養、目の毒
		N (ノ) +N1 (ノ) +N2	N(属格)+N1 (属格) +N2	1	目の上の瘤
2	与格	N (ニ) +N1	N(与格)+N1	1	目に正月
3		N (ニワ) +N1 (ヲ)	N(与格) +N1 (对格)	1	目には目を
4	係助詞	N (モ) +N1	N(係助詞) +N1	2	目もあや、目もすまに
5		N(ト) +N1 (ノ) +N2	N(並立助詞) +N1 (属格) +N2	1	目と鼻の先
		合計		10	

表 9b モンゴル語の名詞慣用句

		形式	格助詞	数	例
1	属格	N(-n)+N1	N(属格) +N1	3	нүдэн доор、нүдэн дээр、нүдэн балай
2		N(-nii)+N1	N(属格) +N1	5	нүдний хор、нүдний гэм、нүдний булай、нүдний цөцгий мэт、 нүдний хог
4	与格	N(-nd)(-ee)+N1(-tai)	N(与格)(所有) +N1(所有)	1	нүдэндээ галтай
5		N(-nd)+V (-son) +N1	N(与格)+V(過去)+N1	1	нүдэнд орсон хог
6	所有	N (-tei)	N(所有)	1	нүдтэй
7	否定	N(-gui)	N(否定)	1	нүдгүй
		合計		12	

上記の通りであり、これらの用例を統語的・意味的な分析の際に参照としていく。

形容詞の基本的な形式は両言語ともに似ているが、モンゴル語に比べて日本語の方が形容詞慣用句が多く存在していることが分かる。モンゴル語においては形容詞構成による慣用句が殆ど現れていない。つまり、ここで「目」を主語にする表現のみに絞るため、形容詞構成の異なる表現は除外されている。例えば、日本語の「目が高い」「目が速い」などの表現に対してモンゴル語に「хурц нүдтэй (逐訳：鋭い目を持っている)」というように、「形容詞＋名詞＋格助詞」形式になる。

名詞慣用句の場合は「名詞＋属格＋名詞」形式において共通しており、感情や感情評価などを表す意味が一般的である。その他、日本語における「係助詞」と、モンゴル語における「所有接辞」「否定形」などは特殊に現れ、モンゴル語の「所有接辞」については後述する(第4章)。

このように、日本語とモンゴル語の「目」を含む慣用句の統語的構成を対照した結果、両言語において動詞慣用句が8割を占め、慣用句の構成が基本的に似ていることが分かった。

日本語の動詞慣用句はモンゴル語の動詞慣用句に対応しているが、動詞と名詞を結びつける格助詞の用法や形式に違いが見られ、中注目したいのがモンゴル語の格助詞後続接辞や接合語などの用法であり、その分析が必要である。

従って、ここでの分析を元に統語的な分析を進め、意味との関連性について検討していく(第4章)。

3.3 本章のまとめ

慣用句構成において(3.1)、宮地(1982)に基づき、日本語(142句)とモンゴル語(114句)の「目」を含む慣用句の構成語彙による品詞的な分類や統語的構成による下位分類を行った結果、両言語ともに3語から成る表現が一番多く、品詞的にも近い割合で存在していることが分かった。大多数を示すのが動詞慣用句(日本語85.2%,モンゴル語86.8%句)であり、次に名詞慣用句(日本語7%、モンゴル語10.5%)である。その他に「形容詞慣用句」が僅かな割合で存在している。

統語的な構成においては、一般的に「名詞+格助詞+動詞(名詞、形容詞)」形であり、両言語共通の構成であることが見える。「動詞慣用句」、「形容詞慣用句」、「名詞慣用句」、さらに「副詞慣用句」が両言語ともに近い割合で存在していることが、日本語とモンゴル語は構造が似ていることが固定した構成を持つ慣用句においても維持されるものであることを示す。

統語的な分析の前提として、日本語とモンゴル語における対象の動詞慣用句を中心にその統語的構成を比較分析した(3.2)。その結果、両言語の「目」を含む慣用句において8割以上(日:107句、モ:99句)を示す「動詞慣用句」と、その他に「名詞慣用句」、「形容詞慣用句」、「副詞慣用句」も存在しており、数量的にも大きな差が無い。

両言語共通に「名詞+格助詞+動詞や(形容詞)(名詞)」の形式に構成されるが、日本語においては名詞と形容詞には助動詞を付けることにより表現を動詞形にする表現も現れ、それらが感情に関する意味が殆どであることが注目を引く。

動詞の語尾活用形によりいくつかの固定形が現れるため、それぞれを分類したところ日本語には8種(表6a、6b)、モンゴル語には19種(表7)の固定形が確定される。固定した活用形で現れるのが日本語の「-ナイ」「-ズ」「-ヌ」などの否定形や、「-セル・-サセル」の使役形や「受身+否定」、「使役+否定」形などが目立つ。これに対して、モンゴル語には日本語と同様に「否定」の固定形が現れ、構成も意味も日本語の同じ場合と変わらないようである。例えば、「目が離せない」=「нүд салгахгүй」(意味:監視する、注目する)

また、モンゴル語において、動詞の末尾活用により副詞形にするか、動詞に副詞を後続させる表現も見られる。このような場合、動作の程度(時間・空間)を示すのが殆どである。例えば:нүдээ ширгэгэдл(逐語:目がなくなるほど)、нүд урвуулахын хооронд(逐語:目をまたたく間に)、нүдээ хуулав уу..үгүй..юу(逐語:目が覚めるや否や)

動詞の活用形は上述した通りであるが、以下、動詞慣用句の構成における「助詞」の分布を分析したところ、両言語共通に現れる格助詞は「主格」、「与格」、「対格」であり、その分布率にも大きな差が見られない。それ以外に、日本語特有に「モ係助詞」と、モンゴ

ル語特有に「奪格」や「造格」構成の表現も僅かに存在している。

対象使用例の中で、モンゴル語に現れる特修法である「格助詞（ゼロ形）+ 接合語（接辞）」などの構成が独特に現れる。それらを「主格」、「対格」使用例に含め、統語的な分析の対象にしていく。その対象例の構造は基本的に次の通りである。

a/ 「主格」	日本語	「N+ガ+V」
	モンゴル語	「N+ \emptyset +V」 「N+ \emptyset +НБ+V」
b/ 「対格」	日本語	「N+ヲ+V」
	モンゴル語	「N+ \emptyset +V」 「N+ \emptyset + \emptyset +V」
c/ 「与格」	日本語	「N+ニ+V」
	モンゴル語	「N+НД+V」 「N+НД+ \emptyset +V」

モンゴル語の場合は「主格」と「対格」に相当する接辞語尾が存在するものの、通常は「ゼロ形」が一般的であることが慣用句においても同様に見られる。さらに、モンゴル語独特に現れる格助詞後続の「接合語」や「接尾辞」使用例も少なくなく、その役割に注目していき、それらに関する分析を後述する（第4章）。

動詞以外の慣用句に関しては、形容詞慣用句は日本語のほうがモンゴル語より多いことが観察され、それに対してモンゴル語の形容詞慣用句は「名詞+形容詞」形式が少なく、むしろ「形容詞+名詞（所有接辞）」形式で現れることに構成的な違いが見られるが、ここで「目」を主語にする慣用句のみを対象にするため、形容詞慣用句の構成における相違点は今後の課題としておきたい。

第4章.

日本語とモンゴル語の「目」を含む

慣用句の統語的構成に対する分析

4.1 はじめに

近年の慣用句研究では、慣用句の意味的な分析の可能性が提案されている。それは語彙レベル・句レベルにおける分析により指摘されている。慣用句の統語的な分析に対しては、慣用句の意味成立における構成語彙の分解分析の可能性に基づき統語的な分析もなされている中、統語的な固定性の性質に対する分析が基本となっている。

ここで、慣用句における統語と意味の関連性について示しておきたい。

慣用句は、意味だけでなく、統語的に固定されている表現であり、先行研究などにより慣用句の統語と意味の関係性が指摘されている。

日本語の慣用句に関しては、飛島（1982）、石田（2000）らが、日本語の動詞慣用句に対する統語的な操作の階層を提示している。そして、慣用表現は統語的に凍結しており、その凍結の度合いが慣用表現によって異なるということを明らかにしている。

身体語彙慣用句を対象にする最新の研究においては有菌（2009）がある。有菌（2009）では、慣用表現の意味的分解可能性が、慣用表現の別の特徴である統語的固定性に影響を与えることを身体部位詞 91 の慣用表現に 7 つの文法操作を適応させて示されている。慣用句に対する文法操作の平均適応個数は 2.4、慣用的連結句に対する平均適応個数は 4.8 であることから、意味的分解可能性が統語的固定性に影響を与えるという Gibbs and Nayak(1989)のイディオムの分解に対する仮説が日本語の慣用表現においても有効であるとされている。

そして、「慣用表現の形式が固定していること（統語上の特徴）と、その表現の意味が成立する過程（意味上の特徴）は、一つの表現の別の側面ではあるが、イディオム性という観点から見ると、両者は関係している」と指摘している（有菌 2009 : 87）。

石田（2000 : 38）も、「慣用表現の統語的固定性と意味的固定性の間に相関関係があると考えられ、また統語的固定性はその慣用性の度合いを計るための目安になる」と主張している。ただし、石田（2000）が示す「相関関係」の点に関して、有菌（2009）は「それは相互に作用しあう関係ではなく、一方が他方に影響を与える関係であるということ、つまり、意味的固定性が統語的固定性の程度の相違を生じさせる一因となる」と論じている。

慣用句の先行研究では、慣用句の意味的分解分析可能性の提案だけでなく、慣用句の統語的固定性と意味的固定性の関連性についても議論されており、統語的な固定性については、文法上の制限との関連性において説明されている。

第2章において、日本語とモンゴル語の慣用句の定義において統語的な特徴を示した通り、基本的に「複数の語の連結使用が固定しており、統語・形式的に拘束されている表現である」ことであり、従って、統語的に固定されていることが強調されている。

有菌（2009）が言うように、「慣用表現の統語上の特徴は固定した形式であり、意味上の特徴は表現の意味成立の過程である」とすれば、先行研究らでは統語的構成の固定性（結果）のみに集中しており、その中の各要素の役割が見逃される傾向にある。

今までの慣用句の研究では、固定しているとされる「意味」の分析可能性（構成語彙の分解・意味成立の過程など）が指摘され、統語的な固定性と意味との関連性について包括的議論はされているが、さらに詳細な分析が求められ、それにより意味との関連性がより把握されるのではないかと思われる。

そして、石田（2000）が言う「統語的固定性はその慣用性の度合いを計るための目安になる」という指摘を踏まえながら、統語的固定性の構成要素が慣用句の意味の度合いを計るための目安になり得る可能性を探求したい。

筆者が観察してきた通り、モンゴル語と日本語の慣用句を対応させていくと、基本的な構造と構成語彙から導かれる慣用的意味解釈には支障が少ないものの、当該言語独特な統語的要素の意味が曖昧であり、相手言語に言葉で表されない場合も生じることが分かる。

モンゴル語独特な修辞法である「名詞＋格助詞＋所有接合語」「名詞＋格助詞＋再帰所有接辞」「名詞＋所有接辞」については、そのような用法がない言語においても、モンゴル語においてもこれらの意味に対する認識が乏しい傾向にある。しかし、このような、統語上の構成要素が表現の意味に影響し、特に慣用句の場合において通常の意味よりも独特な意味を表すと考えられ、統語的な構成要素の役割が認識される。

そこで、本章においては、上述した慣用句の意味的固定性と統語的固定性との関連性についての議論を踏まえながら、統語的固定性を成す構成要素が慣用句の意味成立に貢献できる可能性について検討することを目的とする。

分析の際、村木⁴（1985）、伊藤⁵（1992）が示している「固定性」の概念や、石田（2000）、有菌（2009）における意味的固定性と統語的固定性の関連性の主張を参照としていく。

分析において、日本語とモンゴル語の「目」を含む慣用句を対象にし、モンゴル語独特に現れる統語的な構成要素の分析を行い、それらが慣用句の意味成立にどのように貢献しているかについて検討していく。

⁴ 村木（1985：15-18）「構成要素の間に他の言語形式が入りにくい、名詞と動詞を入れかえ不可能、名詞が自由に連体修飾をうけない、構成要素の一つを類義語や対義語で置き換えない」；

⁵ 伊藤（1992：7）「構造的、統語的特徴であり、慣用句の構成要素を別の要素に置き換えることができない」

分析方法は下記の通りとする。

- (4.2) 日本語とモンゴル語の「目」を含む慣用句における「格助詞」構成を分析し、対照する。その中では、両言語ともに一番多く見られる「主格」や「対格」の対応を示しておく。
- (4.3) 日本語とモンゴル語の主格使用例を中心に、モンゴル語特修法である主格後続の所有接合語「**НЬ**」の通常の意味と慣用句における意味を比較した上で、「**НЬ**」が慣用句の意味成立にどのように貢献するかについて論じる。
- (4.4) 日本語とモンゴル語の対格使用例を対象に、モンゴル語独特に現れる対格後続の再帰所有接辞「**-ээ**」使用例を分析し、「**-ээ**」は慣用句の意味成立にどのように影響するかについて検討する。
- (4.5) 日本語の所有構造表現に対応すると見られるモンゴル語の所有接辞「**-тай**」の用法に着目し、日本語の同じ場合と対照し、意味上の相違点を考察する。

このように、モンゴル語の対象慣用句を中心に統語的な各要素が慣用句の意味成立に貢献し得る可能性について議論し、それにより、両言語の相違点がより明白に把握できることを期待する。

4.2 両言語の対象慣用句における「格助詞」構成

慣用句の統語的な分析の基盤として、日本語とモンゴル語両言語の「格助詞」使用状況を対照し、相違点を考察した上で統語的な分析対象例の選択に迫る。格助詞分布率を見るには、3.1.1の通り、日本語とモンゴル語両言語の慣用句を「動詞慣用句」「形容詞慣用句」「名詞慣用句」に分け、その中で動詞慣用句の中で一番多い格助詞である「主格」、「対格」に着目していく。

日本語とモンゴル語両言語でともに8割以上を示している「動詞慣用句」の統語的な構成における助詞分布を見ていくことになるが、対象にする全ての慣用句は「目」を見出し語にした動詞構成の表現である。形式は「N+助詞+V」となる。

図1に、日本語の107句とモンゴル語の95句を対象に、動詞慣用句における格助詞分布を示しておく。

図 1 対象慣用句における格助詞構成

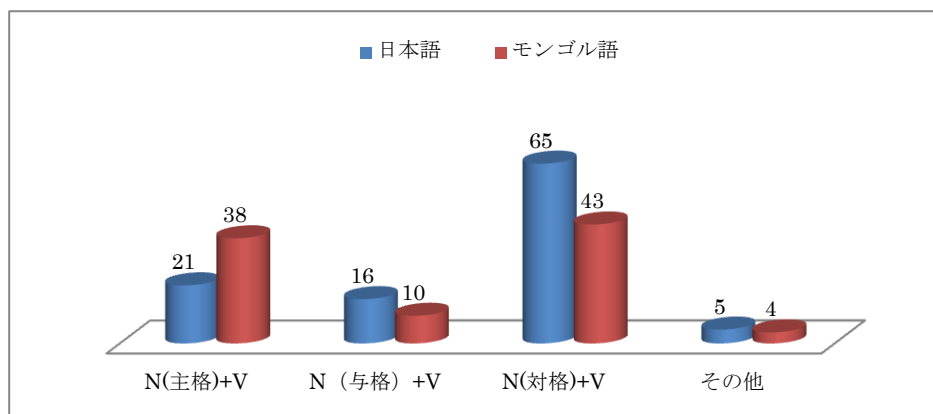


図 1 の通り、日本語とモンゴル語両言語ともに「目」に伴う格助詞は「対格」と「主格」が一番多く、これは両言語の共通点となり得る。格助詞の分布率は以下の通りである。

日本語：	モンゴル語：
対格 60.7%	対格 45.2%
主格 19.6%	主格 40%
与格 14.9%	与格 10.5%

日本語とモンゴル語の動詞慣用句は格助詞構成においては基本的に同様な構成を見せる。両言語ともに「対格」の使用例が一番多いが、「対格」は他動詞に求められる格助詞であり、格助詞の使用は慣用句に使用される動詞の性質により決められているのではないかと考えられる。

このように日本語とモンゴル語両言語では「主格」や「対格」のみの慣用句構成が基本的な構造が同様であるものの、モンゴル語は日本語とは異なる「主格＋所有接合語」、「対格＋再帰所有接辞」という構造を持っており、その意味分析に迫る。

以下、4.2.1において慣用句の「主格＋所有接合語」構成における所有接合語「**нь**」の意味分析を行い、4.2.2において「対格＋再帰所有接辞」構成における再帰所有接辞の「**-ээ**」の意味分析を行い、4.2.3において「名詞＋所有接辞」構成の「ある」や「**-тай**」についての分析を行い、それぞれの慣用句の意味におけ機能について検討していく。

分析に使用する用例は、4.1.1で分析した通り、「表 6a,6b」と「表 7」の用例を中心とする。

4.2.1 「主格」構成の慣用句

日本語とモンゴル語両言語における「主格」使用例は統語的にも意味的にも似ているように見えるが、モンゴル語では「主格」にさらに「所有接合語」が後続される修辭法があ

り、このような日本語には無い要素の役割が注目される。従って、ここで両言語における「主格」や「主格+所有接合語」の用例（表 6a,6b）を対象にする。

日本語とモンゴル語両言語の慣用句において「目が飛び出る」～「нүд бүлтийх（逐語：目が飛び出る）」のように「主格/主格」の対応もあれば、「目が光る」～「нүд нь гялалзах（逐語：目が光る）」のような「主格/主格+所有接合語」のような異なる構成も存在している。これらが示す通り、両言語の「主格」使用例の構造形式は、

日本語では 「N+ガ+V」
 モンゴル語では 「N+∅+V」
 「N+∅+нь+V」

である。

具体的な用例は以下の通りである。

<p><u>モンゴル語</u>：</p> <p>1. нүд_____бүлтийх （逐語：目が<u>丸</u>くなる）</p> <p>2. нүд_____нь эргэлдэх （逐語：（彼の）目が<u>回</u>る）</p>	<p><u>日本語</u>：</p> <p>目が<u>飛</u>び出る</p> <p>目が<u>回</u>る</p>
--	--

日本語とモンゴル語の「主格」は名詞に伴い述語に関係していくという用法は共通しており、形式において、モンゴル語は「ゼロ」形、日本語は「が」であり、基本的な用法や意味においては近いようである。注意しておきたいのは、モンゴル語の「ゼロ」形は主格以外に、対格、方向格にも後続する多用法も持つが、ここでは「主格」用法のみを対象とすることである。

そして、モンゴル語独特に現れる主格使用例は下記、表 10 のようになる。

表 10 モンゴル語の主格使用例

総数	形式	数	用例より
37	N+主格 (∅) + V	27	нүд сэргэх, нүд тусах, нүд бүрэлзэх, нүд бүлтийх, нүд нээгдэх, нүд тайлах
	N+主格 (∅) + 所有接合語 (нь) + V	10	нүд нь эргэлдэх, нүд нь бүлтийх, нүд нь орой дээрээ гарах, нүд нь цадахгүй

このように、合計 37 句の内 10 句が「所有接合語」を伴う。まず、両言語の「主格」使用例の対応を対照しておきたい。

以下、表 11a～11h において日本語をベースに「主格」使用例がモンゴル語のどのような

格助詞構成に対応しているかを見ていく。表 11 は、主な慣用句辞典や本研究対象用例を元に作成したものである。分析として、日本語の主格使用慣用句にモンゴル語の意味的に類似する慣用句を対応させると 7 種に分かれる。

表 11a～11h において、左側は日本語の「主格」構成慣用句であり、右側はそれらに対応するモンゴル語の慣用句であり、共にそれぞれの格助詞や述語の形式や慣用句の意味を示しておく。

表 11a 「主格 = 主格」

項目	日本語	モンゴル語
慣用句	目が明く、目が合う、目が行く、目が曇る、目が冴える、目が覚める、目が吊り上る、目が閉じる、目が留まる、目が届く、目が飛び出る、目がない	нүд онгойх, (харц тулгарах), нүд явах, нүд бүрэлзэх, нүд сэргэх, нүд нээгдэх, нүд аних, нүд тавих, нүд бүлтийх, нүдгүй
格・形	主格「ガ」	主格「 \emptyset 」
述語	自動詞	自動詞
意味	視力、視線、好奇心、判断力、行動、感動（驚）生死、認識力、注目、注意、感動（驚）、心情	

表 11 b 「主格 = 主格 + 所有接合語」

項目	日本語	モンゴル語
慣用句	目が輝く、目が据わる、目が散る、目が眩む、目が光る、目が吊り上る、目が飛び出る、目が物を言う	нүд нь гэрэлтэх, нүд нь гөлийх, нүд нь гүйлгэнэх, нүд нь сохрох, нүд нь гялалзах, нүд нь орой дээрээ гарах, нүд нь хэлэх
格・形	主格「ガ」	主格「 \emptyset 」+ 所有接合語「 нь 」
述語	自動詞	自動詞
意味	感情（喜）、状態（マイナス）、無集中力、無判断力、感情（驚）表現力	

表 11c 「主格 = 対格 (対格 + 再帰所有接辞)」

項目	日本語	モンゴル語
慣用句	i. 目が離せない ii. 目が細くなる	i. нүд салгахгүй ii. нүдээ анийлгах
格・形	i. 主格「ガ」 ii. ii. 主格「ガ」	i. 対格「 \emptyset 」 ii. 対格「 \emptyset 」+再帰所有接辞「-ээ」
述語	i. 他動詞 (可+否) ii. 形容詞+ナル	i. 他動詞 (否定) ii. 他動詞
意味	i. 監視 ii. 愛情	i. 状態 (文型により監視) ii. 状態

表 11d 「主格 = 所有接辞」

項目	日本語	モンゴル語
慣用句	目がある	нүдтэй (逐訳：目を持つ)
格・形	主格「ガ」+ アル	所有接辞「-тэй」
動詞	自動詞	(述語化)
意味	鑑識力、認識力	

表 11e 「主格 = 否定接辞」

項目	日本語	モンゴル語
慣用句	目が悪い、目が低い	нүдгүй (逐訳：目が無い)
格・形	主格「ガ」	否定接辞「-гүй」
述・修飾	形容詞	(形容詞化)
意味	鑑識力なし	鑑識力なし

表 11f 「主格+形容詞 = 形容詞+所有接辞」

項目	日本語	モンゴル語
慣用句	目がいい、目が高い、目が利く、 目が肥える、目が早い、目が長い、 目が近い、目が堅い	(нүдтэй, нүдтэй) хурц нүдтэй, гярхай нүдтэй, өлөн нүдтэй, холч нүдтэй, (нүд муутай) , сэргэг нүдтэй
格・形	主格「ガ」	所有接辞「- тэй」
述・修飾	形容詞 (述語)	形容詞 (修飾語)
意味	認識力、鑑識力、識別力、集中力、判断力、視力、身体行動	

表 11g 日本語独特な「主格」使用例

慣用句	格・形	逐語
目じゃない	N+主格「の」+形容詞	(үгч : нүд биш)
目が物食う	N+主格「ガ」+動詞	(үгч : нүд юм идэх)
目が点になる	N+主格「ガ」+助動詞	(үгч : нүд цэг болох)

表 11h モンゴル語独特な「主格」使用例

慣用句	格・形	逐語 (意味)
нүд болох	N+主格「の」+V	目になる (皆に見られる、からかわれる)
нүд төөрөх, нүд унах, нүд хальтирах, нүд дальдирах, нүд хөхрөх, нүд баясах	N+主格「の」+V	目が迷う (見切れない)、目が落ちる (好む、欲しがる)、目が滑る (直視 できない)、目が避ける (目を逸ら す)、目が青くなる (長く待つ、目が 疲れる)、目が喜ぶ (良い物を見て喜 ぶ)
нүд дүүрэн, нүд хурц	N+主格「の」+A	目いっぱい (体型・外見などが魅力 的)、目が鋭い (目が速い、鑑識力が 高い)
нүд нь бүлтэгнэх, нүд нь бүлтэлзэх, нүд нь гурвалжлах, нүд нь гөлөгнөх, нүд нь жартайх, нүд нь хараах,	N+主格「の」+ 所 有接合語「нь」+V	目が丸くなってバチバチする (怖が る)、目を三角にする (怒り)、目が バチバチする (恐れ) 目を鋭くする (怒り)、目が呪う (欲望) , 目が見 えなくなる (無判断力)、目がうずく

нүд нь сохрох, нүд нь хорсох, нүд нь өөхлөх, нүд нь унах, нүд нь цайх, нүд нь цэхийх		(憎む), 目が肥える (無鑑識力)、目が落ちる (好・欲)
нүд нь улаанаар эргэлдэх	N+主格「 \emptyset 」+所有 接合語「 нь 」+V	目が赤くなって回る (怒)
нүд нь цадахгүй	N+主格「 \emptyset 」+所有 接合語「 нь 」+V (否)	目が満たない (不満)

表 11 (a~h) を簡単にまとめると、日本語の「目」を含む慣用句の「主格」使用例は、モンゴル語の「主格」、「主格+所有接合語」、「対格」、「対格+所有接辞」、「所有接辞」、さらに名詞に後続する「否定接辞」などの使用例に対応している。

ここで対象とした全 78 句の内、両言語の合計 60 句が相互に主格構成として対応していることが分かる。それ以外の慣用句を当該言語における特有表現として「11g」と「11h」を別に示した。ここでの分析に基づき、統語的な各要素の用法や意味に関する分析を進めていく (4.3 参照)。

4.2.2 「対格」構成の慣用句

図 1 の通り、日本語とモンゴル語両言語の「目」を含む慣用句においては「対格」(日 : 60.7% ; モ : 45.2%) の使用例が一番多かった。両言語の「対格」使用例の統語的な構成を見ると、モンゴル語では「対格」のみの場合もありながら、「対格」に伴う「再帰所有接辞」の用法も目立ち、日本語と異なる。

従って、ここでは、身体語彙慣用句に現れる「対格」(日本語とモンゴル語の場合) や「対格+再帰所有接辞」(モンゴル語の場合) 用法に着目し、慣用句における統語的な構成要素の意味への影響について検討する。対象となるのが「表 6a, 6b」「表 7」「表 11c」の用例である。

まず、日本語とモンゴル語両言語における「対格」の使用分布を対照考察する。次に、その分析に基づき、モンゴル語の「対格」用法と慣用句の意味への関与についての分析に移ることとする。

日本語とモンゴル語両言語の「対格」は概念や用法が同じであり、名詞と動詞を結び付ける機能である。小沢 (1978 : 34) によると「モンゴル語の対格とは、英文法などで目的格と呼ばれる格で、普通、日本語の「を」で表されるもので、動作の対象を示す格である」という。ここで「対格」が表す意味において主要な「動作の対象」を表す意味として取り

扱うこととする。対格の形式は一般には、日本語は「を」や「 \emptyset 」形であり、モンゴル語は「-ийг」「-г」の語尾や「 \emptyset 」形である。ここで取り扱う慣用句の場合は、日本語は「を」形、モンゴル語は「 \emptyset 」形が現れた。モンゴル語の対格に伴う「再帰所有接辞」の使用例も「対格」使用例に含めて取り扱うこととする。

表 12a, 12b に日本語とモンゴル語両言語における「対格」使用例の統語的分析を示す。

12a 日本語の「対格」使用例

		形式	格助詞対応	数	例
1	対格	N (ヲ) +V	N (対格) +V (終止)	62	目を落とす、目を通す、目を抜く、目を離す、目を合わす
2		N (ヲ) +V (セル)	N(対格)+V (使役)	2	目を潤ませる、目を遊ばせる
3		N (ヲ) +V (セナイ)	N (対格) +V (可能・否定)	1	目を離せない
		合計		65	
4	対格	N (ヲ) +A (スル)	N(対格)+A+ (動詞)	2	目を丸くする、目を細くする
5		N (ヲ) +A (サセル)	N (対格) +A (使役)	1	目を白黒させる
6		N (ヲ) +N1 (二) +V	N(対格)+N1 (与格) +動詞	2	目を三角にする、目を皿にする
		合計		5	

表 12b モンゴル語の「対格」使用例

		形式	格助詞対応	数	例
1	対格	N (\emptyset)+V	N(対格)+V	21	нүд үзүүрлэх, нүд хариулах, нүд ирмэх, нүд буруулах
2		N (\emptyset)(-ee)+V	N(対格)(再帰)+V	18	нүдээ эргэлдүүлэх, нүдээ аниад өнгөрөх, нүдээ бүлгийлгэх, нүдээ ширгээх
3		N (\emptyset)+V(-gui)	N(対格)+V(否定)	2	нүд салгахгүй, нүд цавчилгүй
4		N (\emptyset)(-ee)+V(-uu)(-gui yu)	N(対格)(再帰)+V(選択)	1	нүдээ хуулав уу, үгүй юу
		合計		42	

表 12a、表 12b から分かるように、日本語の動詞慣用句 107 句の内 65 句が「対格」の使用例であり、モンゴル語の動詞慣用句 99 句の内 42 句が「対格」使用例であり、ここで対象とする慣用句の半数を占める。

このように、慣用句における「対格」使用例の割合は対等であり、対格としての意味と役割も類似している。しかし、統語的構成の違いも見られ、モンゴル語の場合は対格のみ

で現れきれない意味を「再帰所有接辞」により表していると認識され、その分析が求められる。

そして「表 12a, 12b」の分析に基づき、以下 4.4 においてモンゴル語の「対格」使用例を中心に「再帰所有接辞」の意味的分析を行っていく。

4.2.3 本節のまとめ

文法構造が似ていることもあり、日本語とモンゴル語の慣用句においても、基本的に SOV 構造が維持される。動詞慣用句構成における格助詞分布率は下記の通りである。

日本語：	モンゴル語：
対格 60.7%	対格 45.2%
主格 19.6%	主格 22.1%
与格 14.9%	与格 10.5%

格助詞自体には大きな差は見られないものの、日本語と異なり、モンゴル語には「主格+所有接合語」「対格+再帰所有接辞」が現れるため、その意味分析に注目していくことを前提に、本節においては「主格」、「対格」構造の慣用句用例を対応させ、対照分析を行った。

まず、4.2.2 で述べた「主格」使用例に対する比較分析から、全 78 句の内、両言語の合計 60 句が相互に「主格」で構成されていることが分かった。その内、モンゴル語において 37 句現れる中 8 句が「主格+所有接合語」構成である。その他に、両言語対応例以外にも「主格+所有接合語」構成として現れたのが 13 句（表 11h 参照）であり、合計 21 句を今後の分析対象例とする。

「主格」使用例の統語的な構成は、日本語では「N+ガ+V」であり、モンゴル語では 1. 「N+ \emptyset +V」、2. 「N+ \emptyset + Hb +V」である。

日本語の主格使用例をベースにモンゴル語の類似の慣用句を対応させると、7 種に分かれる。

表 11a における形式は、日本語は「N+ガ+V」、モンゴル語は「N+ \emptyset +V」と同様の構成であるが、意味は多様であり、①目の機能（視力、視線）、② 能力（認識力、判断力）、③ 身体行動（身体習慣、生死）、④ 感情（驚）、⑤ 注目（好奇心、注意）として表される。

表 11b においては、日本語の「N+ガ+V」に対して、モンゴル語の「N+ \emptyset + Hb +V」構成の慣用句が対応する。これはモンゴル語独特な「主格+所有接合語」構造である。機能や意味的に「主格」自体同様であるが、この要素により表現の意味ニュアンスが左右することが考えられるが、詳しい分析は 4.3 において行う。

表 11b における、両言語共通的に現れる意味は、①感情（喜、驚）、② 心情（ネガティブ状態）、③ 無力（無集中力、無判断力）、④ 表現力（言語力）であり、基本的に、マイナスの意味が多いことが見える。

表 11b～11f において、日本語の「主格」対応として「対格＋再帰所有接辞（- ээ）」、「共同格」、「名詞＋否定接辞」、「形容詞＋所有接辞（- тай）」などの多様対応であり、意味も認識力、鑑識力、識別力、集中力、判断力、視力、身体習慣など、目の機能による能力を示す意味が多いことが分かった。

表 11g～11h においては、相互に対応できない当該言語独特な用例を示す。モンゴル語には「N+ \emptyset + Hb +動詞」形式、日本語には「N+主格(\emptyset)+形容詞」、「N+主格(\emptyset)+助動詞」という形式が現れた。意味はそれぞれの言語において様々であるが、モンゴル語のほうが数も多く、詳しい分析によって意味特徴が現れる予想があり、それに関する分析を後述する（4.3 参照）。

次に 4.2.3 で分析した「対格」使用例の対応や構造についてまとめると、対象慣用句における「対格」の形式は、日本語は「を」形、モンゴル語は「 \emptyset 」形である。両言語の「対格」の用法や意味は基本的に似ているものの、モンゴル語の「対格＋再帰所有接辞」用法が目立つ。つまり、「N+ \emptyset +ээ+V」構成の慣用句である。

表 12a, 12b において、「名詞＋対格＋動詞」の基本形式が共通しているが、日本語において「N+ヲ+V」において動詞が可能形や使役形や否定形などに活用し、形容詞と名詞が助動詞により動詞化されている一方、モンゴル語においては動詞の否定形も現れる。さらに、「対格」構成において「再帰所有接辞」が現れ、相互に存在しない固定性を見せる。

「対格」使用例の意味に関して、4.4 において詳しく分析し、両言語間の慣用句の構成や意味における相違点を明らかにしていく。上記の分析に基づき、両言語の「主格」や「対格」使用例を対象に、特にそれらに後続するモンゴル語独特な「所有接合語」、「再帰所有接辞」や、名詞に伴う「所有接辞」などの意味的分析を行い、慣用句の意味成立への影響について検討していく（詳しい分析は 4.3、4.4、4.5 参照）。

4.3 モンゴル語の対象慣用句に現れる所有接合語「**НЬ**」の意味

4.3.1 はじめに

日本語とモンゴル語は文法構造が似ている言語と言われるが、格助詞には少なからぬ差異が見られ、格助詞が類似の場合においても慣用句での意味が対応しない場合も予想される。特に、モンゴル語において格助詞のゼロ形が頻繁に使われ、それと同時にゼロ形に接合語や接辞を伴うケースも多く、目立つ構成を見せる。

日本語に存在していない「主格+所有接合語」形式が慣用句においても現れ、その意味が注目される。通常の「所有接合語」は所有の意味が基本であると観察される一方、ここで対象とする慣用句は身体部位を含める表現であるため、その所有の意味を強調することが不自然に考えられ、独特な意味を表す性質の慣用句においては通常の所有の意味とは異なるまた別の意味を示すのではないかと考えられる。

両言語の合計 60 句が相互に「主格」構成として対応している中、モンゴル語の 37 句の内 8 句が「主格+所有接合語」構成の慣用句であり、さらにその他に、モンゴル語独特に現れる 13 句も含み、分析対象とする（表 10、表 11b、表 11h）。このように使用度も少なく、その意味がモンゴル語においても日本語においても把握されないため、分析が必要とされる。

対象用例において「主格」構成の慣用句は日本語に「N+ガ+V」形式のみであるが、モンゴル語には 1. 「N+Ø+V」、2. 「N+Ø+нь+V」の二種が現れる。例えば、

1. нүд бүлтийх (逐語：目が丸くなる) 意訳：目が飛び出る
2. нүд нь эргэлдэх (逐語：目が回る) 意訳：(彼の) 目が回る

従って、本節では対象慣用句において「主格+所有接合語」による構成を中心に、つまり、主格後続の「所有接合語」有無の用例を分析し、それらの違いを明らかにすると共に、慣用句に「所有接合語」が使用される必然性を意味的な観点から検討することを目指す。

分析の対象として、「表 11b」、「表 11h」で分析してきた用例を中心に、モンゴル語の「主格+所有接合語」構成要素の意味に着目する。

分析は、まず、モンゴル語の所有接合語「**НЬ**」の所有中心の通常の意味と、慣用句における意味を比較考察する。そして、所有接合語「**НЬ**」は慣用句においてどのような意味を表すかを検討する。

4 章 3 節における分析項目は下記の通りである。

(4.3.2) モンゴル語の所有接合語「**НЬ**」に関する概念や意味

(4.3.2.1) モンゴル語の主格後接の「**НЬ**」の通常の意味

(4.3.2.2) モンゴル語の主格後接「**НЬ**」の慣用句における意味

慣用句レベルにおける「нь」が有無の意味

文レベルにおける「нь」が有無の意味

(4.3.2.3) 分析結果のまとめ

4.3.2 モンゴル語の所有接合語「нь」の意味的分析

日本語とモンゴル語の「目」を含む慣用句において「目が飛び出る」～「нүд бүлтийх」のように「主格～主格」の対応もあれば、「目が光る」～「нүд нь гялалзах」のような「主格～主格+所有接合語」という異なる対応も観察される。形式の相違は下記の通りである。

日本語	「N+ガ+V」
モンゴル語	「N+ \emptyset +V」
	「N+ \emptyset +нь+V」

このような統語的な差が生じる慣用句に関してより詳しい分析が求められる。統語的な分析対象(表 11a-h)の用例を中心に「主格+所有接合語」の通常の意味と慣用句における意味を比較した上で、慣用句の意味に貢献できる可能性を検討する。具体的に、対象用例は、モンゴル語における「主格」や、「主格+所有接合語」の構成用例である。

4.3.2.1 所有接合語「нь」の通常の意味(名詞に後接する場合)

これまでに「所有接合語」と称してきたモンゴル語の「нь」について述べる。

モンゴル語の「нь」における先行研究は、名詞、動詞、形容詞などに後続される基本的な用法記述が多く、名詞に伴う意味においてはその所有性や指示性が強調されるのが一般的である。

モンゴル語における所有接合語の定義によると「人や物を特殊に指示し、一人称・二人称・三人称に所属させる修辞法を<人称所属修辞法>という。三人称所属の接合語は-ньである」(Хүн юмыг бусдаас нь онцлон ялган 1,2,3 дугаар биед хамаатуулсныг Биеийн хамаатуулах ёс гэнэ. 3 дугаар биеийн хамаатуулах нөхцөл <нь> байна. С.Лувсандамба、Л.Дамдинжав 1989 : 48) である。

「-нь」に関して、日本の研究者の間では「所属」や「所有」等のように称しているが、ここでは橋本(2006)に従い「所有接合語」と名称することとする。

そして「нь」に関する先行研究から述べておく。

橋本(2006)では、モンゴル語の「所有接合語(нь)」の特性について指摘されている。モンゴル語の「нь」の意味特性として

- ① 人称性

② 所有性

③ 指示性

という三つが挙げられている。

水野（1991）では、同様の接辞に関して旧新情報や心理接近性（宥め賺す）があることが述べられている。一ノ瀬（1988）では、「**нь**」を人称関係小辞と称し、その歴史的な変化について記述し、「**нь**」が代名詞から発生したにも関わらず、〈人〉だけでなく〈もの〉を表すということが強調されている。

上記の通り、「**нь**」は三人称の所有を表すことが伺われるが、これは一般的な概念であるが、より詳しい分析が必要である。水野（1991）では「**нь**」の〈心理接近性〉の意味が指摘され、新たな観点から分析した研究であり、慣用句における「**нь**」の意味分析にも参照とする。

「**нь**」の用法が範囲が広く、名詞に限らず動詞や副詞や形容詞などにも後続されるため、ここでは名詞に伴う「**нь**」に絞り、その通常の意味を名詞を主語にする単文において分析することとする。

筆者の観察に従うと、談話においてモンゴル語の「**нь**」が「名詞+主格+所有接合語」形式で使用されるときに、次のような意味を示すように思える。

a. 「**нь**」は、所有の意味が低く、焦点を表す役割が高い

- (1) Охин нь ирсэн. ((彼の) 娘が来た)。主題者（所有者）が省略される文においては〈娘〉が既知の情報でありながら、所有の意味も含む。これは「**нь**」の通常概念である。この場合、誰の娘かというより、来たのが誰かという情報に焦点が当てられるのが自然である。
- (2) Батын охин нь ирсэн. (バトの娘が来た) 主題者（所有者）が存在する文には「-ын (の)」により〈娘〉の所有関係者が現れるため、それだけでなく対象者に焦点を当てる機能が働いている。この場合、「**нь**」の三人称対応の意味が薄れていくものと考えられる。

b. 「**нь**」に、待遇表現の意味役割が含意される

- (1) Охин нь сайн байгаа. (娘(～の私)は元気よ) 娘が親に対して、自分をあなたたちの愛する娘であるとのニュアンスを含む表現となる。「私は元気よ」と言う場合より愛情を表す。この場合、所有関係者は二人称（聞き手）であり、指示対象者は一人称（自分）となるが、聞き手を中心に考慮した待遇表現となる。
- (2) Найз нь хийчихье. (友達(～の私)がやろう) の場合、(1) の文と同じように、対話者を対象にし、相手との心理的な近い関係の意味が含まれる。相手に手

伝ってあげたい気持ちと同時に、親しい友達であることを強調する振る舞いである。この場合も、指示対象者は「自分再帰」の一人称である。

このような、(1)、(2)の場合を、吉野(1988)では「共感的同一化⁶」と言い、つまり対話者への心理的一体感を示し、自称者を「**нь**」により親愛表現の一形態にさせている。ただし、このような機能は〈物〉を対象にする場合においては無いようである(吉野 1988 : 84-85)。

- (3) **Бие нь гайгүй ю?** ((あなたの)体はいかがですか) その人の〈身体〉を代表に相手に親しい心理を表し、さらに同調のニュアンスも含む。この場合に関して、吉野(1988 : 84)が言う「この場合において、**нь**が使われることにより対話者に対する労りの感情を高める効果を狙っている」の通りである。人称対応としては、相手の身体に対しての所有関係も指示対象も二人称(聞き手)となる。

このように、二人称に対する場合、身体だけでなく、物に対しても同様のニュアンスが有り得る。物を対象にする例を言うと、**Шалгалт нь дуусаа ю?** ((あなたの)試験が終わったかい?)において、試験を対象に相手に近い心理を表すと同時に聞き手の試験に対する苦労や努力に同調する気持ちも提示されている。これは、吉野(1988)が言う「親愛表現」であるが、そこで「物を対象にする場合は相手に対する親愛表現を示さない」ことは、対話者により左右する可能性が考えられる。つまり、談話は〈物〉の所有者を対話者に行っているかどうかに影響されるようである。

一方、これらの文において、聞き手を指すような「あなたの」という言葉が表出する場合を考えると、待遇の意味が現れず、通常的所有の意味が示される。つまり、所有物と聞き手との関与関係を表すことに留まる。このように、主題が二人称(相手)指示か、一人称(自分)指示かに関係なく、相手を中心に考える対応である。そこで「**нь**」を付加することにより相手を自分に、自分を相手に近づけていく意味や機能が働いている。これは〈人〉、〈身体部位〉、〈物〉などの広い範囲の対象物に対して有効であると言えよう。

そこで「**нь**」の意味は、吉野(1988 : 79-83)が言う「親愛表現」や、水野(1991 : 49-51)による「相手を宥めす」意味である。つまり、人間関係における心理的近接の機能を含むという見方は、観察した限り、名詞が主語になる談話の場合においては有益である。

対象者が〈人〉だけでなく、〈物〉である場合においても一部(物の所有者を対話者に行っている場合)には有効的であることが分かる。

⁶ 「共感的同一化 (emphathetic identification)とは、対話者が使用する親族語彙を発話者がそのまま使用する言語行動のことである」(鈴木 1973 : 168)

このように、「**нь**」の通常の意味において、談話の場合においては三人称以外の対象もあり、(自分再帰)一人称や二人称対応が現れる。意味は、所有・所属というより焦点の意味、さらに待遇(相手への親しみ)の意味としても表される機能であることを指摘したい。

4.3.2.2 慣用句レベルにおける所有接合語「**нь**」の意味

ここまで見てきた通り、「主格」構成慣用句は日本語に「N+ガ+V」形式のみであるが、モンゴル語には1.「N+ \emptyset +V」、2.「N+ \emptyset +**нь**+V」の二種が現れる。例えば、

3. нүд бүлтийх (逐語：目が丸くなる) 意訳：目が飛び出る

4. нүд нь эргэлдэх (逐語：目が回る) 意訳：(彼の)目が回る

モンゴル語の対象慣用句を日本語に対応させた「主格」使用例 37 句の内 8 句や、さらにモンゴル語独特な用例の 13 句が「主格+所有接合語」構成を見せる。参照のため、表 10 を再度付すこととする。

表 10 モンゴル語の主格使用例

総数	形式	数	用例
37	N+主格 (\emptyset) + V	27	нүд сэргэх, нүд тусах, нүд бүрэлзэх, нүд бүлтийх, нүд нээгдэх, нүд тайлах
	N+主格 (\emptyset) + 所有 (нь) + V	8	нүд нь эргэлдэх, нүд нь бүлтийх, нүд нь орой дээрээ гарах, нүд нь цадахгүй

これらの用例を対象に分析を行う。4.3.2.1 において議論した通り、「**нь**」の通常の意味は所有以外にも有り得るという結果を踏まえながら、ここで「**нь**」の慣用句における意味を分析し、慣用句の意味への影響について検討する。

ここで取り扱うのは、4.2.1 で分析したように「表 11b」「表 11h」における「名詞+主格+所有接合語(**нь**)」構成用例が中心である。さらに、分析を明確にするために「目」以外の身体部位慣用句にも触れる。

「表 11b」「表 11h」で分析した「**нь**」の用例は下記の通りである。

表 11b 「主格 = 主格 + 所有接合語」

項目	日本語	モンゴル語
慣用句	目が輝く、目が据わる、目が散る、 目が眩む、目が光る、目が吊り上る、 目が飛び出る、目が物を言う	нүд нь гэрэлтэх, нүд нь гөлийх, нүд нь гүйлгэнэх, нүд нь гялалзах, нүд нь дүрлэгнэх, нүд нь орой дээрээ гарах, нүд нь хэлэх, нүд нь эргэлдэх
格・形	主格「ガ」	主格「 \emptyset 」+ 所有接合語「 нь 」
述語	自動詞	自動詞
意味	感情（喜）、状態（マイナス）、無集中力、無判断力、感情（驚）表現力	

表 11h モンゴル語独特に現れる「主格」

慣用句	格・形	逐語（意味）
нүд нь бүлтэгнэх, нүд нь бүлтэлзэх, нүд нь гурвалжлах, нүд нь гөлөгнөх, нүд нь жартайх, нүд нь хараах, нүд нь сохрох, нүд нь хорсох, нүд нь өөхлөх, нүд нь унах, нүд нь цайх, нүд нь цэхийх	N+主格「 \emptyset 」+ 所 有接合語「 нь 」+ V	目が丸くなってバチバチする （怖）、目を三角にする（怒）、 目がバチバチする（恐）目を 鋭くする（怒）、目が呪う（欲 望）、目が見えなくなる（無判 断力）、目がうずく（憎）、目 が肥える（無鑑識力）、目が落 ちる（好、欲）
нүд нь улаанаар эргэлдэх	N+主格「 \emptyset 」+所 有接合語「 нь 」	目が赤くなって回る（怒）
нүд нь цадахгүй	N+主格「 \emptyset 」+所 有接合語「 нь 」	目が満たない（満腹不満）
意味	怖、怒り、恐れ、怒り、欲望、無判断力、 憎、無鑑識力、好、欲望	

これらは、日本語とモンゴル語両言語共に「主格」が使用例であるが、そこには「主語+主格」基本形式に加え、モンゴル語に独特な「主語+主格+所有接辞」が現れる用例を含む。

対象用例の意味をまとめておこう。

1. 「視覚機能」を表す表現

視力、視線、身体行動などの「目」の視覚部位の基本機能を示す意味である。

2. 「視覚機能以外」を表す表現

好奇心、認識力、注目、注意、感情、判断力などの精神的な状態の意味が含まれる。

このような意味判定は語彙からも想定可能ではあるが、統語的な分析により詳細な意味が浮き彫りになることが思われる。

「視覚機能」を表す表現には人間共通の機能が表れるため、言語の違いが現れにくいだろうが、「視覚機能以外」の意味の表現には言語個々の独特な意味が表れると推定される。そのため、「視覚機能以外」の意味を表す表現に集中し、分析を行う。

表 11a は、日本語とモンゴル語両言語において「主格」が使用されるが、意味的には目の機能や動作に関する表現が殆どである。つまり、視力、視線、好奇心、判断力、身体行動、生死、認識力、注目、注意、感情（驚）などが現れる。

表 11b は、モンゴル語の「主格＋所有接合語」構成の「N+ σ +нь」形式であり、感情・心理的な意味が多い。例えば、нүд нь гэрэлтэх, нүд нь гөлийх, нүд нь гүйлгэнэх, нүд нь гялалзах, нүд нь дүрлэгнэх, нүд нь орой дээрээ гарах, нүд нь эргэлдэхなどが挙げられる。

喜び・驚きの感情、殆どマイナスの意味を含む状態・能力（集中、判断、表現力などの無さ）を表す表現が多いことが注目される。このように、慣用句の「N+ σ +нь」に限っては、基本的にマイナスのイメージが表されると言えよう。

表 11h におけるモンゴル語独特な例を見ても、「主格＋所有接合語」構成による表現にはマイナスイメージを表す意味も多いことが分かる。例えば、нүд нь бүлтэгнэх, нүд нь бүлтэлзэх, нүд нь гурвалжлах, нүд нь гөлөгнөх, нүд нь жартайх, нүд нь хараах, нүд нь сохрох, нүд нь хорсох, нүд нь бүлтэгнэх, нүд нь өөхлөх, нүд нь унах, нүд нь улаанаар эргэлдэх, нүд нь цадахгүй, нүд нь цайх, нүд нь цэхийхなどがあり、これらは悪気、恐怖、憎、威張、欲張、怒、不満、無判断力などのマイナス意味の感情評価を表している。

しかし、ここでの「нь」の意味特徴は対象としてきた「目」を含む慣用句にのみ言えるが、さらに他の身体部位の慣用句も参照しておきたい。

下記、表 12 において「目」以外の部位に関する慣用句を示す。表現をモンゴル語のアルファベット順に並べる。

表 12 「目」以外の身体部位に関する「主格 +所有接合語」構成の慣用句

身体部位	モンゴル語の慣用句	逐語	意識	意味
口	ам хэл нь гүйцэгдэхгүй	口舌が追い越されない	口が多い	心情
髄骨	булуу нь халах	髄骨が熱くなる	盛り上がる、口が滑る	心情
手	гар нь загатнах	手が痒くなる	我慢できない	心情
鳩尾	гол нь харлах	鳩尾が暗くなる	後悔する	心情
瞼	зовхи нь буух	まぶたが落ちる	怖がる	感情
心臓	зүрх нь чичрэх	心臓が振るう	恐れる	感情
ほくろ	мэнгэ нь голлох	ほくろがピントくる	失敗が訪れる	行為
顔	нүүр нь улайх	顔が赤くなる	恥ずかしい様子	感情
膝	өвдөг нь чичрэх	ひざが震える	怖がる	感情
頭	толгой нь эргэх	頭が回る	判断が足りない	認識
ひかがみ	хонго нь загатнах	ひかがみが痒くなる	叱られる兆し	予感
喉	хоолой нь зангирах	のどがつまる	泣きたくなる様子	感情
足	хөл нь газар хүрэхгүй	足が地面につかない	喜んではしゃぐ	感情
中耳	хулхи нь буух	中耳が垂れる	勇気がなくなる	心情
指	хуруу нь өтөх	指が虫食む	盗む、指でいじる	悪行為
舌	хэл нь загатнах	舌が痒くなる	口が軽い	態度
肺心臓	уушиг зүрх нь сагсайх	肺心臓が拡張する	非常に怒る	感情
心のう	үнхэлцэг нь хагарах	心のうが破裂する	恐怖する	感情
首裏	шил нь татах	首裏が引く	わがままになる	態度

出典：主に Г.Аким (1999) ”Монгол хэлний хэлц үгийн толь” を参考に作成

表 12 の通り、モンゴル語の慣用句における「**нь**」使用表現の殆どが経験者（主に、三人称）の感情・心情・行動に対するマイナス評価の意味を表す。つまり、「**хөл нь газар хүрэхгүй**（逐語：足が地面につかない）」の喜びの表現以外の全てがマイナス意味に該当する。このように、他の身体部位を使用した「**N+ ø+нь**」形式の慣用句を見てもマイナス評価の意味が多く、今まで対象としてきた「目」を含む慣用句における「**нь**」による意味が検証される。

そして「目」を含む慣用句の分析を中心に、他人（三人称）に対するマイナス評価と「**нь**」の関係性に関する考察をまとめよう。

他人への評価に関して、日本語の形容詞を分析した山本（1998）は、「評価は他人のやることで、自分が自分を評価して褒めたり、けなしたりするのは、自分を冷静に客観的に

捉えて評価する場合（相手に自分を聞く場合も）を除くと、普通ではない」と述べている（山本 1998 : 190）。

では、なぜ他人へのマイナス評価が多いのであろうか。

人間共通であろうが、自分へのマイナス評価は不自然であり、特に感情表情に対する評価は、鏡を見ない限り自分の目で表される感情を見ることはできない。視察できるのは目の前にある他人であり、他人への評価を表出するにはより納得性のある文法構造でなければならぬ。そのために「НЬ」の焦点化の機能が利用されたと思われる。

マイナス意味の感情評価と「НЬ」の関係についてまとめると、次のようになる。

- ① 他人評価： 普遍的な概念とも言えるが、統語的に「НЬ」の三人称対応と、批判というのは対人関係的に他人向きの傾向であるため、「НЬ」は意味的にも統語的にも有効な条件を持つ。
- ② 感情評価程度： 言語記号の「НЬ」の焦点化と、身体部位の「目」の焦点化されやすさが一致し、感情表現の程度をより強くする効果を持たせていると考えられる。柳沢（1992）、角田（1996）らが指摘した通り、目は外部から観察されやすい部位であるので、焦点化されやすい働きがあるという。
- ③ 話者優先位置： ここで取り扱った表現は「N+НЬ+V（自）」の構造であり、無意志性の表現となる。感情は意志性によらないものでもあり、その情報に関しては話者が事態を視察できるからこそ第三者（経験者）より優先の位置に置かれる。このように、第三者自体よりは、話者の感情に即した表現出力のために、「НЬ」が働いていると考えられる。
- ④ 人称に対する認知： 日本社会において、「自分」に対する「他人」という人間関係があるように、言語表現（人称名称や敬語など）にもそのような考慮が見られる。これは人間共通的な概念でもあろうが、認知的にモンゴル語のほうが「НЬ」により柔軟性があるように観察される。「НЬ」の用法や意味から見ると、<他人>を“内”にも“外”にも入れる機能を持っていると考えられよう。

吉野（1988 : 83）では、親族語彙の場合において、その原点は発話者、対話者が被名称者に対して同一位置に立つことができるのである。つまり、共感的同一化が生起するのも「НЬ」の機能によるものと指摘している。

さらに、娜仁托娅（2011 : 181）も「НЬには話者の中立的立場を表す傾向がある」と述べた通り、話者の心理状態により他人（この場合、三人称に限らない）への接近性も表し、一方距離感も保たれる機能を示すと考えられる。距離感は、

ここで取り扱う慣用句における三人称（経験者）に対する感情評価の場合に限って現れるようであるが、感情以外の評価にも「**нь**」が同様の意味で使われる可能性は否定しない。

このように、身体語彙慣用句における「**нь**」は話者から第三者（経験者）の感情・心情に対する評価を示すが、その殆どがマイナスの意味に属していることは対象者が第三者でもあり、自分よりも表出度を強くする必要性に応じるのが「**нь**」である。このような表現は「**нь**」無しでは不可能に近いと言えよう。

4.3.2.3 文レベルにおける所有接合語「**нь**」の有無の意味

慣用句レベルにおける「**нь**」の意味を上述してきたが、ここで文レベルにおける「**нь**」が有無の慣用句の意味を分析し、その違いを検討する。対象用例は 4.3.2.1 や 4.3.2.2 の分析分用例や構成を中心とし、具体的に「表 11a」、「表 11b」の慣用句を含む例文を対象にする。

以下、日本語を J に、モンゴル語を M に記し、用例を示す。

- (1) J1. 今回表沙汰になって初めて知ったけど目が飛び出るよ。しかもエビさんの退職金は今回で3回目だって。

(<https://chunagon.ninjal.ac.jp/search>)

- M1. Сүүлийн үед гарсан шинэ дуу дуулуулья гэж нөгөө бүжигт урьсан орос бүсгүйг монголоор цэвэрхэн хашгирахад Цэнд нүд бүлтийн харж, монголоор ингэж ярьдаг орос байдаг юм аа хэмээн гайхав . (Г.А,1999 : 88)
(逐訳：最近の新しい歌を歌ってもらおうと、ダンスに誘ったロシア人の女性が綺麗なモンゴル語で声を出すと、ツェンドが目を丸くして見ながら、モンゴル語がこんなに話せるロシア人がいるもんかと驚いた)

J1、M1 において、両言語共に、驚きを表す意味としての類似の表現であるが、文中の位置により意味が変わるように観察される。モンゴル語において、上記のような表現は文中で「見る」、「驚く」などの本動詞の前に位置し、副詞的な役割を果たしている。そこから慣用句や感情の程度が弱いことが伺われる。

「**нь**」構成の表現には本動詞が後置する場合が存在するという僅かな場合においては、慣用句の程度が低い慣用句として成り立たないような場合も見られる。

- M2. Бат хичээл дээр гэрийн даалгавраа хийхгүй ирчихээд, багшийн асуухад нүд нь бүлтэгнэн сандарч, бусдаас будаа идэхийг хүсдэг зантай. (Д.Б, 2008:24)
 (逐訳: バトは学校に宿題をやらずに来てしまって、先生に聞かれたら目が丸くなって慌てて、回りからカンニングしようとする者だ)

M2 の場合は、「нь」が有る慣用句に〈慌てる〉という本動詞が後置しているが、この場合は慣用句としての意味が成り立たず、ただ「目」の様子が描かれ、心情は「目」に関する動詞ではなく、〈慌てる〉という別の動詞により実現される。

一方、日本語では慣用句は述語として文末に位置し、慣用句そのものが「驚く」という本動詞と交替が可能なため、感情の程度や慣用句としての独立性が強く示されている。これに反するわずかな例もあるが、ほとんどの場合は上記のようである。

このように両言語の文中における慣用句の構成やその位置により慣用的な意味、つまりここで現れる感情の程度は異なっている。

次に (2)、モンゴル語独特な「N+ø+нь+V」の場合を分析する。

- (2) M3. Гарч харахад нөгөө гамингууд нүд нь орой дээрээ гарчихсан л хар хурдаараа гүйгээд байх нь тэр гэж Пэрэнлэй гуай их л сонин зүйл ярьжээ.
 (逐訳: 出て見たら、あの兵士たちが目が吊り上がって、精いっぱい逃げていたのだ、とプエレンレイさんが面白いことを聞かせた)
- M4. Би онинд сууя гэж Галданг хэлэхэд Сүсэгжавын нүд нь орой дээрээ гарч, цочин ухасхийснээ –Ээ, бурхан минь, битгий дэмий ярь... гэв. (Г.А, 1999:89)
 (逐訳: 私の定番だとガルダンが言い出すと、スセグジャブの目が吊り上がって、飛び立ちながら「神様よ、そんな無駄なこと言うな...」と言った)

(2) は、(1) の M1 の文と違って、慣用句は主文において述語役を果たし、〈驚く〉という動詞に代わる機能を持つようになる。伴って、慣用句の統語的な構成に「нь」が加わることにより感情の程度が強くなってくることが明らかになる。

他の例文を見ても、「нь」を使った慣用句は文の中で述語になることが一般的なように観察される。

- (3) M5. Тэр хүүхэн ... өөрийн гасланг дурьдаж, чөлөө олохыг мөрөөдөн аврахыг гуйж дуулмагц Нияс хилэгнэн, ширээн дээрээс үсрэн босоод нүд нь гялалзан, нүүрээ барайлгаж, нударга зангидан хөшигний зүг хандаж иран хэлээр зандрахад гаслан гунигласан дуу тасалдаж, чимээгүй болжээ. (Л.К,1990 : 62)

(逐訳：あの女性が...自分の苦情を訴え、自由を求めた歌声を聞くと、ニヤスが激怒して、テーブルを飛び上がり、目を光らせて、顔を曇らせて、手を握りながらカーテン側に向かってイラン語で怒鳴ると、苦情の声が絶え、静かになった)

M6. Мээрэн тэр бүхнийг сонсоогүй царай гаргавч дотор нь харанхуйлж, Бадамыг харах бүр нүд нь хорсож, уур нь хүрдэг байлаа. (О.Ц、1981 : 34)

(逐訳：メーレンはそれらについて聞いていないふりをするが、胸が苦しんで、バダムを見るたびに目がうずき、怒り出すのだった)

ここで現れる慣用句は述語に代わる独立性が高く、それなりに感情の程度も高くなってくる。M5 は怒りの態度を、M6 は憎みの感情をそれぞれの意味に相当する述語（本動詞）なしで表している。

まとめると、「N+ \emptyset +V」形式の場合、M1 の通り「ツェンドは目が飛び出て見ている」と言って、動詞が日本語のテ形相当に活用し、その後にくる「見る」という本動詞を必要とする。驚いて見る時の目の様子を描いているため、視覚機能を示す意味が保持されている。

「N+ \emptyset +нь+V」の形式においては、M6 のように「N は... нүд нь хорсож (目がうずき、)」とあって、主文において慣用句は述語役割を果たし、「憎む」という本動詞に代わる機能を見せる。一方、ここでは対象にしていなが、M6 の「N は... нүд нь хорсож, (目がうずき、)」表現の「нь」が無い場合を想定してみると、「нүд хорсох (目がうずく)」となって、文としては成立するが、「нь」構成の慣用句が表す「憎む」という意味は現れず、ただ「目」という身体部位の状態を表す意味に留まることとなる。具体的には、目にホコリなどが入ったせいで、カラカラになる状態を表すわけである。その場合、所有者と所有物の関係が「属格」による構造となり得る。

このように M1～M6 の例文からも分かるように、慣用句は「нь」により、文の中で慣用句としての独立性を見せることが明らかとなった。

分析結果を言うと、モンゴル語の所有接合語「нь」を使う慣用句は基本動詞に代わる独立性が備わっており、感情程度を高くする機能を持つと言えよう。

4.3.2.4 本節のまとめ

ここで、上記 (4.3.2.1 や 4.3.2.2 や 4.3.2.3) で分析してきた結果や検討をまとめよう。日本語とモンゴル語における「主格」使用慣用句を比較分析した結果、相互に対応するのは 60 句である。その中で、「表 11a」による両言語の主格使用例は統語的構成が似ており、それらの意味は「目」の機能や動作に関する表現が殆どである。つまり、慣用句の意味は

- ① 目の機能（視力、視線）
- ② 目を通じる能力（判断力、認識力）
- ③ 注目（好奇心、注目、注意）
- ④ 行動（身体動作、生死）
- ⑤ 感情（驚）

などである（4.3.2.1 参照）。

モンゴル語の用例として「主格」共通対応の37句の内8句が「主格+所有接合語」構成慣用句であり、その他にモンゴル語に独特な「主格+所有接合語」使用慣用句が13句も現れる（表10、表11b、表11h参照）。

モンゴル語の「主格+所有接合語（нь）」構成慣用句の意味は基本的に二つに分類できる。それは下記の通りである。

1. 感情・心情（喜び、落ち込み、不安、怒り、悪気、憎み、欲張り、恐怖）例えば、
 нүд нь бүлтэгнэх, нүд нь бүлтэлзэх, нүд нь гурвалжлах, нүд нь гэрэлтэх, нүд нь
 гөлийх, нүд нь гөлөгнөх, нүд нь гүйлгэнэх, нүд нь гялалзах, нүд нь дүрлэгнэх, нүд
 нь жартайх, нүд нь орой дээрээ гарах, нүд нь хараах, нүд нь хорсох, нүд нь унах, нүд
 нь улаанаар эргэлдэх, нүд нь цадахгүй, нүд нь эргэлдэх
2. 能力（無判断力、無認識力、表現力）例えば： нүд нь сохрох, нүд нь өөхлөх, нүд нь хэлэх,
 нүд нь цайх, нүд нь цэхийх

このように感情・心情に関する意味が一般的であり、その中でもマイナス意味の感情評価を表す表現が多い。動詞以外にも、нүд нь нүх, нүд нь харалган, нүд нь аниатай のような「主格+所有接合語+名詞（副詞）」構成の名詞慣用句や副詞慣用句も存在しており、それらも〈無認識力〉を表すというマイナスの意味に当てはまる。

そして、「нь」が有無の慣用句の分析の前提として、「нь」の通常の意味と慣用句での意味を比較考察した結果を下記においてまとめておこう。表13aでは「нь」の通常の意味考察と、表13bでは「нь」の慣用句における意味検討を載せる。

表 13a 所有接合語「нь」の通常の意味

対象 語彙	対象者 (性質)	「нь」の機能 (「関連付ける専門用語参照」)	対象用例 (逐語)
親族語彙を象にする談話の場合	三人称 (人・物)	三人称の(指示)所属 ⁷	Охин нь ирлээ (彼の)娘が来た Цүнх нь байна (彼の)鞆があります
	一人称・二人称 (人)	話者と対話者との親しみ 「心理的接近性 ⁸ 」	Найз нь хийчихье 友達(の私)がやろう Ээж нь ирлээ お母さん(の私)が来たよ
	二人称 (人)	話者の立場になって捉える 「共感的同一化 ⁹ 」	Аав нь ирсэн үү? お父さんが来た? Дүү нь унтаж байна 妹ちゃんが寝ている
	二人称 (身体・物)	話者が対話者の状態に対す る「心理的同調感 ¹⁰ 」	Бие нь гайгүй юу? (あなたの)体が大丈夫ですか Шалгалт нь дуусав уу? (あなたの)試験が終わった?

⁷ С.Лувсандамба、Л.Дамдинжав (1989 : 48)

⁸ 水野 (1991 : 51)

⁹ 鈴木 (1973 : 168)

¹⁰ 吉野 (1988 : 83)

表 13b 所有接合語「нЬ」の慣用句における意味

対象語彙	対象者 (性質)	「нЬ」の機能	判定範囲 (参照箇所)
身体語彙を含む慣用句の場合	三人称 (身体部位)	慣用句の程度を高める	慣用句レベル (4.3.2.2)・ 文レベル (4.3.2.3) において該当
		慣用句で表される感情・心情の 意味成立に貢献する	「目」を含む慣用句の全 23 句の 内 17 句が該当 (表 11b, 11h)
			「その他」の身体部位を含む慣用 句の全 20 句の内 14 句が該当 (表 12)
		三人称対応用法により、他人に対 するマイナスの意味を表すこと に貢献できる	「目」を含む慣用句の全 23 句の 内 21 句が該当 (表 11b, 11h)
「その他」の身体部位を含む慣用 句の全 20 句の内 19 句が該当 (表 12)			

日本語と対照考察すると、通常の「нЬ」の意味においては、吉野 (1988) も指摘している通り「共感的同一化¹¹」という見方は、子供に対して親族名称を子供に立場になって捉えるような日本語の場合と似ているようである。

一方、水野 (1991) が言う「心理的接近性¹²」による表現は、話者と対話者との親しみを表す意図であり、このように話者が自分を名称して言う (甘える) 場合が日本語には無い表現であると思う。

さらに、吉野 (1988) が指摘している「心理的同調感¹³」は、話者が対話者の状態に対する同調を表す表現であるが、身体や物を三人称に所属させるという基本的な意味と同時に、その人の場になって労りを同感している意味の方が強いのである。これは日本語の敬語の用法に似ているようであるが、必ずしも目上の人に対する用法ではなく、むしろ目下・年下の人に対して使う場合が多いため、同調の意味が際立ち、意味的に異なる場面を見せる。

このように、三人称対応は概念的に日本語に通用するだろうが、それ以外はモンゴル語

11 鈴木 (1973 : 168)

12 水野 (1991 : 51)

13 吉野 (1988 : 83)

独特な用法・意味を示すわけである。

表 13b に関する分析の際、慣用句における「所有接合語 (нь)」の有無の場合を比較考察した。モンゴル語において「所有接合語 (нь)」は物事の三人称の所属・所有・指示の意味を表すようであるが、談話分析の結果を示す。通常の「主格+所有接合語 (нь)」が所有というより話し手に対する焦点を、つまり一人称(再帰)と二人称の用法もあり、それは相手への親しみという待遇表現の意味対応も持つことが分かった。このような意味は水野(1991: 49-51)が指摘している「心理接近性¹⁴」の機能に通じる(4.3.2.1 参照)。

慣用句における「所有接合語(нь)」の慣用的意味への影響についても分析を行った結果、分析対象にした慣用句の中で、第三者の感情や評価に関する表現が大多数を占め、その殆どがマイナス意味を表すことが明らかになり、興味深い。

そのような意味をさらに追求したところ、次のような結果に至った。「目」を含む慣用句を中心に他の身体部位慣用句も含めながら分析を行い、統語的な構成要素が慣用句の意味に貢献できる可能性を示した(分析は4.3.2.2における慣用句レベル、4.3.2.3における文レベルを、それぞれ参照)。モンゴル語の「нь」構成の慣用句は文レベルにおいて述語に変わる独立性を生む機能性も持つと言える。

モンゴル語の談話における通常の「нь」には心理近接性を示す機能が働き、対話者(三人称)を焦点にしながら、話者が対話者との関係を親密にする効果を示す。一方、慣用句における「нь」の意味は感情評価が一般的であるため、三人称に焦点を当てることは変わらないが、他人に対するマイナスの感情評価が多く、「нь」が感情評価の程度を強める機能を持っていると言えよう。そして「нь」とマイナス評価の関連性について考察も行った(60-61頁参照)。

文レベルにおいて、「нь」が無い場合の表現を見れば、「目」の身体部位としての様子・状態が描かれ、慣用句の程度が「нь」を使った慣用句より低い。それは、文の中で述語の前に位置し、補助動詞の役割を果たしていることから伺われる。例えば、「нүд бүлтийн харж (逐語: 目を丸くして見る)」のように、文中で<見る>、<驚く>などの本動詞の前に位置し、副詞的な役割を果たしている。

言い換えれば、動作ではなく、動作の状態を表すこととなり、そこから感情の程度が弱いことが把握される。所有関係においては、文中では所有者と所有物の関係が「属格」により構成され、両者の位置も近いことから確定される。これに対して、日本語では慣用句は述語として文末に位置し、慣用句そのものが<驚く>という本動詞との交替が可能のため、感情の程度や独立性が強くと示すように判定される。これに反する僅かな例の存在は否定しないが、殆どの場合が「нь」が無い構成においては慣用句の程度が弱く、補語的な役割を果たすことが見られる。

14 「宥め賺す」(水野 1991: 49-51頁)

このように、慣用句の意味における「**НБ**」の用法・意味は、慣用句構成に限って言えば日本語の「が」しか対応せず、意味や慣用句成立においては貢献度が高い構成要素であると言えよう。分析は基本的に「目」を含む慣用句において検討してきたが、他の部位を含む慣用句においても同様な結果が得られる可能性も示した。

4.4 モンゴル語の慣用句における「対格+再帰所有接辞（-ээ）」の意味

4.4.1 はじめに

図 1 で示した通り、日本語とモンゴル語両言語の「目」を含む慣用句において「対格」の使用例が一番多かった（日：60.7%；モ：45.2%）。モンゴル語の「対格」使用例の全 43 句の内 18 句が「対格+再帰所有接辞（-ээ）」構成である。

ここで、モンゴル語において「対格」使用例は二種の形式や構成を持つことが見える。

1. 「対格」の構成： $N + (\emptyset) + V$
2. 「対格+再帰所有接辞（-ээ）」の構成： $N + (\emptyset) + (-ээ) + V$

表 14 モンゴル語の「対格」使用例

総数	形式	数	用例
(43)	$N + \text{対格} (\emptyset) + V$	25	нүд үзүүрлэх, нүд хариулах, нүд буруулах, нүд салгахгүй
	$N + \text{対格} (\emptyset) + \text{再帰} (-ээ) + V$	18	нүдээ эргэлдүүлэх, нүдээ аниад өнгөрөх, нүдээ бүлтийлгэх

このような二種の構成が両方とも日本語では「対格」しか対応せず、モンゴル語における「-ээ」構成表現の意味の詳細が見えない。モンゴル語においても「再帰所有接辞」の有無の意味把握が認識されにくいことがある。

従って、本節では日本語とモンゴル語の「対格」使用例を対照考察し、さらにモンゴル語の特修法である「対格+再帰所有接辞」の慣用句における意味役割を明白にする。

モンゴル語では「再帰所有接辞（-ээ）」は、物事の一般的な所有を表すという概念であり、その概念を述べておく。

- 定義： 人や物の指示を示し、動作主との人称関係を問わず、一般的な所有を示す語法を「一般的な所有接辞法」（Хүн юмыг бусдаас нь онцлон ялгаж эзэмшигчид нь бие ялгалгүйгээр ерөнхийд нь хамаатуулахыг Ерөнхийлөн хамаатуулах ёс гэнэ. С.Лувсандамба、Л.Дамдинжав 1989：48）という。
- 形式： 母音調和により「-ээ」「-оо」「-аа」「-өө」の4種が使用されるが、本研究の対象慣用句に使用されている接尾辞を代表に以下「-ээ」という。「нүд（目）」を含む慣用句の場合「 $N + \emptyset + \text{ээ} + V$ 」の形式である。
- 用法： 人称か物体かを問わず、名詞の主格以外の全ての格助詞に後続される。ここで名詞の対格に伴い、対格の「 \emptyset 」形式が多いため、名詞の語幹に直接接続される構造となる。

➤ 意味： 修飾される名詞の再帰所有や指示を表す。

定義によると、(-ᠶᠢ) は「一般的な所属・所有」の意味を表すという。「一般的」というのが人称に制限されない意味を示しているのであろうが、基本的には、対象者自身に再帰所属される意味を示すと考える。

先行研究によると、日本語では (-ᠶᠢ) を「再帰所有接辞¹⁵」と称するのが一般的なようである。小沢 (1993 : 42) では「再帰所属格」と記述されているが、上記の名称と同様に伺われる。そこで、先行研究も参照としながら、(-ᠶᠢ) を「再帰所有接辞」と称することとする。

続いて、短文における通常の「再帰所有接辞」が有無の用例を見ていく。以下、再帰所有接辞を伴わない表現 (a) や、それを伴う表現 (b) に分けておく。

(a) Ном унших

本を読む

(b) Номоо унших

(自分の) 本を読む

(a) の場合、対象物の所有が現れず、〈読書〉の動作が示されるに過ぎない。ここで (a)、(b) の両方にも主語が現れていないが、一人称・二人称・三人称どれも対象可能であり、(b) の場合はそれぞれの主語への再帰所有を表すため、ここで主語を表示しない文にしておく。

(b) の場合は、名詞に「-oo」という再帰所有接辞が使われるため、〈本〉という対象物の所有を示し、話し手に再帰所有させる機能を果たす。言い換えれば、話し手が自分の本を読む動作を示すわけである。

このように、通常の文において再帰所有接辞は話者の「自分再帰の所属・所有」を表すのが一般的であるが、慣用句においては「再帰所有」という意味がどのように現れるかが注目される。そして、以下ではモンゴル語の慣用句における「再帰所有接辞」がどのような意味を成しているかを分析していく。

4.4.2 慣用句における「対格」や「対格+再帰所有接辞」の意味

星野 (1976 : 155) は「身体語彙による表現とは、人間の身体やその部位を指示する名称を使用しながら、身体の状態・活動を直接指示するというよりは、むしろ別の精神状態や活動を暗示的、比喩的に指示している」と述べている。

また、角田 (1996) によると、「身体部位がその人の分離不可能所有物」であり、筆者の推定では所有の意味との関係性が薄いように思われる。このように、身体部位に対する「再帰所有」というのは不自然であり、慣用句においてはその再帰所有が頻繁に強調され

¹⁵ 橋本 (2006 : 9)、梅谷 (2012 : 55)

る必然性がないのではないかとと思われる。従って、対象用例における身体部位自体も慣用句において独特な意味を表すと同様に統語上の構成要素も独特な意味を示すのではないかと予想される。

ここで取り扱う「再帰所有接辞」は、「構成要素の結合により総合的な一つの意味が成される慣用句」の場合においてこそ、構成要素の主語である身体部位の所有・所属の意味は問われないはずである。

慣用句においては「再帰所有接辞」が使用される表現も、使用されない表現もあるように、その固定された表現における「再帰所有接辞」の有無が慣用句の意味をある程度左右するのではないだろうか。そこで、慣用句における「再帰所有接辞」の機能と意味を探り、慣用的な意味への影響について検討していきたい。

ここで、モンゴル語の「再帰所有接辞」の有無の用例全てを取り扱うが、それらが同一の用例とは限らないようになる。以下、表 15a は「対格」使用例であり、表 15b は「対格+再帰所有接辞」使用例であり、それぞれに逐語と意味を付す。

表 15a モンゴル語の「対格」使用例

	用例	逐語	意味	日本語対応
1	нүд алдрах	目を失う	認知	目に余る
2	нүд аних	目を瞑る	死	目を瞑る
3	нүд баясгах	目を喜ばせる	感情：喜	目の正月
4	нүд булаах	目を奪う	心情：好	目を引く
5	нүд буруулах	目を逸らす	無関心	目を側める
6	нүд бэлчээх	目を放牧させる	注目	目を転ずる
7	нүд гүйлгэх	目を通す	行動：見る、読む	目を通す
8	нүд ирмэх	目くばせをする	行動：表現	目をくわす
9	нүд нээх	目を明く	認知：物事を知る	目を覚ます
10	нүд тавих	目を配る	注目：注意して見る	目を注ぐ
11	нүд тайлах	目を解く	認知：知識が広がる	—
12	нүд хаах	目をごまかす	行動：裏切	目を抜く
13	нүд хариулах	目を返す	行動：ごまかす	目を盗む
14	нүд хөхрөх	目を青くする	状態：待ち焦がれる	目を凝らす
15	нүд хужирлах	目に塩を与える	興味	目の保養
16	нүд хуурах	目を抜く	行動：裏切	目を晦ます
17	нүд унагах	目を落とす	関心：好奇心	目を引く
18	нүд ухах	目を掘る	感情：怒	—

19	нүд үзүүрлэх	目を鋭くする	心情：嫌	—
20	нүд чичлэх	目を突く	心情：嫌	—
21	нүд салгахгүй	目を離せない	注意	目が離せない
22	нүд татах	目を引く	関心：興味が引かれる	目を引く
23	нүд цавчилгүй	目をまばたきせず	注意	目もすまに
24	нүд ширгэх	目をつぶす	視力：疲れ目	—

表 15b モンゴル語の「対格＋再帰所有接辞」使用例

	用例	逐語	意味	日本語の対応 慣用句
1	нүдээ аниад өнгөрөх	目を瞑る	無関心（見ないふりをす る）	目を覆う
2	нүдээ аньж чихээ бөглөх	目を瞑り、耳を 塞ぐ	無関心（見ないふりをす る）	目を覆う
3	нүдээ анийлгах	目を細める	状態（考え事をする）	—
4	нүдээ бүлтийлгэх	目を丸くする	感情（驚き）	目を丸くする
5	нүдээ гурвалжлуулах	目を三角にする	感情（怒り）	目を三角に する
6	нүдээ гялалзуулах	目を光らせる	感情（興奮, 怒）	目を光らす 目を輝かせる
7	нүдээ ирмэх	目くばせをする	行動（目で合図する）	目をくわす
8	нүдээ олох	目を見つける	評価（正しい判断）	—
9	нүдээ өгөх	目をやる	心情（好）	目がない
10	нүдээ ухуулах	目を掘らせる	感情（叱られる）	—
11	нүдээ унагаах	目を落とす	関心（興味が引かれる）	目を引く
12	нүдээ ухааж өгөх	目を掘ってやる	心情（好）	目がない
13	нүдээ улайлгах	目を赤くする	感情（怒）	目を白黒する
14	нүдээ жартайлгах	目を鋭くする	感情（怒）	目を側める
15	нүдээ чилээх	目を凝らせる	視力（疲れ目、夢中）	目を据える
16	нүдээ чичлүүлэх	目を突かれる	心情（嫌、怒）	—
17	нүдээ ширгээх	目をつぶす	視力（読書などに集中す る）	—
18	нүдээ эргэлдүүлэх	目を回す	感情（驚）	目を剥く

表 15a のように、「対格」構成のみの場合は、注目、行動、心情（好、憎）の意味が現れる。日本語に対格は「を」であるが、モンゴル語において「-ийг」「-ыг」,「-г」などの格語尾はあるが、ここで「ゼロ」形のみが現れる。通常は、無生物を対象にする場合は「ゼロ」形が多く使われる傾向がある。

一方、表 15b のような「対格+再帰所有接辞」構成においては、無関心、心情（好）、感情（怒、興奮、驚、憎）の意味が殆どである。表 15a よりも表 15b における用例の方が感情を表す意味が圧倒的に多いことが見える。このような点から、再帰所有接辞（-ээ）により慣用句の意味が左右することが伺われる。

そこで、表 15a の用例を (a) に記し、また、表 15b の用例を (b) に記し、それぞれの用例を意味的に三つに分け、考察を進める。

①. 類似する意味、(a)(b):

無関心：	(a)	нүд буруулах	目を逸らす
	(b)	нүдээ аниад өнгөрөх	目を覆う
		нүдээ аньж чихээ бөглөх	目を覆う
心情（好）：	(a)	нүд булаах	目を引く
	(b)	нүдээ өгөх	目がない

②. 独特な意味、(a)のみ:

感情：	нүд баясгах	目を喜ばせる（良いものを見て喜ぶ）
	нүд хужирлах	目の保養（興味：良い物を見て喜ぶ）
行動：	нүд буруулах	目を逸らす（直視できない、興味ない）
	нүд гүйлгэх	目を通す（読み通す）
	нүд хаах	目を抜く（中途半端にやる）
	нүд хариулах	目を盗む（こっそりと行動する）
	нүд хуурах	目を抜く（ごまかす）
認知：	нүд алдах	目に余る（見極める）
	нүд нээх	目を覚ます（物事を知る）
	нүд тайлах	目を解く（知識が広まる）
その他：	нүд аних	目を瞑る（死ぬ）
	нүд татах	目を引く（関心：他人の目を引く）

③. 独特な意味、(b)のみ:

感情(怒)：	нүдээ гурвалжлуулах	目を三角にする
--------	---------------------	---------

	нүдээ гялалзуулах	目を光らせる
	нүдээ улайлгах	目を赤くする
	нүдээ жаргайлгах	目を側める
感情(驚) :	нүдээ бүлтийлгэх	目を丸くする
	нүдээ эргэлдүүлэх	目を回す
集中力 :	нүдээ чилээх	目を凝らせる

④. 同一用例、(a) (b) 共通の構成語 :

- (a1) нүд ирмэх 逐語：目をまたたく（行動：目で合図する）
- (b1) нүдээ ирмэх 逐語：目をまたたく（行動：目で合図する）
- (a2) нүд унагах 逐語：目を落とす（興味：目が引かれる）
- (b2) нүдээ унагаах 逐語：目を落とす（興味：目が引かれる）
- (a3) нүд ухах 逐語：目を掘る（感情：叱られる）
- (b3) нүдээ ухуулах 逐語：目を掘らせる（感情：叱られる）
- (a4) нүд чичлэх 逐語：目を突く（心情：嫌われる）
- (b4) нүдээ чичлүүлэх 逐語：目を突かせる（心情：嫌われる）
- (a5) нүд ширгэх 逐語：目をつぶす（視力：目が疲れる）
- (b5) нүдээ ширгээх 逐語：目をつぶす（集中：読書などに夢中になる）

まず、①の場合は、構成要素が異なるが、類似の意味を持つ表現である。例えば、「無関心」、「心情」などの精神的な行動を表す。そのため「再帰所有接辞」の有無による意味の変換ははっきりと見えないようである。詳しく見ていこう。

<心情(好)>のような意味の場合、格助詞の在り方によらず動詞の意味に支配されているような場合に限って、動作の「意図的」か「非意図的」かが示される可能性が考えられる。例えば、<心情>の意味において、нүд булаах（逐語：目を引く）は非意図的な動作であり、一方 нүдээ өгөх（逐語：目がない）は意図的な動作である。このように動詞に支配される機能が働くが、それと同時に「再帰所有接辞」が示すのは、その「意図」の表出程度を強める機能を示すものであると思われる。

しかし、①の<無関心>の意味においては「再帰所有接辞」の場合<他人の悪行動を見逃す>意図的な動作を意味し、その程度が「再帰所有接辞」により高くなる傾向である。つまり、「対格」のみの (a) нүд буруулах（逐語：目を逸らす）は直視できないという非意図的な動作に対して、(b)の「再帰所有接辞」 нүдээ аниад өнгөрөх（逐語：目を覆う）

次に、②における「対格」のみの場合、<喜び>の感情以外は<行動>と、<認知>の意味を表すのが殆どである。

一方、③の「対格+再帰所有接辞」の場合は、感情に関する意味であり、〈怒り〉と〈驚き〉を意味する表現が多い。これらの用例は「再帰所有接辞」が無くては成り立たない固定された統語的構成である。

このような統語上の構成要素の必然性を考えるには、まずその意味に注目することが重要と考える。нүдээ гурвалжлуулах（逐語：目を三角にする）、нүдээ гялалзуулах（逐語：目を光らせる）、нүдээ улайлгах（逐語：目を赤くする）、нүдээ жаргайлгах（逐語：目を側める）などは怒りを、нүдээ бүлтийлгэх（逐語：目を丸くする）、нүдээ эргэлдүүлэх（逐語：目を回す）などが驚きを表している。構成要素それぞれの述語の意味からも分かるように、目の形や色などを通常よりは強く変えて表出する感情のため、その表現の意味に対する程度を示すために「再帰所有接辞」が使用されているものと思われる。

対照考察すると、日本語では述語が重要な役割を果たす一方、モンゴル語では「-ээ」が「目」が表す感情評価の強度を高める機能を果たしているようである。

つまり、「-ээ」は、話し手が対象者（第三者）の感情に対する評価の意味に貢献しているが、それと同時に「再帰所有」の基本機能は対象者に関連付けさせる意味としても働く。ただし、話し手が自分自身に対して使わない表現であるため、他人に対する（マイナス）評価の程度を強める機能の働きが優先的であると考えられる。

他人へ対応とマイナス評価の関係性については、山本（1998）の研究がある。山本（1998：190）は、「評価は他人のやることで、自分が自分を評価して褒めたり、けなしたりするのは、自分を冷静に客観的に捉えて評価する場合（相手に自分を聞く場合も）を除くと、普通ではない」と述べている。他人へのマイナス評価が、モンゴル語においては「-ээ」によって表され、その焦点の機能も伺われる。

④には構成要素が同一の慣用句が並べられており、ここでも「再帰所有接辞」の有無が意味に左右しているかどうかについて比較する。(a) (b) とも同じ意味を表しているため、「再帰所有接辞」自体の基本機能が働いており、意味の違いは現れない。つまり、同一用例の場合、形式的に「再帰所有接辞」が有る用例と無い用例とに分かれる。ここでは「再帰所有接辞」が使用される必然性は構成要素の述語が使役形か否かによるものであり、使役の場合は「再帰所有接辞」を伴う用法が見られる。

文中において、「再帰所有接辞」が無い場合、表現が文の中では述語になる機能が低く、後に来る本動詞による動作の「状態」を表す機能を持つ。例えば、1. Дулмаа зах зээлийн эрээн мяраанд нүд унаган явав.（逐訳：ドルマーは市場のあれこれに目を落としながら行った） 2. Бат хот газрын хээнцэр хүүхэнд нүдээ унагаах шахав.（逐訳：バトは都会のおしゃれな女に目を落とそうとした） 1.で「нүд унаган（目を落として）」は後置する「явав（行った）」という本動詞の状態を表しており、このように本動詞が無くては不自然である。

一方、2. においては慣用句自体が述語の役割を果たしているため、日本語と同様に、動

作の結果を示している。意味は、日本語の「目を引く」の意味に当たる。

このような文中における役割は (a4,b4,a1,b1) の用例においても有効である。

(a5) : 「-ээ」が無い場合 : нүд чичлэх (逐語 : 目を突く)

1. Олны дотроос ганц эмэгтэйг нүд чичлэн үзсэн гэсгүйн авирыг харчуулын олонх нь зэмлэв. (Г.А, 1999: 92)

(逐訳 : 皆の中で、一人の女性を目を突いて見る坊主さんの態度を男ら殆どが批判した)

(b5) : 「-ээ」が有る場合 : нүдээ чичлүүлэх (逐語 : 目を突かせる)

2. Хул азарга чононд унагуулсны төлөө энэ хэдэн өдөр тэр хичнээн хүнд нүдээ чичлүүлж байна вэ ? (Г.А, 1999: 95)

(逐訳 : 栗毛の馬が狼に食われたせいで、この数日は何人かに目を突かせているのだろう)

④では、さらに同一用例であり、動詞が使役形ではない唯一の慣用句として (a1) の нүд ирмэх (逐語 : 目をまたたく) と、(b1) の нүдээ ирмэх (逐語 : 目をまたたく) があり、両者共に<目で合図する>ことを意味している。

ここで使用される「-ээ」は再帰所有の基本的な機能も失われていないかと思われるが、両者の間で意味ニュアンスの差が生じるか否かを明らかにする必要がある。

下記の例文を参照に考察を進める。

(a1) : 「-ээ」が無い場合 (нүд ирмэх)

1. Эрчүүдийн ухаан ч төрд бас хэрэгтэй шүү гээд хүү рүүгээ нүд ирмэх нь сэтгэл уужрам. (<http://mobile.urlag.mn/post.php?p=7368>)

(逐訳 : 男の知恵は政治に欠かせないものだ、と言って息子に向かって目をまたたくにはほっとする。)

(b1) : 「-ээ」が有る場合 (нүдээ ирмэх)

2. Та хоёр очоод сургуульд сурна, алсдаа бас тэндээ амьдрал зохиох биз гэж хэлээд нүдээ ирмэх нь надад саймшраад байгаа нь илт.

(http://wonder_life.blog.gogo.mn/read/entry519983)

(逐訳 : 二人があそこに行って、学校に入るし、将来はあそこで家庭を作っ

いくだろうと言って、目をまたたくのが、どうやら私にへつらっているようだ)

3. ... Эвшээх нь, инээх нь, нүдээ ирмэх нь, хөмсгөө зангидах нь тэр чигээрээ уран зураг. Эмэгтэй хүн бүхэлдээ урлаг.

(<http://mobile.time.mn/mcontent/27162.shtml?s=goodali>)

(逐訳： ...あくびするのも、目をまたたくのも、眉毛にしわをよせるのも、
全 てが芸術そのもの。女は芸術である)

4. Өөрийг нь буудсан гэмт этгээдийг нүдээ ирмэж илчилжээ.

(http://new.mn/News/Detail?news_code=8230)

(逐訳： 自分に銃を撃った犯人を、目をまたたいて暴いた)

5. Нөгөө хүү намайг эвтэйхэн сугадаж босгоод ойролцоох сандал дээр суулгаад цүнхнээсээ чийгтэй салфетка, шархны лент гарган өгөөд зүгээр байснаас арай дээр байх гэж хэлээд нүдээ ирмэн инээмсэглэлээ.

(<http://www.buzznew.mn/news/152/single/5740>)

(逐訳： あの青年が私の脇をかかえてながら、近くのベンチに座らせた後、バッグからモイスチャーティッシュやキズテープを出してくれて、何もないよりはましだと言って 目をまたたいて微笑んでいる)

(a1) の場合は、(нүд ирмэх) 「目をまたたく」は目の動作自体を表しており、そこには意味における意図性が低いように観察される。それは、文の述語から伺われることである。その動作に対して「ほっとする」ことは、「目をまたたく」における意図性が低く、ただ<Эрчүүдийн ухаан ч төрд бас хэрэгтэй шүү (男の知恵は政治に欠かせないものだ)>という自分の意思を目の動作によって再確定している合図に過ぎない。

他の例を見てみると、Тэрээр над руу нүд ирмээд өнгөрлөө. (彼は私に目をまたたいてすれ違った)、Хулан түүн рүү нүд ирмэн аальгүйтэв. (ホランが彼に目をまたたいてふしだらに振る舞った)のように、別の動詞が後置することによって、その動詞による動作の状態を示しており、ここでの慣用句には意図性が低いことが見られる。

このように、「нүд ирмэх」は本動詞を後置するが多い。まれに文末に置かれる場合を否定しないが、その場合の意味においても、前文か文全体による意味を証明する機能に過ぎないことを示しておきたい。

(b1) の用例において、「нүдээ ирмэх (逐語：目をまたたく)」はそれぞれの文におい

て意図性が含まれ、その透明性が明らかに見える。構成的に、(a1) の文と同様に、別の動詞を後置する場合もあるが、ここでその動詞による動作の状態を表しているとは考えにくい構成要素である。つまり、機能と意味は後置する動詞と性質が異なり、意味はそれとは別に働くことであると言えよう。

各文にどのような意図性が含まれているか、それぞれの文における表現の意味を見てみよう。

2. 「目をまたたく」 — 相手を自分の意見に〈納得させる〉ための意図性
3. 「目をまたたく」 — 女の人を〈ふしだらに振る舞う〉意図性
4. 「目をまたたく」 — 犯人を〈暴く〉ための意図性
5. 「目をまたたく」 — 私を〈安心させる〉意図性

このように「再帰所有接辞」による意味が見えるが、ここで対象とした (a1) (b1) は④の中では同一の構成要素による表現であり、特別な例である。

最後に、上記の①～④までの用例を対象に分析した結果として以下のことを示したい。

(a) 及び「対格」のみの場合、対象者の外界に対する意図的な行動や非意図的な心情が表される。それに対して、「再帰所有接辞」が必要とされる要因を考察すると、「再帰所有接辞」が有無の用例の中で (b) 及び「再帰所有接辞」の場合は、対象者の意図と判断による感情評価やその態度を表す動作である。

従って、「目」とは人間の分離不可能所有物であるため、視力器官の働きとは異なる意味対応を表す目途が実現されていると考える。つまり、視力器官が感情描写へ変化するプロセスに貢献しているのが「再帰所有接辞」であり、統語上の構成要素は慣用句の意味の程度を決める可能性を促している。ここで、身体部位慣用句の場合「再帰所有接辞」が無くては成立しない決まった表現が多いことを指摘したい。

ここで強調したい点は、③で取り扱った慣用句全てがマイナス意味の感情・評価を表していることが偶然ではないと思われる点である。構成要素の述語の殆どがマイナス意味の動詞であることも観察され、述語の意味にも対応した構成であると見られる。

そして、さらに「再帰所有接辞」を構成要素に持つ「目」以外の身体部位名称を含む慣用句の構成にも触れておきたい。

- (口) : амаа бузарлах, амаа буцаах, ам хэлээ билүүдэх, ам хэлээ олох, ам хэлээ урчих
шахах, амаа алгадуулах, амаа барих, амаа олохгүй идэх, амаа үдүүлэх, амаа хамхих,
амаа таглуулах, амаа татах
- (頭) : бөндгөрөө алдах, тархиа гашилгах, толгойгоо алдах, толгойгоо ганзагалах,
толгойгоо мэдэх, толгойгоо цусдах, толгойгоо шаах
- (顔) : нүүрээ барах, нүүрээ түлэх, нүүрээ улайлгах, нүүрээ ширлэх, царайгаа хормойлох
- (骨) : ясаа цайтал, ясаа амрах, ясаа тавих

- (身) : биеэ барих, биеэ оторлох, биеэ чагнах
- (手) : гараа бузарлах, гараа гаргах, гараа дүрэх, гараа хумхих
- (足) : хөлөө хугалчих гэх, хөлөө олох
- (内臓) : голоо зогоох, голоо тавих, голоо тасдах, голоо цохих, зүрхээ авах, зүрхээ зүсүүлэх, зүрхээ сагсайлгах, махаа идэх, уушиг цөсөө хөөргөх, цээжээ дэлдэх, цээжээ түрэх, элгээ эвхэх, элгээ эмтлэх
- (爪) : хумсаа нуух, хуруу хумсаа тайрах
- (腿) : гуяа алгадах, гуяа ганзагалах
- (その他) : хамраа сөхөх, хоолойгоо зангируулах, хошуугаа худалдах, хөмсгөө зангидах, хөмхийгөө зуух, хуухиа маажих, хэлээ хазах, уруулаа унжуулах, үсээ үгтээх

構成要素の述語の性質を見ると「алдах (失う)、бузарлах (汚す)、билүүдэх (研ぐ)、урах (破る)、түлэх (焼く)、татах (引く)、тавих (離す)、тасдах (切る)、унжуулах (垂らす)」というマイナス意味の動詞が多い。

上記の通り、「目」以外の身体部位の慣用句においても「再帰所有接辞」を伴う場合は同様にマイナス意味の表現が多いことが見える。つまり、およそ 11 項目を含む全 61 句の 54 句がマイナス意味の表現である。これらが「再帰所有接辞」が無くては慣用句として成立しない表現であることが特徴的である。

「目」は感情表現が多かったことに対して、その他の部位は「顔」と「内臓」の部位名称以外には感情表現が現れず、心情や動作や状態等を表す表現が一般的であるが、それらもマイナスの意味であることが「再帰所有接辞」の慣用句の意味への関与と思われる。

4.4.3 本節のまとめ

前述 (図 1) の通り、両言語の「目」を含む慣用句において「対格」(日 : 60.7% ; モ : 45.2%) 使用例が一番多く、両言語共通に見られる。日本語と異なり、モンゴル語における「対格」使用例全 43 句の内 18 句が「対格+再帰所有接辞」構成である (表 11b、表 14 参照)。

表 14 モンゴル語の「対格」「対格+再帰所有接辞」構成の慣用句

総数	形式	数	用例
対格 (43)	N+対格 (ø) + V	25	нүд үзүүрлэх, нүд хариулах, нүд буруулах, нүд салгахгүй
	N+対格 (ø) + 再帰 (-ээ) + V	18	нүдээ эргэлдүүлэх, нүдээ аниад өнгөрөх, нүдээ бүлтийлгэх

このように、二種の構成の慣用句が現れるが、両方とも日本語に「対格」のみしか現れず、モンゴル語の「再帰所有接辞」の意味役割を明白にする必要性があり、その意味を検討することを試みた。分析の結果を以下において示す。

表 15a において「対格」のみの使用例、表 15b において「対格+再帰所有接辞」構成の表現を示し、構造や意味を確定した。意味的に、表 15a では「注目、行動、心情（好、憎）」の意味、表 15b では「無関心、心情（好）、感情（怒、興奮、驚、憎）」の意味が殆どであり、表 15b のほうが感情を表す意味が圧倒的に多いことが見える。このようなことから、再帰所有接辞（-ээ）により慣用句の意味が左右するという推定が導かれる。

そして、表 15a や表 15b の用例それぞれの意味を三つに分け、考察を進めた。

まず、①の場合は、構成要素が異なるが、類似の意味を持つ表現を対象にした。

〈心情（好）〉のような意味の場合、格助詞の在り方によらず動詞の意味に支配されているような場合に限って、動作の「意図的」か「非意図的」かが示される可能性が考えられる。例えば、〈心情〉の意味において、нүд булаах（逐語：目を引く）は非意図的な動作であり、一方 нүдээ өгөх（逐語：目がない）は意図的な動作である。このように動詞に支配される機能が働くが、それと同時に「再帰所有接辞」が示すのは、その「意図」の表出程度を強める機能を示すものであると思われる。これは①のもう一つの用例が表す〈無関心〉の意味においても有効的である。

次に、②における「対格」のみの場合、〈喜び〉の感情以外は〈行動〉と〈認知〉の意味を表すのが殆どである。

また、③の「対格+再帰所有接辞」の場合は、感情に関する意味であり、「怒り」と「驚き」を意味する表現が多い。これらの用例は「再帰所有接辞」が無くては成り立たないような固定された統語的構成である。

このような統語上の構成要素の必然性を考えるには、まずその意味に注目することが常用と考える。нүдээ гурвалжлуулах（逐語：目を三角にする）、нүдээ гялалзуулах（逐語：目を光らせる）、нүдээ улайлгах（逐語：目を赤くする）、нүдээ жаргайлгах（逐語：目を側める）などは怒りを、нүдээ бүлтийлгэх（逐語：目を丸くする）、нүдээ эргэлдүүлэх（逐語：目を回す）などが驚きを表している。構成要素それぞれの述語の意味からも分かるように、目の形や色などを通常よりは強く変えて表出するため、その感情程度を示すために「再帰所有接辞」が使用されているものと思われる。

対照考察すると、日本語では述語が重要な役割を果たす一方、モンゴル語では再帰所有接辞（-ээ）が「目」で表される意味強度を高める機能を果たしている。

しかし、再帰所有接辞（-ээ）は、話し手が対象者（第三者）の感情に対する評価の意味を貢献しているが、それと同時に「再帰所有」の基本機能は対象者に関連付けさせる意味としても働く。

最後に、④において、構成要素が同一の慣用句を並べており、ここで「再帰所有接辞」の有無により意味が左右するかどうかについて比較し、その結果を述べる。

構成要素の動詞が使役形の場合に「再帰所有接辞」を伴う用法が検証される。文中において、「再帰所有接辞」が無い場合は、表現が自立して慣用句を成立する機能が低く、後に来る本動詞による動作の「状態」を表す機能を持つ。例えば、1. Дулмаа зах зээлийн эрээн мяраанд нүд унаган явав. 2. Бат хот газрын хээнцэр хүүхэнд нүдээ унагаах шахав. 1.で「нүд унаган（逐語：目を落として）」は後置する「явав（逐語：行った）」という本動詞の状態を表しており、このように本動詞が無くては不自然である。一方、2. において、慣用句自体が述語の役割を果たし、「目を引く」に当たる意味を表す。

このような、文中の役割が下記（a1、b1）の用例においても有効である。

④では、さらに同一の構成要素であり、動詞が使役形ではない唯一の用例が現れる。

(a1) нүд ирмэх（逐語：目をまたたく）

(b1) нүдээ ирмэх（逐語：目をまたたく）

両者共に同一の動詞であり、「目で合図する」ことを意味している。

そして、（a1）（b1）の分析を行った結果、両者の間で意味ニュアンスの差が生じることが分かった。

（a1）の場合は、нүд ирмэх（目をまたたく）は、目の動作自体を表しており、文の述語から伺われる通り、意味における意図性が低いようである。つまり、対象者の意思や心情を再度に確認している合図に過ぎない。文中においては、基本的に別の動詞が後置する場合が多く、その動詞による動作の状態を示すこととなる。従って、意図性が低いことが示される。

これに対して、（b1）の用例において、нүдээ ирмэх（目をまたたく）はそれぞれの文において意図性が含まれていることが分かった。構成的に、（a1）の文と同様に、別の動詞を後置する場合もあるが、その動詞による動作の状態を表しているとは考えにくい構成要素である。つまり、機能と意味は後置する動詞と性質が異なり、意味はそれとは別に働くことであると言えよう。

そして、①～④までの用例を対象に全体的にまとめると下記の通りである。

（a）及び「対格」のみの場合、対象者の外界に対する意図的な行動や非意図的な心情が表される。これに対して「再帰所有接辞」が必要とされる要因を考えると、（b）及び「再帰所有接辞」の場合は、対象者の（対象者の意図と判断による）感情評価の態度を表す機能であると示したい。

従って、ここで「再帰所有接辞」を構成要素に持つ「目」とは、人間の分離不可能所有物であるため、視力器官の働きとは異なる意味対応を示す目途が実現していると考えられる。つまり、視力器官が感情描写へ変化するプロセスに貢献しているのが「再帰所有接辞」で

あり、統語上の構成要素により慣用句の意味が成り立つ可能性を促していると言えよう。ここで、身体部位慣用句の場合「再帰所有接辞」無くては成立しない決まった表現が多いことも挙げたい。

強調したい点は、③で取り扱ったように、感情評価を表す慣用句は「再帰所有接辞」により意味成立かつ意味程度が決められることを指摘したい。これは他の身体部位慣用句においても有効であることが判定され（他の部位名称を含む表現：61句の内54句がマイナスの意味）、これらが「再帰所有接辞」無しでは慣用句として成立しない表現であるのが特徴的である。

このように、モンゴル語の慣用句における対格後続の再帰所有接辞は慣用句の意味成立や意味程度に貢献できることを指摘したい。

最後に、「再帰所有接辞」構成の慣用句の意味分析の対象例を表にまとめると、表16の通りになる。慣用句の逐語は表15bに付しているため、ここで意味説明のみ付けておく。さらに、同一構成要素による「対格」対応例が有る場合は用例を入れておくが、それらの意味は表15aにおいて付してある。

表16において、意味性質の欄にはマイナスの意味かプラスの意味かを（-）、（+）の記号で記し、これらのどちらかに当てはまらない意味に対しては空欄のままにしておく。

表16 「再帰所有接辞」構成例の意味判定

意味分類	用例	意味 (日本語対応例)	意味性質	「対格」 例の有無
評価	нүдээ олох	正しい判断	+	
無関心	нүдээ аниад өнгөрөх	見逃す（目を覆う）	-	
	нүдээ аньж чихээ бөглөх	見ないふりをする（目を覆う）	-	
行動	нүдээ анийлгах	考え事をする様子		
	нүдээ ирмэх	目で合図する（目をくわす）		нүд ирмэх
	нүдээ чилээх	夢中になる（目を据える）		нүд чилэх
	нүдээ ширгээх	集中する		
心情	нүдээ өгөх	好む（目がない）	+	
	нүдээ унагаах	好む（目を奪う）	+	нүд унах
	нүдээ ухаж өгөх	夢中になる（目がない）	+	
感情評価	нүдээ бүлтийлгэх	驚き（目を丸くする）		
	нүдээ гурвалжлуулах	怒り（目を三角にする）	-	
	нүдээ гялалзуулах	興奮（目を輝かせる）	+	

	нүдээ гялалзуулах	怒り（目を光らす）	—	
	нүдээ ухуулах	ひどく叱られる	—	нүд ухах
	нүдээ улайлгах	怒り（目を白黒する）	—	
	нүдээ жартайлгах	怒り（目を側める）	—	
	нүдээ чичлүүлэх	嫌、怒り	—	нүд чичлэх
	нүдээ эргэлдүүлэх	驚き（目を剥く）		

用例は上記の通りまとめておくが、意味的な分析の詳細は 4.4.2 や、分析結果のまとめは 4.4.3 からそれぞれ参照されたい。

4.5 モンゴル語の対象慣用句における「所有接辞 (-тай)」の意味

4.5.1 はじめに

身体部位を含む慣用句における所有構造は日本語に「ある」動詞、モンゴル語に「-тай」所有接辞により構成されている（表 11d 参照）。

本節では、所有構造を示すモンゴル語の「-тай」の二種の用法の違いや、そこで慣用句における「-тай」の意味を分析し、伴って日本語の慣用句における所有構造との相違点を対照考察することを目的とする。モンゴル語の「-тай」の二種というのは、

1. 共同格の「-тай」
2. 接辞の「-тай」
 - 2.1 存在の意味
 - 2.2 所有の意味

である。

従って、これらの区別に対する分析が求められ、それは、慣用句における「-тай」構成の所有構造を日本語の同じ場合に対照し、身体語彙慣用句における所有構造の特徴を明白にするための前提となる。

対象慣用句は 4.2.1 において分析していた用例（表 11d）である。両者は意味的に類似しているが、統語的な違いにより身体部位の所有に対する意味はどのように成立されているか、その相違点が注目される。ここで取り扱う用例において「-тай」接辞は所有の意味で使用されていると思われるが、身体部位に対するため、所有の意味はどのように拡張しているか、どのように変換しているかを明らかにしたい。

表 11 d において、左側は日本語の慣用句の構成であり、右側はモンゴル語の慣用句の構成である。

表 11d 「主格 = 所有接辞」

項目	日本語	モンゴル語
慣用句	目がある	нүдтэй
格・形	主語＋主格＋アル	主語＋所有接辞（-тэй）
動詞	自動詞	×
意味	鑑識力、認識力	

日本語の「目がある」、モンゴル語の「нүдтэй（逐語：目持ち）」は、両言語共に身体部位の所有構造である。日本語には存在・所有を意味しているのが「ある」動詞であり、モンゴル語には「-тэй」所有接辞である。ここで現れる「-тэй」を以下では、先行研究に従い、一般的に使用される「-тай」と称する。

モンゴル語の「-тай」接辞は母音調和により「-тай -гэй, -той」の3種が存在する。「-тай」接辞は「共同格」と同一形式であり、また「接辞」としての扱いもあり、それはさらに「所有」や「存在」の意味があるため、それらの意味の区別が把握しにくいことがある。

このような問題を踏まえ、本節では、まず、モンゴル語「-тай」を取りあげ、共同格としての存在の意味と、所有接辞としての所有の意味について分析する。次に、日本語において存在や所有を表す「ある」、「もつ」動詞を含む表現の意味特徴について確認し、モンゴル語の所有構造に対照考察する。

4.5.2 モンゴル語における「-тай」の共同格・所有接辞の区別

モンゴル語の共同格と所有接辞は「-тай」という同一形式である上、所有接辞においても所有と存在という両方の意味もあり、形態からは区別しにくい。そのため、特に慣用句においてどちらの意味から拡張しているか、どのような意味を表すかが把握されていない。

従って、ここで名詞後続の「-тай」の用法を確認し、それらの意味区別を検討する。

モンゴル語の「-тай」の両用法（接辞・共同格）区別や、その概念や用語も様々であり、研究対象によりその名称も統一ではない。

まず、所有接辞「-тай」の概念に触れておきたい。接辞の意味に関する「-тай」に関して、梅谷（2012）は「派生接辞」、橋本（2010）は「所有を表す接尾辞」と言い、格助詞用法においては、アマルジャルガル・堀江（2006）が「共同格の接尾辞」と称している。ここで、接辞（-тай）の所有と存在の両方の意味区別を分析対象とするため、一般的な名称として「-тай」接辞と称することとする。そして、研究者らによる「-тай」に対する概念に触れておく。

- 「-тай」は典型的に所有を表す接尾辞である（Poppe 1970:97）
- 「-тай」は動作主が何らかの物、特性、属性を所有していることを意味する
(奥田 1989 : 87)
- 「-тай」は所属・所有を表す（塩谷 2007 : 37）
- 「-тай」は所有だけでなく、存在を表す場合もある。本来の所有を表す場合には物・人・属性の所有の三つが見出される。人や属性は不可分離的である（橋本 2010 : 113）

モンゴル語の「-тай」の所有に関する用法についての先行研究をまとめたのが梅谷（2012）であり、主に参照していく。分析の対象範囲においては、モンゴル語の「-тай」は名詞・形容詞・副詞・動詞などに付く用法もあるが、本研究では慣用句を対象のするため、名詞語幹に付く場合のみに絞る。

梅谷 (2012 : 55) では、Ш.Лувсанвандан (1968 : 181)、 Kullmann, Цэрэнпил (1996 : 98)、Ц.Өнөрбаян (2004 : 214) らの「共格を伴う語が述語修飾で用いられるのに対して、派生接辞による派生語は主に連体修飾で、時として述語修飾で用いられる」という主張を検証し、ただし「明確に言及しているものはない」と記している。このように、梅谷 (2012) によると、「-тай」の共同格か派生接辞かの区別は場合によっては難しく、適用範囲 (動詞・形容詞・副詞・名詞に付く場合) も明白ではないようである。

しかし、共同格と構成要素の述語の性質により把握されないわけでもないが、接辞の場合は、さらに「存在」と「所有」の意味を持っており、それらの意味を区別しておくことが慣用句の構成要素とされる用途を追求するには欠かせないのである。

従って、ここで「-тай」の「共同格」と「接辞」の区別や、さらに接辞が表す「存在」と「所有」の意味区別について分析を行い、それに基づき身体語彙慣用句に現れる所有接辞の意味役割を明白にすることを旨とする。対象用例は「共同格」と「接辞」の両者も名詞語幹に付く場合に限定する。具体的には、「名詞+-тай+名詞」の構造に着目する。

分析は、下記における表 17a では共同格の「-тай」の用法を、表 17b においては接辞の「-тай」の用法をそれぞれ用例を付け、分析結果を示す。このように区別した要因を以下において説明する。

17a、表 17b における記号は、「-тай」を伴う主語 (所有物) の「目」を N と、それ以外の名詞 (所有者) を N1 と記し、同時にモンゴル語の例にグロスと意味も付ける。最後の欄では、「-тай」を伴う名詞の意味役割と構成要素の有生か無生かを記す。詳しく言うと、有生物 I (人間)、有生物 II (人間以外)、無生物 I (物理的な物)、無生物 II (抽象的な概念) のように記す。その他、有生か無生か、分離可能か不可能かを決定しにくい「身体部位」名称を使った例を「身体」と記し、表に網かけを施す。

表 17a 共同格「-тай」の用例

構文	形式	例	グロス (意味)	意味構成 (構成要素の性質)
I	N-тай+V	Багтай уулзах	バトと会う (バトと会う)	共同者 (有生 I)
		Нохойтой тоглох	犬と遊ぶ (犬と遊ぶ)	共同者 (有生 II)
		Машинтай ирэх	車と来る (車で来る)	道具 (無生 I)
II	N-тай+Adv	Багтай хамтдаа	バトと一緒に (バトと一緒に)	共同者 (有生 I)
III	N-тай+Adv+V	Багтай хамт явах	バトと一緒に行く (バトと一緒に行く)	共同者 (有生 I)

表 17b 接辞「-тай」の用例

構文	形式	例	グロス (意味)	構成要素の性質
I. N-тай + N1	所有	Хүүхэд <u>тэй</u> хүн	子供 <u>と</u> 人 (子供を持っている人)	N, N1、有生 I
		Мөнгө <u>тэй</u> хүн	金 <u>と</u> 人 (お金を持っている人)	N 無生 I, N1 有生 I
		Бодлоготой <u>үг</u>	意図 <u>と</u> 言葉 (意図的な言葉)	N, N1、無生 II
		Ухаан <u>тай</u> хүн	知恵 <u>と</u> 人 (知恵がある人)	N 無生 II, N1 有生 I
		Сургууль <u>тай</u> нохой	訓練 <u>と</u> 犬 (訓練された犬)	N 無生 II, N1 有生 II
		Нуруу <u>тай</u> хүн	背中 <u>と</u> 人 (信頼性のある人)	N 身体, N1 有生 I
	存在	Ном <u>той</u> цүнх	本 <u>と</u> 鞆 (本が入っている鞆)	N、N1、無生 I
		Малгай <u>тай</u> хүн	帽子 <u>と</u> 人 (帽子を被っている人)	N 有生 I, N1 無生 I
		Хүнтэй гудамж	人 <u>と</u> 通り (人が多い通り)	N 有生 I, N1 無生 I
		Морь <u>той</u> хүн	馬 <u>と</u> 人 (馬に乗っている人)	N 有生 II, N1 有生 I
		Салхитай өдөр	風 <u>と</u> 日 (風の日)	N, N1、無生 I
		Өвчтэй мал	病気 <u>と</u> 家畜 (病気の家畜)	N 無生 II, N1 有生 II
II. N1 + N-тай	所有	Бат ах <u>тай</u>	バトが兄 <u>と</u> (バトは兄がある)	N1, N、有生 I
		Бат адуу <u>тай</u>	バトが馬 <u>と</u> (バトは馬を持っている)	N1 有生 I, N 有生 II
		Бат машин <u>тай</u>	バトが車 <u>と</u> (バトは車を持っている)	N1 有生 I, N 無生 I
		Бат ухаан <u>тай</u>	バトが知恵 <u>と</u> (バトは知恵がある)	N1 有生 I, N 抽象物 II
		Бат нүд <u>тэй</u>	バトが目 <u>と</u> (バトは目がある)	N1 有生 I, N 身体
	存在	Бат шалгалт <u>тай</u>	バトが試験 <u>と</u> (バトは試験がある)	N 無生 II

表 17a、表 17b において、形式上は「-тай」として同様であり、ここでは名詞に伴う場合を示す。しか、構成要素と意味における違いが生じており、その分析結果を下記に示しておく。

表 17a において、動作主は人間であり、動作の相手（共同者）は人間か動物であることが一般的であり、無生物の場合は動作主の動作の道具となる役割を担う。「共同格」を示す

「-тай」との構文は3種に得られるが、名詞に付けられる他の格助詞用法に同様に振る舞う。

構成要素の動詞の性質を見ると「瞬間的な動詞」が使用され、時間的な持続性を問わない「共起性（相手を求める）の動詞・副詞」を含むものが多いことが観察される。例えば、行く、来る、会う、付き合う、結婚する、話し合う、喧嘩する、一緒に、共に、等。対象名詞は有生性が多い一方、無生物の場合は動作の共同者ではなく動作の道具を表す意味になるため、日本語の「Nで」の意味に近い。

まとめると、共同格の「-тай」は有生名詞を対象にすることが一般的に見られ、共同的に行う行動を表すために使用されることが把握される。

表 17b は、表 17a と違い、接辞の「-тай」として振る舞い、構成要素らの相互関係により「所有」か「存在」を表している。このように、構成的にも意味的にも共同格の「-тай」と異なる。

統語的形式において「N-тай +N1」と「N1 +N-тай」の2種が現れ、構文の中で「-тай」を伴う所有物が所有者の前置にも、位置にも使用される用法が見られる。

分析のまとめとして、表 17a、17b における「-тай」の「共格」と「接辞」用法の区別を述べたい。

- 表 17a における「-тай」を伴う名詞が「N-тай+V」という基本的な形式を持っており、動作の共同者を示す役割である。これに対して、表 17b において「N-тай +N1」と「N1 +N-тай」という両形式により所有者と所有物の関係を示している。
- 従って、「-тай」構成の名詞は動詞や副詞にも直接関係される用法もあるが、表 17a、17b において名詞間の関係に限ることとした。このように、表 17b の「-тай」接辞を伴う名詞が構文の中で位置により形容詞・述語・副詞化される。例えば、構文 I では、「-тай」を伴う名詞は形容詞化され、主語の名詞を修飾している。構文 II では、主語の後に位置することにより述語の役割を果たしている。

要するに、「共格」と「接辞」の「-тай」は、形式・構文・意味役割において区別が付けられる。

4.5.3 モンゴル語の「-тай」接辞の存在・所有の意味区別

モンゴル語で所有・存在を表すのは、基本的に「бай-」「бий」動詞である。日本語の「ある」「いる」に近い用法が存在しているが、意味的に所有も存在も表すため、詳しい分析が求められる。日本語の同じ場合と対照しながら考察を進める。

まず、これらの概念に触れておき、それに基づき「-тай」接辞の所有と存在に関する意味区別を検討することを試みる。

そこで、橋本(2010)に基づき、モンゴル語の所有の傾斜を示せば、下記の通りとなる。
具体的に、談話場面における自然さにより並べることとする。

-тай > бий > бай-

の順になる。例を見ると、

Би машинтай > Надад машин бий > Надад машин байна
典型的な所有 > 所在 > 存在

このようになり、いずれも「私は車を持っている」という意味であるが、これらの所有の程度には差がある。「-тай」は所有の意味程度が高く、その次に動詞の中では、「бий」が「бай-」より所有の意味が強く、つまり「бай-」の場合「今持っている」という現状を述べるか、まれの場合は車を持っていることを「強調している」意味で使用されていると思われる。

このようにモンゴル語において「所在・存在」は動詞により表されるが、「-тай」接辞による所有が典型的に使用され、「бий」「бай-」動詞による用法が少ないことが認められる。表 17a、17b で見てきた通り、「-тай」の対象範囲が広く、所有者と所有物の有生無生も問わず、物理的・抽象的にも関係なく使用されている。ただし、「-тай」はさらに存在を表す場合もあり、その区別を明白にする必要がある。

「-тай」の使用例を見ると、動詞構文より制約があることが観察される。例えば、
НОМТОЙ ЦҮНХ (本が入っているバッグ)、МАЛГАЙТАЙ ХҮН (帽子を被っている人)、ХҮНТЭЙ ГУДАМЖ (人が多い通り)、САЛХИТАЙ ӨДӨР (風の日)、МОРЬТОЙ ХҮН (馬に乗っている人)等。これらの例では、構成要素の「存在」を表す「-тай」が一時的に関わる物・現象などに対して使用されるようである。詳しく言えば、存在物の現在形を示す「～ている」の意味に近く、対象者は人・動物・物・自然現象までの広い範囲である。そのため、一時的であり、所有の意味ではないと考えられる。日本語の「～の」「～ている」などに相当する通り、目の前にあって視察できる物・現象の過程と状態を述べる存在の意味を示しているように認識される。

「-тай」の所有の意味特徴として観察してきた通り、表 17b における用例の殆どが典型的な所有の意味であると思われる。説明すると、所有者に備わっている本来の性質を持つか、派生的な性質であっても、意図的で、長期的に保持されるものであるため、所有を表していると示したい。このような場合は、存在の意味が現れない。例えば、ХҮҮХЭДТЭЙ ХҮН (子供がいる人)、Баг ахтай (バトは兄がある)、мөнгөтэй хүн (お金持ちの人)、бодлоготой үг (意図的な言葉)、сургуультай нохой (訓練された犬)

これらの用例を日本語に対応させるとしたら、少ない場合に「ある」「いる」に、多くの場合に「持ち」「付く」「～的」の意味に解釈されるため、本来備わっているものの所有という意味が獲得されると思う。

しかし、抽象的な概念を示す意味においては存在・所有の意味を同時に含み、意図性が無いと言える。例えば、慣用句の場合は *нуруугтай хүн*（逐語：背中がある、意味：信頼できる人）のように、抽象的な概念の場合は *ухаантай хүн*（逐語：知性がある人、意味：賢い人）のように本来備わっている事・物の存在かつ所有を表し、物質的な所有物と異なる特徴を見せる。

以下、「-тай」に関して、先行研究を踏まえながら、考察を進める。

橋本（2010：113-114）では、「-тай」の存在を表す例として、*шувуу олонтой*（鳥がたくさんいます）、*гоё хөшигтэй*（美しいカーテンがあります）などのように、名詞が数詞か形容詞などにより修飾される場合が挙げられている。これは「-тай」を伴う名詞（所有物）よりその性質・数量などに焦点が当てられているように考えられ、「存在」と「所有」両方の意味も含めているようであるが、形容詞により修飾される名詞後続の「-тай」が存在を表すと推定される。

アマルジャルガル・堀江（2006：2-4）では、モンゴル語の「所有」の意味を一時的と、恒常的というように分類している。一時的な所有物の例として *улаан цамцтай охин*（赤いセーターの女性）を挙げ、今着ている服を所有物としているが、筆者の考えでは所有でなく、存在として扱われるように思われる。構文において焦点が物ではなく、物の性質を示す形容詞に集中していると認識され、現在の目に見える状況を指示する一時的な現象であり、所有の容認度は弱いと言いたい。つまり、服はその人の所有物かどうかというより、その人は今どのような状態で見えているかの外見を示す意味である。

角田（1991）に従えば、服の所有を確定する必要性が薄く、一方、必然ではないが、必ず所有物として示す場合を考えれば、その服は本人の所有物かどうかは話し手には目で見て把握されないため、所有物としての判断が不自然である。

このように、先行研究では、「-тай」接辞の分析対象例には存在と所有の意味が混合され、両方の意味の違いに対する透明性が低い、「-тай」を伴う名詞は存在と所有の意味のどれを含んでいるかが「構文構造」「動作結果」「状態継続」などの視点から観察すると区別が把握できるように思われる。

最後に、先行研究や、表 17b における分析に基づき、「-тай」を伴う名詞の存在と所有の意味の違いについてまとめる。

- 「存在」の意味： 「-тай」は人・物・自然現象などの主語に付けられ、一時的な現象を示す場合
- 「所有」の意味： 「-тай」は人・物・抽象物・身体部位などの主語に付けられ、長期的な現象を示す場合

そして、以下、表 17b における「-тай」の所有の意味として現れる身体語彙慣用句、さらに本研究の対象とする「目」を含む慣用句における「-тай」の意味に着目していくが、その前提として、まず日本語の所有を表す「ある」「もつ」などの動詞の文に対照する。

4.5.4 日本語の「ある」、「もつ」や、モンゴル語の「-тай」の対照

日本語の所有を表す表現は「～の」属格と、「ある」「いる」「もつ」「所有する」「している」などの動詞と、形容詞により構成されるのが一般的なようである。その中で使用頻度が高いと見られる「ある」、「もつ」の着目し、それらの存在と所有の意味特徴について考察し、伴って慣用句における所有の意味を比較することとする。これらの動詞が所有の意味において入れ替えが可能な場合も、不可能な場合もあり、それぞれの意味特徴を確定することが重要である。

まず、存在と所有を両方とも表すという「ある」の所有に関する意味を調べておく。

寺村（1982：155-161）によると「ある」は「出来事の発生、物理的存在、所有・所属的存在、部分集合・種類の存在」を表すという。従って、「ある」は所有の意味より存在の意味を表すことが基本概念であるように認識する。

「ある」の存在を表す構文は「N1 に N がある」が基本的であり、場所と物の関係を示す。これに対して、モンゴル語の場合は、「-тай」による所有文における所有者を N1 と、所有物を N と記す（表 17b の通り）。

「ある」の存在の意味は所有の意味に移転する場合に関して、川畠・嘉美（2008：39）によると、「N1 には N がある」「N1 は N がある」「N1 が N がある」の順に指摘されており、存在表現が次第に「場所」的な要素が薄れていく段階性を示すようである。その中で「N1 は N がある」の場合に着目すると、存在の場所が所有者に変わっていくプロセスが示唆される。

「ある」の所有を表す条件について、菊地（2000：149pp）では、構文が「N1（に）は N がある」を対象に示している。

- ① N が N1 の不可欠な要素として備わっており、つまり「属性」である
- ② N が N1 の置かれた状況を示し、つまり N1 に影響する「要因」として捉えられるという。そして、「奥さんがある」、「莫大な財産がある」という用例を対象に①の場合を持続的な状況と、②の場合を「相談がある」「時間がある」との文を対象に一時的なものである、と指摘している。筆者の考えでは、②の場合が所有よりは存在の意味を表しているように思われる。

また、存在と所有に関して、原沢（2003：2）では

- ①「宮本さんにはかわいい子供がいる」の文は場所の存在文

②「宮本さんにはかわいい子供がある」の文は所有の存在文

と示し、後者の場合を所有の意味に関連付けている。ここで、存在文の形式から離れていると認識される「N1はNがある」に着目し、分析を進める。

次に、「もつ」の意味について述べておく。先行研究らによると、所有動詞の中で「もつ」は使用頻度が高い動詞であり、構文において「もっている」のほうが所有の容認度が高いようである。

小柳（2009：90）によると、「もつ」という動詞は、語彙的に自分自身が着点として指定されている「再帰動詞」の用法が基本であると指摘している。つまり、具体的か抽象的なものが自分自身のところに移動し、その状態を保持することを意味するという。さらに、「もっている」の場合が変化の結果・状態を表すと示されている。

菊地（2000：150）では、「もっている」の所有の意味用法の条件を、

1. その時点で、具体的なものを手などに所持していること
2. 資産として、具体的なものや抽象的なものを所有していること
3. 責任下にあるものとして負っていること

と記している。筆者の認識として、2.の方を所有の意味として参照していく。

「もつ」構文における所有者と所有物の性質についての先行研究では、原沢（2003：1）によると、所有者には意志性が、所有物には非意志性が求められるようである。これは存在の所有文においても、「もつ」をもつ所有文においても有効であることを指摘している。用例として、「山田さんはデジカメをもっている」、「山田さんにはデジカメがある」である。

さらに、「もつ」の構成要素に関しては、金水（2004：7）では、新聞社説を対象に分析した結果、「もつ」は所有者の主語が有生と無生とが二対一の割合であることを示している。

ここからは、所有構造を「N1はNをもっている」のように設定し、具体的や抽象的なものを自分のものとして所持することという認識に至る。

最後に、上記の通り「ある」と「もっている」の所有に関する意味特徴についてまとめ、それらの所有の意味程度を確認する。

森田（1977）は、「ある」と「もつ」の違いについて、持続性（「ある」は一時性；「もつ」は永続性）の違いがあると述べている。由井（2000：123）は、「ある」のほうは単語本来の意味が残存され、所有といえども存在の意味が出てくるのに対して、「もつ」のほうは対象物を持った状態保持であり、存在のニュアンスは出にくいと指摘している。

原沢（2003：5）が、「ある」「もつ」の間には構文的な違いが存在すると指摘しており、次の用例を挙げている。

- A. 「山田さんがパソコンを持っている」
- B. 「山田さんにパソコンがある」

の場合、前者が所有者を中心にした所有表現であるに対して、後者は所有物を中心にした存在表現であるという。

構文において、川島（2008）と原沢（2003）が示す通り、「N1にはNがある」というより「N1はNがある」「N1がNがある」のほうが所有の意味に近づくように伺われる。

意味に対しては、「ある」の場合が菊地（2000）が示すように、NがN1の属性となるもので、持続的なものが所有の意味特徴を示す性質であると考えよう。

「もつ」の場合、小柳（2009）が示す通り、具体的か抽象的なものが自分自身のところに移動し、その状態を保持するものという性質を持ち、さらに「もっている」の場合が変化の結果・状態を表すと示している。

上記に基づき、両者の所有に関する意味を考察すると、

- ① 共通点として、「ある」と「もっている」は両方とも状態の継続性を示す性質であり、対象物は具体的でも、かつ抽象的なものでもあることである。時間的に、両方とも場合によって一時的、または長期的な状態を示すため、基本的に状態を保持する意味では共通しているが、構文や所有物（対象物）により左右される。
- ② 異なる点として、「Nがある」の自動詞構成の「ある」構文には所有物への働きかけが現れず、従って、結果状態が薄く、非意図的なため、「もつ」に比べれば所有の容認度が低く、原沢（2003）が示す通り「所有の存在」を表している。

一方、「Nをもっている」構文においては「もっている」が他動詞であるため、所有物への働きかけが強く、意図的な行動による結果が見られ、それが保持されていくという。また、森田（1977）に基づくと、「もっている」のほうが長期的な状態に使用されることが多いようである。

そして、下記、表 18 では日本語とモンゴル語の所有構造を対照しておく。観察した限り、所有の意味に対して容認が高い構造と見られる日本語の「ある」、「もつ」動詞と、モンゴル語の「-тай」接辞に絞り、所有の意味のみを対象にする。

表 18 において、容認度の強い場合を「○」、現れない場合を「×」、容認度が左右される場合を「△」のように記す。本研究において視野に入れる箇所を網掛けしておく。

表 18 両言語の所有の構成要素の対照

	要素	ある	もつ	-тай
対象	人・もの・こと・概念・属性	○	○	○
	身体部位（単独）	○	×	○
語彙	有生・無生	○	○	○
	再帰動作	×	○	×
統語	名詞化容認度	×	○	○
	場所関係	○	×	×
構文	主語関係	○	○	○
	主語+目的語	○	○	○
	目的語+主語	×	×	○
意味	所有物の存在	○	×	×
	持続性	○	○	○
	一時性	○	△	○
	長期性	△	○	○
	非意図性	○	×	×
	意図性	×	○	○

この通りであるが、所有物や置かれた状況などにより左右する可能性も考えられる。この中では、所有構成を成す動詞や接辞の「一時性・長期性」や「意図性・非意図性」などの性質は身体部位名称を対象にした慣用句においてどのように働いているかを考察していく。

先行研究から見ると、川島（2008：36）では、所有動詞が名詞化される場合による所有の意味が論じられ、「Nをもつ」が「N持ち」になると所有の容認度が高く、一方「Nがある」が「Nあり」の場合が所有の意味が薄れていくことを示している。

「もつ」が名詞化される場合を対象にすれば、モンゴル語の「-тай」の用法に近く、典型的な所有が把握される。「もつ」は再帰動詞でもある上、原沢（2003）が示している通り、「ある」には所有者の願望を示す「ありたい」という形態が容認されず、「もつ」には「持ちたい」というのがあるため、「もつ」には所有度が高いという主張に基づき、筆者が指摘している意図性が把握されるのではないかと考えられる。

上記の通り、モンゴル語の「N+тай」が日本語の「N 持ち」の構造と意味に近いように観察される。しかし、本研究の対象用例を見る限り、身体部位語彙を含む慣用句を対象にする場合、「もつ」が現れず、存在動詞の「ある」により構成されている。これに伴って、

慣用句の場合になると、典型的な所有の意味とは異なる意味拡張が現れているのかと思われる。

モンゴル語の構文において「所有物が形容詞などで修飾される場合の容認度が低くなっていく傾向である」という筆者の考察が正しければ、慣用句の場合を除くと、日本語においても有効ではないかと考えられるが、今後の課題としたい。

4.5.5 両言語の身体部位慣用句における「所有」構造の対照考察

ここでは、典型的な所有構造と見られる日本語の「ある」「もつ」動詞と、モンゴル語の「-тай」が後続する名詞を中心に両言語における所有構造の意味特徴について対照考察する。

そして、上記にて考察してきた通り、所有の構成要素それぞれの特徴を示す基本的な用例を挙げよう。

「ある」～	場所関係	「学校にはプールがある」
	所有物の存在を示す	「田中さんは子供がある」
	<u>身体語彙対象</u>	「田中さんは <u>目がある</u> 」
「もつ」～	名詞化容認度	「お金持ち」
	意図的で結果が得られる	「彼は財産を持っている」
「-тай」～	目的語+主語	「N-тай + N1 : Мөнгөгэй хүн (お金持ちの人)」
	<u>身体語彙対象</u>	「N1+N-тай : Бат <u>нүдтэй</u> (バトは <u>目がある</u>)」

モンゴル語の「-тай」は存在と所有の両方を表すという意味では日本語の「ある」に近いが、両言語の所有表現のみに限定すれば、基本的に所有物は人・物・概念などであり、日本語は「ある」「もつ」動詞の構成と、モンゴル語は「-тай」を伴う名詞の構成が見られる。これ以外には、身体部位を対象にする場合に限って「ある」と「-тай」との構造のみが見られる。

日本語もモンゴル語も所有表現の対象物が身体部位である場合、特殊な意味を持つことが推定される。従って、日本語とモンゴル語の所有表現の特徴が慣用句においても有効であるか確認すると共に、身体部位を対象にする所有表現の意味特徴に着目していく。

対象慣用句として、身体部位慣用句の構成特徴とも言える身体部位単独で対象とされる場合を、つまり「Nがある」、「N+тай」の形式のみに限定する。

日本語の「Nがある」の所有構造に関しては、上記(4.5.4)で考察してきた通り、「ある」を含む所有構造は状態の一時的な継続性と、非意図的な性質が維持されるべきである。身

体部位が所有物として挙げられる場合において、人の持っている「能力・性格・才能」などの抽象的な概念が示される。

伴って、他の所有物と違い、身体部位は「無性・有性」か「分離可能・不可能」などの性質が把握しにくいいため、身体部位名詞を含む表現における所有構造は解説が一筋ではないようである。例えば、

「目がある」:

- a. 通常の意味の所有構造: 「彼にも目がある」 — 視覚
- b. 特別な意味の所有構造: 「彼は目がある」 — 鑑識

a. の通常の所有の意味においては「ある」には場所関係が示され、生まれ付きの身体部位の存在を強調している「存在の所有」であると考えられる。b. の特別な意味で使われる所有構造において「ある」が主語に関係し、さらに「目」は身体部位の独特な意味として現れるため、「主語」が「場所」に、「具体物」が「抽象物」に移転するプロセスが行われ、このように存在の「ある」が抽象的な意味として所有に転換していることと思われる。

伴って、所有構造の慣用句における特徴を調べる必要性が感じられる。そして、両言語の対照考察の対象用例を主に下記の通りとする。

A. 「目がある」 — 「нүдтэй」

この慣用句における所有の意味は日本語で「ある」動詞、モンゴル語では「-тай」接辞により構成されるが、両方共「目」を通ず鑑識力を意味していることが共通に得られる。

ここで現れる「鑑識力」に対して、それは人に本来備わっている能力か、後から身に付けられている能力かに捉われず、モンゴル語の「-тай」(用例では母音調和により「-тэй」である)は長く保持される性質を維持し、日本語の「ある」は持続性はあるものの、「ある」が示す一時性が機能しないようである。

しかし、所有構造の共通点として両者ともに「非意図性」が機能しているものと見られる。このような非意図性が「持つ」による典型的な所有構造が現れない要因としても伺われる。さらに、「目」を含め身体部位は人間の体の一部(分離不可能所有物)であり、それを持つものとして普通に述べることは不自然であるため、「持っている」による構造が認められないと考える。

A.の意味においては、モンゴル語の「нүдтэй」は、日本語と同様に、人の身体部位を通じて現れる能力を示しており、類似する。

このような、意味変換の現象を小柳(2009:138)では「包含関係」と示し、一方が他方の内部にあるということを指摘している。従って、目は肉体部位である一方、その部位の基本機能である「視覚」に本来備わっているか、経験の元で次第に能力として保持され

表 19 「身体部位」と「ある」の関係

意味	「身体部位」の所有に関する性質	「ある」の所有に関する性質
本来の性質	分離不可能所有物	一時的な継続・非意図性
	身体部位としての単独所有用法	主に形容詞修飾による単独所有用法
慣用句への転換	属性物としての単独所有用法	属性物としての単独所有用法
	属性物（能力・性質）を示す	属性物を対象にする用法
	属性物のため、継続性がある	属性物の長期性を表す
	属性物を所有する必然性がない	属性物のため非意図性を持つ

日本語とモンゴル語の慣用句における所有構造の相違点を考察する。

身体部位の単独所有においては、日本語のほうが形容詞修飾などにより構文から把握されるが、これに対して、モンゴル語の「-тай」接辞は構文からは区別されず、一般的に使用される。詳しくは、「Adj+N+тай」、「Adj+N+ある」という同じ構造において、身体部位の状態に対する意味であることが日本語において把握されるが、モンゴル語においては形式からは把握されない。つまりモンゴル語における「-тай」は日本語の「持っている」「ある」の両方の用法において機能される。

以下、身体部位に対する所有構造の構文を見ておく。

a. 身体部位が修飾される場合：

「青い目をしている」—「Цэнхэр нүдтэй」

主語が形容詞により修飾される場合は両言語共に字義通りの通常の意味を持ち、「○○な身体部位を持っている」という身体部位の所有に着目した表現となる。ここで「ある」に構成される場合になると不自然であり、身体部位所有物の存在の意味として「している」が働いていると思われる。モンゴル語も「している」と同様な意味であり、この場合に限って身体部位の目に見える性質を表している。

一方、モンゴル語の場合は慣用句においても同様な形式を持ち、構成語彙により意味の区別が付く。例えば、өлөн нүдтэй (逐語：早い目を持っている、意味：目が早い)、холч нүдтэй (逐語：遠い目を持っている、意味：見る目がある)、сэргэг нүдтэй (逐語：冴えている目がある、意味：朝起きが速い)、хурц нүдтэй, гярхай нүдтэй (逐語：鋭い目を持っている、意味：鑑識力が高い) などのように、形容詞修飾の「Adj+N+тай」形式は身体部位単独においても、属性物においても有効である。

続けて、身体部位単独に対する所有構造を比較する。形式は、日本語において「N+主格+動詞」、モンゴル語において「N+接辞 (-тай)」である。

b. 身体部位が単独で所有される場合：

「目がある」 — 「нүдтэй」

日本語の「ある」は身体部位を対象とする場合は属性物の所有を表し、その属性物の長期的な保持性を示す。身体部位を属性物として、抽象物として捉える場合に限って本来備わっている所有物の一面の「存在」を意味していると考えられる。つまり、分離不可能所有物の存在を表すこととなるため、それを所有する意図性が不必要であり、従って非意図性を持つ「ある」が有効的であることが分かる。このような性質により、身体部位を含む慣用句において典型的な所有構造（持っている）が使用されていないと推定される。

これに対して、モンゴル語の場合は典型的な所有構造の「-тай」が使用されるが、所有物を抽象的に捉えるため所有と存在の両方が含まれる。ここでは意図性・非意図性を示すのが簡単ではない。それは「нүдтэй（目がある）」という能力は生まれつきか、努力の結果得られた能力かが、どのような物に対して言うかにより左右するものとする。

「-тай」は通常の所有構造において「持っている」に近く、意図性が一般的なようであるが、身体部位を始め抽象的な概念を対象にする場合は、日本語の「ある」が示す非意図性も現れる傾向である。

このように身体部位を含む慣用句において「-тай」と「ある」の共通点は、身体部位を「属性物」とする捉え方や、属性物を「長期的に保持されるもの」とする認識が類似し、身体部位を含む慣用句における特徴として伺われる。

さらに、両言語とも慣用句における所有構造において否定形が現れ、その対応から所有の意味程度を考察しようとする。例えば、

「目がある」（鑑識力がある） ≠ 「目がない」（好きなものに夢中である）

「нүдтэй」（鑑識力がある） ≠ 「нүдгүй」（鑑識力がない）

「目がない」は「目がある」の否定形を示さず、所有物に関して属性の所有も無く、「目」という身体部位としての捉え方が認識される。つまり、〈好きな物を見て欲しいという気持ち〉の程度を強める意味が「目を上げるほどに好き」のように表現される。従って、慣用句に現れる「ある」の存在・所有の意味に拘らず、対象物をどのように捉えているかにより否定形の機能も本動詞に影響されずに機能できるのが慣用句に現れる特徴である。

一方、モンゴル語の場合は、「нүдтэй（逐語：目が有る）」の否定形として「нүдгүй（逐語：目がない）」があり、否定形の場合は〈鑑識力が無い〉ことを意味し、所有接辞の否定として働くと同時に、慣用句としての意味も維持される。これは、モンゴル語の「-тай」接辞は慣用句においても有効に機能し、身体部位の属性という捉え方もぶれないようである。

つまり、身体部位を含む慣用句において「-тай」接辞は典型的な所有接辞として働くことが形容詞修飾構造の慣用句からも、否定形の慣用句からも伺われ、日本語の「ある」動詞の所有構造よりは所有の用法が安定していることが分かる。

ここまでの考察は「目」以外の身体部位を含む慣用句を見ても有効的である。

日本語には「頭がある」しか観察されないが、モンゴル語においては толгойтой (逐語：頭がある、意味：思考力がある)、амтай (逐語：口がある、意味：口が速い)、хэл амтай (逐語：舌口がある、意味：i. 喧嘩を売る、ii. 大衆の口に乗って上手くいかない)、зүрхтэй (逐語：心臓がある、意味：勇気がある)、элэгтэй (逐語：肝臓がある、意味：親しみがある) なども存在し、これらが属性に対する所有の意味としては変わらない。

さらに、上記 a. の用例のように、形容詞修飾構造も多数存在する。例えば、зөөлөн чихтэй (逐語：やわらかい耳がある、意味：口を聞く)、хагуу чихтэй (逐語：硬い耳がある、意味：口を聞かない)、ширэн нүүртэй (逐語：皮の顔をしている、意味：恥がない)、муу амтай (逐語：悪い口を持つ、意味：ネガティブな言葉を使う)、хар элэгтэй (逐語：黒い肝臓を持つ、意味：懐く心が無い)、алтан гартай (逐語：金の手を持つ、意味：腕が上手い)、урт гартай (逐語：長い手を持つ、意味：スリの習慣がある)、урт чихтэй (逐語：長い耳がある、意味：耳が早い)、том толгойтой (逐語：大きな頭を持つ、意味：他人を聞かない)、холч нүдтэй (逐語：遠くの目がある、意味：遠くを見る目がある)、хоёр нүүртэй (逐語：両顔を持つ、意味：態度が変わる)。

4.5.6 本節のまとめ

本節では、日本語とモンゴル語の所有構造を示す「ある」、「もつ」「-тай」の意味を対照し、所有構造における意味的な特徴について考察した。分析の結果を下記の通りに示す。

- モンゴル語の「-тай」接辞の両方用法の区別は「構文役」や「意味特徴」によるものであることを示す。「-тай」接辞として、一時的に保持される現象や物に対する場合は「存在」であり、本来備わっている性質を含む対象物を取ることが多く、長期的に保持される場合は「所有」の意味が優先することが分かった。このように、「存在」と「所有」の意味の違いは物の性質より時間的・空間的な視点から区別することが妥当なように思われる。そして従来の研究で定義されているように、「-тай」は典型的な所有を表す接辞法であることが認められる。
- モンゴル語の「-тай」は存在と所有の両方を表すという用法においては日本語の「ある」に近いが、所有の意味としては日本語の「N 持ち」の意味に近いことが把握される。両言語の所有表現のみを観察すれば、基本的に人・物・概念に対して「ある」、「も

つ、「-тай」と、身体部位を対象にする特殊な意味においては「ある」、「-тай」により構成されることが見られる。

- 身体部位が修飾される場合は、モンゴル語に通常の場合においても、慣用句の場合においても「-тай」により構成されており、それらの意味の違いが把握されにくい、修飾されている表現を日本語に対応させてみれば、「ある」ではなく「している」に変わり、モンゴル語において形容詞修飾の場合は「所有物の存在」の意味に近い。しかし、このような用法は慣用句においても有効的であり、その場合は身体部位を属性として捉える意味では「ある」に近い。一方、日本語の場合は、通常の所有として「○○な目をしている」は目で把握される特徴に対して使われ、慣用句の場合は身体部位が持つ能力（不可欠な様子・一面¹⁷）の長期的な保持性を示している。
- 従って、日本語の「ある」は身体部位を対象とする場合は属性物として捉え、その属性物の長期的な保持性を示す。つまり、抽象物として捉える場合に限って本来備わっている所有物の一面の「存在」を意味していると考えられる。そのため、分離不可能所有物に対しては「持つ」が示す意図性が不必要であり、従って非意図性を持つ「ある」が有効的であることが分かる。

これに対して、モンゴル語の場合は「-тай」が身体部位を「属性」として捉える捉え方や、属性物を〈長期的に保持されるもの〉とする認識において「ある」の用法に類似し、身体部位を含む慣用句における特徴として伺われる。

しかし、モンゴル語の「-тай」が広範囲に見られ、日本語の「ある」の所有の用法には制限がある。

¹⁷ 菊地 (2000 : 147)

4.6 本章のまとめ

文法構造が似ている日本語とモンゴル語は慣用句においても同様であり、基本的に SOV 構造が維持される。動詞慣用句構成における格助詞分布率¹⁸においては、両言語共に「対格」使用例が多い。このようではあるが、統語的構成における違いも生じるため、両言語の対象慣用句における「主格」、「対格」使用例の比較分析やモンゴル語独特な構成である「主格+所有接合語 (21 句)」、「対格+再帰所有接辞 (18 句)」、「所有構造」などの用法や意味に着目した分析を行った結果を以下においてまとめる。

4.3 「主格+所有接合語」に関して：

日本語の「N+ガ+V」、モンゴル語の「N+ \emptyset +V」は同様な構成であり、意味は、①目の機能（視力、視線）、②能力（認識力、判断力）、③身体行動（身体習慣、生死）、④感情（驚）、⑤注目（好奇心、注意）のように多岐に渡る。

日本語の「N+ガ+V」に対してモンゴル語の「N+ \emptyset +**нб**+V」構成の慣用句も多く対応する。両言語共通に現れる意味は、①感情（喜、驚）、②心情（ネガティブ状態）、③無力（無集中力、無判断力）、④表現力（言語力）が基本的である。従って、モンゴル語の慣用句における「所有接合語（**нб**）」の慣用的意味への影響について分析を行い、結果をまとめる。それらの用例は、意味的に二つに分けられる。

モンゴル語の「主格+所有接合語（**нб**）」構成慣用句の意味は二つに分類できる。

1. 感情・心情（喜び、落ち込み、不安、怒り、悪気、憎み、欲張り、恐怖）
2. 能力（無判断力、無認識力、表現力）

この中で 1. の意味が多く、つまり身体語彙慣用句における「**нб**」は話者から第三者（経験者）への感情表情に対する評価を示し、その殆どがマイナスの意味を表している。対象者が第三者であるため、自分よりも表出度が強く現れ、その意味表示は「**нб**」なしでは不可能に近いと言えよう。

他人へのマイナス評価に関して、山本（1990）¹⁹に従い、自分へのマイナス評価が不自然であり、特に感情表情に対する評価は、鏡を見ない限り自分の目で表される感情を見ることはできないと示そう。視察できるのは目の前にある他人であり、他人への評価を表出するにはより納得性のある文法構造でなければならないため、「**нб**」の焦点化機能が利用されたと示したい。

マイナス感情評価と「**нб**」の関係については次の通りにまとめられる。

¹⁸ 日：対格 60.7%、モ：対格 45.2% （主格 19.6%/主格 22.1%；与位格 14.9%/与位格 10.5%）

¹⁹ 「評価は他人のやることで、自分が自分を評価して褒めたり、けなしたりするのは、自分を冷静に客観的に捉えて評価する場合（相手に自分を聞く場合も）を除くと、普通ではない」（山本、1998：190）

i. 他人への評価：

普遍的な概念とも言えるが、統語的に「НЬ」の三人称対応と、対人関係的に批判というのが他人向きの傾向があるため、意味的に統語できる条件を持つ。

ii. 感情評価程度：

言語記号の「НЬ」の焦点化と、身体部位の「目」の焦点されやすさの一致が、感情表現の程度をより強くする効果を持たせていると考えられる。柳沢（1992）、角田（1996）らが指摘した通り、目は外部から観察されやすい部位であるので、焦点化されやす働きがある。

iii. 話者優先位置：

ここで取り扱った表現は「目+НЬ+自動詞」の構造であり、無意志性の表現となる。感情は意志性によらないものでもあり、その情報に関しては話者が事態を視察できるからこそ第三者（経験者）より優先の位置に置かれる。このように、第三者自体よりは、話者の感情表出に対する納得性の表現出力が求められ、そのために「НЬ」が貢献する機能を果たしている。

iv. 人称に対する認知：

日本社会において、〈自分〉に対する〈他人〉という人間関係がある通り、言語表現（人称名称や敬語など）にもそのような考慮が見られる。これは人間共通的な概念でもあるが、認知的にモンゴル語のほうが柔軟性があるようである。「НЬ」を見ると、〈他人〉を“内”にも“外”にも入れる機能を持っていると考えられよう。娜仁托娅（2011）²⁰に従い、話者の心理状態により他人（この場合、三人称に限らない）への接近性も表し、距離感も表す意味がある。

モンゴル語の「НЬ」が第三者の感情・心情に対するマイナス評価を表す機能が慣用句レベルにおいても、文レベルにおいても確定され、文レベルにおいて述語に変わる独立性を生む機能性も持つと言えよう。

慣用句レベルにおいて、モンゴル語における通常の「НЬ」の待遇表現（心理近接性）を表す意味が三人称を焦点にしながら、一人称や二人称を表す時に使われ、その場合は親しみを表すことがある。

文レベルにおいて、「НЬ」が無い場合、「N+Ø+V」構成表現を見てみれば、「目」の身体部位自体の様子が描かれ、慣用句の程度が「НЬ」を使った慣用句より低いように観察される。つまり、動作ではなく、動作の状態を表すこととなり、そこから感情の程度が弱いことが伺われる。これに対して、日本語では慣用句は述語として文末に位置し、慣用句そのものが〈驚く〉という本動詞と交替が可能のため、感情の程度や独立性が強く示されているように認識される。

²⁰ 「НЬ」には話者の心理的な中立的立場を表す傾向がある。（娜仁托娅、2011：181）

このように、両言語において文中における慣用句の意味の感情の程度が共通しないことが見られ、それは異なる統語的な要素が影響することが明らかになった。これに反する僅かな例の存在は否定しないが、殆どの場合が慣用句程度が弱く、補語的な役割を果たすことが判定される。

4.4 「対格+再帰所有接辞」に関して：

両言語の「対格」の用法や意味は基本的に似ているものの、モンゴル語の「対格+再帰所有接辞（全 42 のうち 18 句）」用法が目立ち、ここで「N+ σ + σ +V」構成の慣用句の意味を考察することとした。その結果は次の通りである。

「対格」のみの場合、対象者の外界に対する意図的な行動や非意図的な心情が表され、それに対して「再帰所有接辞」が必要とされる要因は、対象者の意図と判断による話し手への感情評価や態度を表出する動作であると示したい。

従って、ここで「再帰所有接辞」により強調される「目」とは、人間の分解不可能所有物であるため、その働きを強調することは、視力器官の働きとは異なる意味対応を表す目途が実現されていると考えられ、統語的な構成要素により慣用句の意味が成り立つ可能性を促していると言えよう。

強調したい点は、感情・評価を表す慣用句は「再帰所有接辞」により意味成立が行われることを指摘したい。これは他の身体部位慣用句においても有効であることが分かった(61 句の内 54 句がマイナス意味の表現に該当する)。

このように、モンゴル語の慣用句における対格後続の再帰所有接辞は慣用句の意味ニュアンスに貢献できることを指摘したい。

4.5 慣用句における「所有構造」に関して：

日本語とモンゴル語の所有構造を示す「ある」、「もつ」「-тай」の意味を検討し、両言語の慣用句における所有構造の意味的な特徴を対照考察し、その結果を下記の通りに示す。

慣用句における所有の意味は、日本語は「目がある」といって<ある>動詞、モンゴル語は「нүдтэй（逐語：目がある）」といって<-тай>接辞によりそれぞれ構成され、両言語共に「目」を通じる鑑識力を意味している。

モンゴル語の「-тай」は存在と所有の両方を表すという用法においては日本語の「ある」に近いが、所有の意味としては日本語の「N 持ち」の意味に近いことが把握される。両言語の所有表現のみを観察すれば、基本的に人・物・概念に対して「ある」、「もつ」、「-тай」と、身体部位を対象にする特殊な意味においては「ある」、「-тай」に限定している。

身体部位は修飾される場合も見てきたが、モンゴル語に通常の場合においても、慣用句の場合においても「-тай」により構成されており、それらの意味の違いが把握されにくい。

しかし、モンゴル語においては通常の場合においても、慣用句の場合においても「-тай」により構成されており、修飾されている表現を日本語に対応させてみれば、「ある」ではなく「している」に変わり、モンゴル語において形容詞修飾の場合は「所有物の存在」の意味に近い。

要するに、身体部位を含む慣用句においては、日本語の「ある」は身体部位を対象とする場合は属性物として捉え、その属性物の長期的な保持性を示す。つまり、抽象物として捉える場合に限って本来備わっている所有物の一面の「存在」を意味していると考えられる。そのため、分離不可能所有物に対しては〈持つ〉が示す意図性が不必要であり、従って非意図性を持つ「ある」が有効的であることが分かる。

これに対して、モンゴル語の場合は「-тай」が身体部位を「属性」として捉える捉え方や、属性物を〈長期的に保持されるもの〉とする認識において「ある」の用法に類似し、身体部位を含む慣用句における特徴として伺われる。しかし、モンゴル語の「-тай」が広範囲に見られ、日本語の「ある」の所有の用法には制限があると言える。

このように、一般的に分析不可能と見なされる慣用句の統語上の構成要素は慣用句の意味成立に貢献できることを確定し、従って、慣用句の統語的な分析の可能性を期待したい。

第5章.

日本語とモンゴル語の「目」を含む慣用句の

意味的分析 ～意味が異なる表現を対象に～

5.1 はじめに

モンゴル語と日本語の慣用句において統語的構成において似ているものの、意味解釈が異なる表現も少なくない。筆者（2010：34）における「目」を含む慣用句の意味対応の分析結果を参照とすると、統語的あるいは意味的に類似しないものが半数を示すぐらいの割合であることが分かる（表 20 参照）。

表 20

	意味対応	日本語		モンゴル語		総計	
		数	比率	数	比率	数	率
(1)	同じ意味を表す類似表現	86	51%	70	54%	156	52%
(2)	違う意味を表す類似表現	12	6%	12	9%	24	7%
(3)	同じ意味を表す相違表現	22	13%	10	8%	32	11%
(4)	両言語に独特な慣用句	52	30%	38	29%	90	30%
	合計	172		130		302	100%

出典：S.Oyunzul（2010：34）を参照

表 20 で取り扱っている用例には、

- (1) 「目に留まる- нүдэнд тусах」のような類似表現は半数を示している。
- (2) 「目を落とす- нүд унагаах（逐語：目を落とす、意味：目を引く）」のように両言語共に同じ部位・同じ構成要素でありながら意味が異なる場合
- (3) 「目が回る- толгой эргэм（逐語：頭が回る）」のように忙しいという意味が類似するものの、使用される部位が異なる場合
- (4) 日本語の「目から鱗」、「目のお正月」、モンゴル語の нүд хужирлах（逐語：目に塩与える、意味：目の保養）、нүд бэлчээх（逐語：目を放牧させる、意味：目を転ずる）

このように、文化的背景を反映しているように思われる独特な表現も少なくないことが見える。

構造的に似ている言語間においても慣用句の意味や構造の異なりが生じる一つの要因

としては、異なる文化的背景による捉え方の違いが言語に反映されているからかと考えられる。慣用句は口語であり、当該民族の日常生活の中で生まれ、長年受け継がれてきたため、文化の影響が強い表現である。

言語学だけでなく、文化人類学においても身体語彙を対象にする分析が行われている。特に、身体語彙に着目した慣用句の意味成立に関する分析が増えており、その動機づけが生理的・比喩的な観点から論じられている。しかし、それらは身体的経験に基づく意味拡張に集中しており、人間の認識に関する特定の文化との関連性を記述しているものは少ない。従って、慣用句の解釈を得るには、当該国民における慣用句が作られた環境や文化を明示することが重要であると考えられる。

本章において、日本語とモンゴル語の「目」を含む慣用句を中心に慣用句の意味成立を分析し、それに基づき文化的な観点から慣用句の意味に影響する背景を明らかにし、記述することを目的とする。両言語を対照することによって、当該国民ならではの独特な文化的要素が浮き彫りになり、慣用句研究だけでなく、文化的な比較考察の一部として役に立つことを期待する。

言語と文化の関係性は指摘されるものの、それを判明する具体的な研究やそれによる記述がいまだに少ない。

Cowie (2009) によると「語が文化の不可欠の一部を形成していることは疑問の余地がないように思われる。しかし、文化データが語彙の意味に組み込まれているかどうか、どのように組み込まれているかは依然としてはっきりしない。それは、主として、語彙単位が文化データを取り組む際の方法と程度が様々であることが起因する」と指摘している。

そして、文化が言語に浸透する5つ²¹の経路を提示している。これらの経路の中では、文化的意味素には「物質的な実在物」と「社会的・歴史的な実在物」を提示する語や語連結が関係している。一方、文化的背景による情報は意味論と繋がっているが、その繋がり方は非常に間接的なものでいまだ詳細に議論されていない。しかし、語や語連結が、歴史的状況・政治運動などを連想させるイデオロギイ的な雰囲気を持ち、それがはっきりと分かるような場合に、当該の語や語連結が文化的背景を持つと言うのが普通であると述べている (Cowie 2009:72pp)。

従って、本研究では言語と文化の関連性を把握できる可能性が認識され、Cowie (2009) が提案している文化的意味素や文化的背景などの項目に沿い、慣用句に染み込まれた文化的な要素を記述し、慣用句成立の背景と成り得ることを明らかにしていく。

異なる文化的背景と共に、両言語ともに身体部位語彙を含む慣用句を対象とするため、人間共通に得られる情報もあり得る。そのような点に関して、有菌 (2006 : 139) では「身

²¹ 文化的意味素(cultural seme)・文化的概念(cultural concept)・文化的暗示の意味(cultural connotation)・文化的背景(cultural background)・談話的ステレオタイプ(discourse stereotype) A.P.Cowie (2009:72)

身体部位は人間が何らかの行為を行う道具となり、人間の行為や状態を表す際に頻繁に用いられる。このような資料を用いて分析する目的は、身体部位詞の意味はある程度共通した基盤をもって拡張しており、身体部位詞を含む慣用表現はその意味解釈において比較的一貫したデータを与えてくるからである」と述べている。両言語の「目」を含む慣用句においては特に感情表現が多いことが共通しており、分析対象として有益であるが、当該国民の認識に関する文化的背景については記述が稀なようである。

まず、慣用句の意味に関する研究について述べておきたい。

慣用句の研究、その中で身体語彙慣用句の意味に対して、研究者らが主張する「身体経験による動機付け」は各国において類似することであろうが、一方、当該国民の文化が背景化されるものも多いと思われる。

先行研究として、近年の慣用句の意味分析やその概念を一貫して見ると、認知言語学の基礎において慣用句の分析可能性や動機付けに対する研究が進んでいる。特に、統語・意味的に固定されているという慣用句の構成要素の分解可能性が主張されることにより慣用句に対する多面的分析の可能性を促すこととなっている。

山梨（1995：163）によると、「Nunberg（1978）の〈分解可能なイディオム（Idiomatic combination）〉は、構成要素の意味がイディオムの意味に比較的結びつきやすいものであるという議論に対して、イディオムには部分的に規則的なパターンが認められる」と示唆している。例えば、一部のイディオム、spill the beans（意味：秘密を漏らす）のような表現には構成要素の文字通りの意味とそれに対応する比喩的な意味に基づいて、構成的に予測することが可能であると指摘している。

さらに、慣用句の意味的なプロセスや比喩的意味におけるメタファーやメトニミーを確定し、認知的な観点から議論している研究も増えている。日本語の慣用句を対象としたものには、山梨（1995）、初山（1997）、有菌（2009）、外国との比較分析を行った研究では橋本（2000）等があり、慣用的意味はメタファーやメトニミーなどの認知プロセスを経て成立することが明示されている。

その際、身体語彙慣用句の意味の動機づけに対して、人間の生理的状況や身体的経験が基盤となることが主張されている。初山（1989）は「身体の日常経験により動機付けられている」と論じ、また伊藤（1999）も「身体部位の典型的行為・機能は慣用表現の意味成立に重要な役割を果たす」と指摘している。

「目」を含む慣用句の意味成立に関するこれまでの研究では生理的基盤においても、社会的要因においても成立する意味はメタファーやメトニミーによる認知的プロセスとして解説されているが、そこから意味の捉え方やそれに影響を及ぼすと考えられる当該国民の文化・社会的背景をはっきりと見ることはできない。

日本語とモンゴル語の対照研究は少ないが、橋本（2000）では、両言語の身体語彙慣用

句の意味成立プロセスに関して、「概念メタファー」に動機付けられていると指摘している。それを参考としながら、本研究において対象慣用句の意味成立の動機づけを考察していく。

以下、「目」を含む慣用句の意味成立の分析を行い、文化的な背景から意味成立の動機づけを検討することを試みる。各節における分析は以下の通りである。

5.2 では、両言語の「目」を含む慣用句の意味分類を行い、独特な構成要素や意味の慣用句を選択する。5.3 では、両言語の「目」を含む慣用句における独特な表現や同一構成要素を持つ慣用句の意味的違いを解説していき、文化的な背景を考察する。5.4 では、両言語の「目」を含む慣用句における感情・心情表現の意味成立を分析し、対照考察を行う。5.5 本章の分析や考察をまとめる。

5.2 両言語の「目」を含む慣用句の意味的分類

本節では、日本語とモンゴル語の「目」を含む慣用句の意味成立の動機づけやその背景に着目しながら、対象慣用句の意味分類を行い、文化的な背景を観点に考察することとする。「目」を含む慣用句の意味分類に関して、辞書や研究者による解説を参照にすると、大きくは三つにまとめられる。

1. 視覚器官の働き (目の動き、様子、機能)
2. 視覚器官を通す能力 (目の働き、注意、鑑識力、注目、洞察力、判断力)
3. 視覚に直接関わらない体験

上記、1. の意味は「目」部位の基本動作であり、2. と 3. は目を通す能力・注目などが表される慣用句の意味を対象にした意味を示していると思われる。従って、本研究では対象慣用句において「視覚機能」、「視覚機以外」の意味の二種に分類する。

表 21 両言語の「目」を含む慣用句の意味

	意味対応	日本語		モンゴル語		総計	
		数	比率	数	比率	数	率
(1)	視覚	28	16%	17	13%	45	14.5%
(2)	視覚以外	148	84%	113	87%	261	85.5%
	合計	176		130		306	100%

(1) 視覚感覚の意味に「目」の視覚器官としての基本的な機能に関する視力、視線、視覚の働きなどを表す慣用句を含める。(日：28句/モ：17句)。

(2) 視覚感覚以外のことを表す意味が大多数を占めていることが注目される。日本語の84% (148句)、モンゴル語の87% (115句) がこのような意味に含まれる。これらをさ

らに上位分類 7 種に分類する。

	意味	日本語	モンゴル語
(1)	感情	57 句	47 句
(2)	能力	30 句	15 句
(3)	注目	19 句	8 句
(4)	行動	9 句	9 句
(5)	評価	6 句	10 句
(6)	身体行動	5 句	6 句
(7)	その他	26 句	15 句

(人生：6 句/4 句、空間：4/6、非言語伝達 5/3、年齢 3/1、
道具 3/0、程度：3/0、性格：2/1)

両言語共に人間の感情を表す意味が圧倒的に多く存在しており、その次に人間の能力、行動、注目などを表す意味であることが観察され、両言語それぞれの割合に差は少ないようである。

感情表現に関しては後述する (5.5) が、感情以外の意味では日本語は能力 (鑑識、認知)、関心、経験を示す表現が多いことが見える。(7) の「その他」の意味において、日本語における〈道具〉を表す意味や、モンゴル語においては〈程度〉、〈迷信〉を表す意味が独特に現れる。

そして、目のどのような様子が描かれているか、その動作を大きく二つに分け、それらに当たる表現を対照分析する。

表 22 目の様子による構成

「目」	要素	日本語	モンゴル語
変化	型	目を側める、目を丸くする、目を三角にする、目を皿にする、目が飛び出る、目に角を立てる、目が回る、目を細くする、目が吊り上る、目を落とす、目を伏せる、目から鼻へ抜ける	нүдний булангаар харах, нүдээ бүлтийлгэх, нүдээ гурвалжлуулах, нүд нь бүлтрэх, нүд ирмэх, нүд эрээлжлэх, нүд дүүрэн, нүдээ анийлгах, нүд урвуулах, нүдээ цавчлах, нүд нь бүлтийх, нүд нь орой дээрээ гарах
	色	目の色を変える、目の黒いうち、目を白黒させる	нүд нь улаанаар эргэлдэх, нүдний хар шүдний цагаан дээрээ, нүдний цагаанаар үзэх, нүдээ хар цагаанаар эргэлдүүлэх, нүд

			хөхрөх、 нүдээ улайлгах
	様子・ 状態	目がある、目が輝く、目が高い、 目がない、目が眩む、目が霞む、 目が暮れる、目が冴える、目が据 わる、目が速い、目が光る、目の 薬、目の保養、目を潤ませる、目 を輝かす、目を凝らす、目を覚ま す、目をつぶる、目を眠る、目を 見張る、目を剥く、目を開く、目 を光らす、目に余る、目に浮かぶ、 目に映る、目に染みる、目に入れて も痛くない、目に障る、目に入る、 目に触れる、目も及ばず	нүдтэй、 нүд нь гялалзах、 нүд эрээлжлэх、 нүд харанхуйлах、 нүд онгойх 、 нүд сэргэх 、 нүдээ гялалзуулах、 нүд алдрах 、 нүд гялбах、 нүд нь гэрэлтэх、 нүд хорсох、 нүдэнд орсон хог、 нүд нь цийлэгнэх、 нүд онгойх、 нүдэнд тодрох、 нүдэнд тусах、 нүд нь гөлийх、 нүдээ нээх、 нүд аних、 нүдээ аних、 нүдэнд торох、 нүдэнд өртөх、 нүдгүй、 нүд нь ширгэх、 нүдтэй、 нүд тайлах、 нүдээ чилээх、 нүд аних
	移動 周辺・ 内外	目が散る、目が舞う、目を極む、 目を通す、目を逸らす、目を背け る、目を離す、目を回す、目を配 る、目を晦ます、目を掠める、目 を落とす、 目を忍ぶ、目を奪う、目を覆う 目が届く、目が留まる、目が離せ ない、目を掛ける、目を引く、目 を向ける、目も当てられない、目 に留める、目を留める、目に付く	нүд нь гүйлгэнэх 、 нүдээ эргэлдүүлэх、 нүд талбих、 нүд гүйлгэх、 нүд буруулах、 нүд дальдчих、 нүд салгахгүй、 нүд буруулах、 нүд тусах、 нүд тавих、 нүд салгах、 нүд унагах、 нүд тусгах、 нүд нь тогтох、 нүд булаах、 нүдээ таглах

上記において、目の「変化」や「移動」という動作により慣用的意味が成立していく語彙的構成を示した。つまり、慣用句における身体部位は身体部位本来の様子と基本機能を生かしながら、慣用句の意味へ転換していくと見られる語彙的要素を示した。

そして両言語間において語彙的要素が同じ割に表す意味も類似されるかという推定の元、身体的経験が慣用句の意味成立の動機づけになる様子やそれによる類似表現が得られるか見ていく。

目の型・色の変化

構成や意味が類似する表現：

目を側める－нүдний булангаар харах, 目を丸くする、目を皿にする、目が飛び出る－нүд нь бүлтрэх、нүд нь бүлтийх、нүдээ бүлтийлгэх、目に角を立てる、目を三角にする－нүдээ гурвалжлуулах、目が吊り上る－нүд нь орой дээрээ гарах、目を白黒させる－нүдээ хар цагаанаар эргэлдүүлэх

類似の構成表現の意味の違い：

目を細くする（可愛がる）－нүдээ анийлгах（考え事をする様子）、目の黒いうち（若いうち）－нүдний хар шүдний цагаан дээрээ（若いうち）

類似の意味表現の構成の違い：

目の色を変える－нүд нь улаанаар эргэлдэх（逐語：目を赤くする）、目が吊り上る－нүд нь орой дээрээ гарах

独特な表現：

目が回る、目を落とす、目を伏せる、目から鼻へ抜ける、目にする、нүд хөхрөх、нүд ирмэх、нүд эрээлжлэх、нүдний цагаанаар үзэх、нүдээ цавчлах

目の様子の変化

構成や意味が類似する表現：

目がある－нүдтэй、目が輝く－нүд нь гялалзах、нүд эрээлжлэх、目が暮れる、目が霞む、目が眩む－нүд харанхуйлах、目が冴える－нүд сэргэх、目を輝かす－нүдээ гялалзуулах、目を光らす－нүд нь гялалзах、目が光る－нүд нь гэрэлтэх、目を潤ませる－нүд нь цийлэгнэх、目に映る、目に入る－нүдэнд тусах、目が据わる－нүд нь гөлийх、目を開く－нүдээ нээх、目を凝らす－нүдээ чилээх、目を眠る、目をつぶる－нүд аних、目に映る－нүдэнд тусах、目に入る－нүдэнд торох

類似の構成表現の意味の違い：

目がない－нүдгүй（判断力ない）

類似の意味表現の構成の違い：

目を覚ます、目が開く－нүд тайлах、нүд онгойх、目に浮かぶ－нүдэнд тодрох、目が速い－нүд хурц、目に余る－нүд алдрах

独特な表現：

目が高い、目も及ばず、目に入れても痛くない、目を剥く、目の薬、目の保養、目に染みる、目に障る、目に触れる、目から鼻へ抜ける、目から鱗が落ちる、нүд онгойх、нүд хорсох、нүдэнд орсон хог、нүдэнд өртөх、нүд нь ширгэх

目の移動

構成や意味が類似する表現：

目がある－нүдтэй、目が散る－нүд нь гүйлгэнэх、目を極む－нүд талбих、目を通す－нүд гүйлгэх、目を背ける－нүд буруулах、目を逸らす－нүд дальдчих、目を回す－нүдээ эргэлдүүлэх、目を離す－нүд салгах、目を配る－нүд тавих、目が留まる－нүд тусах、нүд нь тогтох、目を引く、目を奪う－нүд булаах、

類似構成の意味の違い：

目が舞う、目を落とす－нүд унагах、目を覆う－нүдээ таглах、目を留める－нүд тусгах、目が離せない－ нүд салгахгүй

類似の意味表現の構成の違い：

目も当てられない－өрөөсөн нүдээрээ ч харахгүй（逐語：片目でも見ない）

独特な表現：

目を晦ます、目を掠める、目を掛ける、目を忍ぶ、目が届く、目を向ける、目に留める、目に付く

表 21 でも分類している通り、「目の変化・移動」動作から転換した慣用的意味の殆ど人間の感情に関する表現であり、類似する意味が多いが、そうでない表現も少なくない。

表 22 の通のように、両言語において「目」の変化を生かす表現の殆どが語彙・意味的に類似しており、その動機づけとして人間共通の生理的経験が含まれる。つまり、初山（1989）、伊藤（1999）らが主張している「身体語彙慣用句は人間の生理的状況や身体的経験が基盤となり、それにより動機付けられている」ということが検証される語彙的構成である。

その中で、「目がない－нүдгүй（意味：判断力ない）」の構成は同じであるが、意味が違い、両言語国民の捉え方が異なることを指す表現も少なくなく現れ、その捉え方の違いを生む背景が注目される。慣用句の研究において慣用句構成の語彙的分析により意味を推定できるという議論やそれに従う意味成立のプロセスを確定する研究はなされているが、そのプロセスの背景に触れることはないようである。

従って、両言語の慣用句を見ると、目の変化・移動などが意味成立の基盤に成り得ることが共通に見えるが、独特な表現における詳細な意味やその背景を明示しない限り、意味の捉え方の違いや特徴は見えてこないと思う上、文化的な背景との関連性に対する分析の必要性が感じられる。上記において、目という部位の基本動作・様子に関連されるような表現を見てきたが、そこから十分な解釈が得られるとは限らないようである。

そして、「目」の基本動作・機能から離れた意味を表す独特な表現を対象に意味成立に影響する背景に注意していきたい。具体的に、目の動きや視線の様子などが直接反映され

ないと思われる用例を示すと下記の通りである。

日本語： 目が解ける、目を盗む、目を抜く、目をやる、目と鼻の先、目が合う、目の正月、目がある、目が曇る、目が晴れる、目は空、目がつく、目を注ぐ、目は点に
る等；

モンゴル語： нүдээ цавчлах、нүдэнд дулаан、нүдэнд хүйтэн、нүдээ ухуулах、нүд хариулах、нүд
хуурах、нүд бэлчээх、нүдээ өгөх、нүдээ олох、нүднээс далд болгох、нүдэндээ галтай、
нүдний хор гаргах、нүд хужирлах、нүдний хор орох、нүд хальтирах、нүднээс гарах、
нүдний зугаа 等；

などがある。

相手言語に存在しておられず、当該言語独特に現れる慣用句を対象に分析を進める（表
23）。独特な表現の意味分類を行うことによって構成や意味が異なる表現を取りしていく。

表 23 両言語独特な表現の構成

	表現	モンゴル語逐語	意味説明
形	目が回る		忙しい
	目を細くする		可愛がる
	нүдээ анийлгах	目を細める	注意してみる
	нүд дүүрэн	目に満ちた	暖かい感じの
色	目の色を変える		怒る
	目の黒いうち		生きているうちに
	目を白黒させる		驚き
	нүд нь улаанаар эргэлдэх	目を赤くする	怒る
	нүдний хар шүдний цагаан дээрээ	目が黒く、歯が白いうち に	若いうちに
	нүдний цагаанаар үзэх	目の白身で見ると	無視する、罵る
	нүдээ хөхөртөл	目が青くなるほど	首を長くする
	目が高い		鑑識力
	目から火が出る		恥ずかしくなる
	目から鼻へ抜ける		優れた能力
	目から鱗が落ちる		新たな認識
	目に入る		目につく、見える
	目に入れても痛くない		可愛らしい
	目がない		好む

そ の 他	目が速い		素早く見とれる
	目は空		
	目の上の瘤		(上の者に対する) 嫌がれる
	目の薬		喜び・興奮
	目の正月		喜び・興奮
	目の敵		見るたびに憎く思う相手
	目の毒		欲張る
	目の保養		喜び・興奮
	目を落とす		謙遜、緊張
	目を注ぐ		注意する
	目をやる		見る
	目に染みる		注目する
	目に焼きつく		深く記憶される
	目もくれない		無視する、嫌がる
	нүд алдах	目を失う	見渡しが失われる
	нүд бэлчээх	目を放牧させる	見渡す
	нүд гүйцэхгүй	見渡せない	視力足りない
	нүд хорсох	目がうずく	憎む
	нүд хужирлах	目に塩与える	喜ぶ
	нүд хурц	目が鋭い	「目が速い」
	нүд унагах	目を落とす	好む、興味深く見る
	нүд нь хараах	目が呪う	欲しがる視線
	нүд нь цадахгүй	目が満たない	満腹感がない様子
	нүдний гал буурах	目の火が消える	目が衰える (苦勞、年寄)
	нүдний гэм	目の災い	非常に稀
	нүдний зугаа	目の遊び	「目の正月」
	нүдний хор гаргах	目の毒を出す	一時眠る
	нүдний хор орох	目の毒が入る	他人の目を奪う
	нүдийг нь дүйвүүлэх	皆の目を迷わせる	皆の目をごまかす
	нүднээс гал бутрах	目から火が出る	1. 恥ずかしい 2. 打撃で痛い
	нүдэнд орсон хог	目に入ったくず	憎む
	нүдэнд тодрох	目に明らかになる	「目に浮かぶ」
нүдэндээ галтай	目に火がある	目に輝きがある	

нүдээ олох	目を拾う	評価の高い
нүдээ өгөх	目をやる	「目がない」
нүдээрээ инээх	目で笑う	誤魔化し笑い
нүд ухах шахах	目を掘るほど	叱る
нүдээ ухуулах	目を掘らせる	叱らせる
нүднээс гарах	目から出る	疲れはてている様子
нүдэнд дулаан	目に暖かい	良い顔の
нүдэнд хүйтэн	目に冷たい	悪い顔の

目の色・動作による表現であっても、意味が異なる場合もあることを示す。例えば、日本語の「目から鱗が落ちる」、「目に染みる」、「目に浮かぶ」、「目が出る」、「目の薬」、「目の正月」、「目の保養」などの表現、モンゴル語の **нүд дүүрэн**（逐語：目に満ちている）、**нүдэндээ галтай**（逐語：目に火がある）、**нүдэнд дулаан**（逐語：目に暖かい）、**нүд нь хараах**（逐語：目が呪う）などの表現は説明ないと解釈しにくい表現と言える。

そして、両言語における独特な表現は「表 23」の通りであるが、以下ではいくつかの独特な用例を中心に分析していく（詳しい用例や分析は 5.3、5.4、5.5 参照）。

5.3 両言語の独特な表現の意味

表 22 で分類した「目の変化・移動」動作から転換した慣用的意味の殆どは人間の感情に関する表現であり、類似する意味が多いが、類似しない表現も少なくない。例えば、日本語の「目を細める」は可愛がってみる、愛する意味であるが、これと同じようなモンゴル語の「**нүдээ анийлгах**（逐語：目を細める）」に可愛がるという意味は含まれず、むしろ注意して見ることか、考え事するときの様子を示す。

このように、目という部位の基本動作・様子に関連される構成は同じであるが、そこから同じ十分の解釈が得られるとは限らない。

表 23 において両言語独特な表現を対象に構成や意味を分類した。その殆どが「目」の基本動作から離れた語彙構成であり、その意味成立の背景に注意し、異なる要因を探りたい。例えば、「目が解ける、目を盗む、目を抜く、目をやる、目の正月、目がある、目が曇る、目が晴れる、目は空、目がつく、目を注ぐ、目は点になる」等；「**нүдэнд дулаан**、**нүдэнд хүйтэн**、**нүдээ ухуулах**、**нүд хариулах**、**нүд бэлчээх**、**нүдээ өгөх**、**нүдээ олох**、**нүднээс далд болгох**、**нүдэндээ галтай**、**нүдний хор гаргах**、**нүд хужирлах**、**нүдний хор орох**、**нүд хальгирах**、**нүднээс гарах**、**нүдний зугаа**」等である。

従って、上記の分析の基づき、両言語独特な表現に対する意味成立の背景をそれぞれに

異なる文化的背景を取り立てながら考察していく。さらに、同一構成要素の表現であるが、意味解釈が異なる表現も対象に対照考察を行うこととする。

考察は以下（5.3.1、5.3.2）の通りである。

5.3.1 独特な表現の意味成立における文化的背景

ここで両言語の表現の意味成立における文化的な背景を考察する。Cowie（2009）が言う言語と文化の関連性を示す文化的意味素という経路に含まれる「物質的な実在物」と「社会的・歴史的な実在物」を対象に慣用句の中に浸透している文化を読み取ることことを試みる。そして、〈伝統産業・自然現象〉、〈習慣・礼儀〉の項目を中心に分析していく。

以下、日本語の例を J と、モンゴル語の例を M と記し、慣用句の番号順をアラビア数字で、例文の順をローマ字のアルファベット順で示す。慣用句毎の意味説明を記述し、モンゴル語の場合逐訳を付す。

1. 伝統産業・自然現象

J1：「目から鱗が落ちる」 — あることをきっかけとして、急に物事の真相や本質が分かるようになる

構成要素の「鱗」は、生物、特に魚類の体表面を覆う固い小薄片である。それが剥がれる時に新しい体面が生まれ変わる現象を、今まで持ってきた見方が変わり、新ためて認識する行為に類似させたメトニミーによる表現である。

人の目から鱗が何か剥がれるわけがないため、日常生活から考えた類似性であると考えられる。このような表現は日本語独特であり、漁業という伝統的な産業における日常経験から生まれたと思われる。

モンゴル語においては「**нүд нээгдэх**（逐語：目が開かれる）」、「**нүд тайлах**（逐語：目を解く）」などのように表し、新たな視線、新たな目付きという認識による転換であるが、目の機能を活かした表現となる。

J2：「目に浮かぶ」 — 眼前にない物事があたかも存在するかのよう頭に描き出される

構成要素の〈浮かぶ〉は、水面・水中・空中などにおいて沈まず均衡を保っている様子、を言う。関連される用例として、海に浮かぶ城、海に浮かぶ街、海に浮かぶ船、海に浮かぶ風景、海浮かぶ月などを挙げたい。

海の波に映される物事が浮いているように見え、時によって消える時もある。その様子

を何かを想像する動作に類似させた表現であると思われる。つまり、想像する物は実態として見えないことを、浮かぶ風景に例えた用例となる。日本は海に囲まれた島国であり、海の風景が身近なものであることが表現が生まれる背景であると推定される。

海の国か、日本人が考え出す表現であるだろう。例えば、海のないモンゴルの場合は、**нүднээ тодрох**（逐語：目に明らむ）、**нүдний өмнүүр хөврөх**（逐語：目の前を浮く）のように表現するが、草原の眺めによる類似であると考えられる。〈**хөврөх**（浮く）〉は、草原の蒸により〈**зэрэглээ хөврөх**（逐語：かげろうが立つ）〉のように使われ、かげろうにより物事が浮いているように見えることがあり、言語への反映となったと思われる。

J3: 「目が出る」 — 幸運が回ってくる、幸運や成長のチャンスがめぐってくる

この慣用句の説明において「さいころの都合の良い目の意から」という説もあるが、サイコロの伝統は奈良時代に中国から伝わってきた文化であり、慣用句発生がずっと前であると予想され、納得しにくい。サイコロの点を”目”と言い、それが望み通りに当たることを、幸運が回ってくることに類似させての説明であるだろうが、そのような認識は派生的であると考えられる。

また別の説明もあるが、漢字が類似する「芽が出る」という表現の意味説明には、①早木の芽が萌出る、②幸運や成長のチャンスがめぐってくる、目が出る、のように記述されている。農業や自然観察はずっと昔のことであり、「早木の芽」が出ることを楽しむ感情は慣用表現に反映されたと思われる。

「目が出る」ことから人の喜びが生まれる意味として、自然との触れ合いを楽しむ日本人にとって類似性が生まれやすいと考える。そのため、「芽」に類似され、自然や農業から生まれた表現であるかと推定しよう。

モンゴル語においてはこのような表現を慣用句で表す場合〈**хоншоортой**（逐語：鼻先がある）〉と言い、自然現象とは関係がない。日本語の「芽」に似ている言葉があるが、単独で使われず植物の名称に含まれるものがある。ただし、慣用句における用法がなく、早草の場合であると〈**өвсний толгой цухуйх**（逐語：草の頭が出る）〉と言う。

従って、これらは日本ならではの表現であろうと考える。

M1: 「нүд хужирлах (目に塩与える)」 — **шохоорхон харах, олон юм үзэж харах** (好奇心を持って見る、あれこれ見回る)

この表現は日本語の「目の保養」に類似する意味を持つ。

構成要素の〈塩与える〉において、塩は「草原に生えるものであり、家畜が食べたがる時に与えるもの (Я.Цэвэл,1966:724-725)」であり、家畜に保養として与える習慣がある。塩

は家畜が好むものであるが、目にはむしろ不快感を与えるものである。しかし、慣用句が生まれるプロセスにおいては、何かの類似点を持つのが一般的である。塩の使用においては、人は塩の使用により嬉しくなることはないだろうが、家畜には好物である。

家畜を喜ばせる行為を、人間の目で見えて楽しむ行為に類似させ、家畜を喜ばせることは人間の喜びと同様に大切にされるという認識が働いていると思われる。モンゴルは昔から牧畜業に頼ってきており、厳しい気候に応じさせるために家畜に気を配りながら、大切に育ててきた。日本で言えば「お米」のような貴重なものである。このように、家畜を大切に作る心が人間の心情として表現されるきっかけとなったと思われる。

日本語の類似される表現である「目の保養」は、<心身を休ませて健康を保ち活力を養う>という意味の言葉であり、目を癒すことが目で見ることの楽しみに繋がった発想であると考えられる。同様に、モンゴル語の場合も家畜が食べる保養は、人の目で見ることの楽しみに喩えられたものであろう。

M2: 「нүд бэлчээх (目を放牧させる)」 — юм юмыг сониучирхан харах
(あれこれを興味深く見渡す)

構成要素の бэлчээх は、牧畜業で使われる言葉であり、<мал бэлчээх (逐語：家畜を放牧させる)>と言って、家畜を放牧させる動作を示す。遊牧生活であり、家畜の牧場は決まったところではなく、広い範囲で放牧させるため、家畜は動き回りながら良い草を探して食べる様子を示し、<бэлчээх (放牧させる)>と言う。代表的な用例が<мал бэлчээх (家畜を放牧させる)>であり、家畜を草原に放置しながら遠くに渡り見張る動作である。

このような様子や動作が、あれこれに<視線を配る>の意味に類似された発生であると考えられる。

遊牧民は草原に出した家畜を扱うために、付いていくこともあり、遠くから見張るように扱うことが一般的である。そのような暮しぶりが背景され、目の見渡る動作を表すことに使われたと言えよう。例文：

M/a: Яндаг хотод орж ирэхдээ гудамж чөлөөгөөр сүлжих олон руу нүд бэлчээн
дотроо бол Цэвэлмаагийн бараа харагдаж юу магад хэмээн горьдож явлаа.
(С.Э "ХНУ")

(逐訳：ヤンダグは上京して大通りを渡る人々に目を配りながら、ツェベル
マーの姿が見えないかとこっそり期待していた。)

このように、視線が広く、遠くまで渡る動作を示し、見る動作でありながら「見張る」という認識を含む表現である。

M3: 「нүд ухах (目を掘る)」 — аашилж загнах

(ひどく叱る)

上記の表現の使役形も存在しており、〈нүдээ ухуулах (目を掘らせえる)〉が、「ихэд аашилж загнуулах (人にひどく叱られる)」意味を示す。

構成要素の〈ухах (掘る)〉は字義通りに、「土を掘る」「穴を開ける」などの動作が代表的であるが、それらは〈叱る〉ことに裏付けられる可能性は低いように思われる。

これらをモンゴルの自然現象に関連付けさせて解説したい。モンゴルでは昔は人が死んだ後、死体を盆地に入れず、火葬するか、草原に置いて放置する。そこで、草原に置いた瞬間に鴉が飛んできて、死体の目を刺して食べる。

その行為を「нүд ухах (逐語：目を掘る)」と言う。草原で鴉が多く、死んだ人だけでなく、死んでいる家畜や動物の目を刺して食べることがよく見られる風景である。死体がある所に鴉が集まるのがよくある。

そのような風景を示す諺もある。「Борооны түрүүнд шороо、Боохойн түрүүнд хэрээ (逐訳：雨の前に風、狼の先に鴉)」というように、自然現象のことを描きながら、望ましくないことが訪れることを認識し、草原で死んでいる動物や家畜を食べに来るのが鴉と狼という意味を示す。

そして、人にひどく叱られることは「鴉に目を刺される」行為と同様に悪い気分させる意味として発想されたことと思われる。

M4: 「нүд чичлэх (目を突く)」 — аашилж загнах, харааж загнах, гадуурхах

(ひどく叱る、罵る、除外)

構成要素の〈чичлэх (突く)〉は〈чичих (突く)〉という言葉の複数を示し、つまり突く回数が多い、何回も突く指す意味の言葉である。

〈чичих (突く)〉は、юмны үзүүрээр хатгах, шаах (物の先端で突く、刺す) という意味であり、代表的な連語は「хутгаар чичих (ナイフで刺す)」、「шороор чичих (棒で刺す)」であり、先が鋭い物で刺す意味である。

上記の慣用句に現れる〈чичлэх (突く)〉は何回も突くことであり、従って、慣用句において悪い言葉を繰り返し、ひどく叱ることを示す。

この言葉の元は、日常生活の経験から生まれた表現であると考えられる。遊牧生活にナイフか弓や棒などが日常的に使われ、つまり狩猟や肉食系の生活によく使われる道具である。

現在の便利な生活の中ではこのような経験が少ないため、生活の中の日常経験を示すためではなく、慣用的な意味で使うことが多い。例えば、人と喧嘩する時に「人を指で指す」

ことを「хуруугаараа чичлэх（指で刺す）」と言って、怒る時の様子を描く。ただし、このような姿勢が非常識と判断されるため、一般的には望まれない。

慣用句の「нүд чичлэх（目を突く）」は、説明通りにひどく怒る姿勢を言うが、除外するという意味も強い。上述（4.3）していた例文であるが、意味を考察するため、ここで参照とする。

M/b : Олны дотроос ганц эмэгтэйг нүд чичлэн үзсэн гэсгүйн авирыг харчуулын олонх нь зэмлэв. (Г.А, 1999: 92)

(逐訳：皆の中で、一人の女性を目を突いて見る坊主さんの態度を男ら殆どが批判した。)

M/c : Хул азарга чононд унагуулсны төлөө энэ хэдэн өдөр тэр хичнээн хүнд нүдээ чичлүүлж байна вэ? (Г.А, 1999: 95)

(逐訳：栗毛の馬が狼に食われたせいで、この数日は何人かに目を突かれていますのだろう。)

M/c の通りに「нүд чичлэх（目を突く）」には使役形も存在しており、他人から叱られることを表し、慣用句として使われる。M/b の場合は<除外する>意味が強いが、M/c の場合であると<ひどく叱られる>意味のほうが認識される。

異なる環境を持つ日本とモンゴルの伝統産業や自然現象が背景に生み出される表現が存在していると示したい。これ以外にも「目の正月、目に染みる、目が曇る、目が晴れる」、「нүд гүйцэхгүй, нүд алдрах」などの慣用句もこの種に入るように思われるが、今後の考察にしておきたい。

2. 習慣・礼儀 :

J5: 「目を落とす」 — 視線を下の方へ移す

「目を落とす」は視線の移動を示す表現であるが、その背景には謙遜や謝るという意図性がある行為であると認識される。つまり、相手の目を直視できない理由があつての表現であると推定される。

解説すると、日本社会において上下を見分ける人間関係が根付いている。それにより、謙遜・尊敬のように言語の使い分けがある。そのような礼儀から生まれた表現が多く、その背景が慣用句に反映されたと考えられる。

賀川（1997：18－21）は「日本人は相手を強く見つめることは、何か失礼な、相手を威嚇する挑戦的な行為であると考えよう。そのヒントとして、日本社会は130年前に世界に向けて扉を開くまで、侍などの身分制度の時代があり、身分の高い人の目を見ることは大変失礼な作法とされ、時には死に値することもあったのです。そのような日本人に

与えた心理的な影響は今でも残っているのです。」と記述している。

「目を落とす」行為は相手を敬う気持ちを表し、相手から目をうつむくことは身分を下位に見せる概念を元に派生されたと思われる。

モンゴルを含め各国において年上か上位を敬う礼儀はあるが、慣用句に反映されるまでもない。それは現在社会において尊敬語や謙譲語が使用されていないことから伺われ、そのような礼儀は日本より緩いと思われる。

モンゴル語にこれと同じような構成要素の慣用句「**нүд унагах**（逐語：目を落とす）」が存在しているが、意味は「好奇心で見る」ことであり、まったく異なる意味を示すため、両言語の語彙構成からは解釈が得られない表現となる。

**M5: 「нүдэндээ галтай（目に火がある）」 — сэргэлэн золбоолог, хийморьтой
（元気よく、幸運な）**

目から読み取れる人の性格と様子を表す表現である。

構成要素に「火」を使うことによって、目が輝くことを表しており、火は光の意味で使われている。遊牧民は伝統的なゲル住宅に住んできており、ゲルには竈が付き物である。そして火は遊牧民にとって、料理を作ることや厳しい冬を乗り越えるには欠かせないものとして使われてきた。

従って、火を大事にしたりして火を良い意味で捉える認識が強い。良い家を築くには竈を清潔に保つことであり、悪いことが起こると「**голомт бузартах**（逐語：竈が汚れる）」と言って、火を焚く竈に供えを上げたりして厄払いをする習慣がある。そのような儀礼がシャーマニズムから受け継がれており、近代になって仏教の儀礼として行われるようになり、各家庭で厄払いの行事として行われることもある。

火に対する良い認識が人の外見・心情に対して反映され、つまり目の輝きが火に喩えられている表現となる。元気よく、光輝く人のことを言う代表的な用例は「**нүдэндээ галтай、нүүрэндээ цогтой**（逐語：目に火があり、顔に燃えさしがある）」と言い、目と顔のどちらにも「火」の認識が使われている。

このような表現の反対の構成と思われる「**нүдний гал буурах**（逐語：目の火が消える）」もあり、年寄りに対してよく使うが、基本的に元気のない様子を言う意味で使う表現である。

慣用句における「火」は「元気や輝き」を示すようであり、慣用句の意味は伝統的習慣や生活が背景に生まれたことが伺われる。

5.3.2 両言語の同一構成表現の意味的分析

両言語間に慣用句の意味における違いが「独特な表現」と「同一構成の表現」においてよく現れ、その意味成立の違いを生む背景を明白にすることは、慣用句だけでなく、文化的・認知的な特徴を見出す一部の記述になると期待する。

従って、同一構成要素の意味違いを分析し、考察していく。ここで使用する記号は(5.3.1)と同様である。

1. 目に入れる—目に入る：

J6: 「目に入れても痛くない」— 可愛がる

M6: 「нүдэнд орсон хог (目に入ったくず)」— 憎む

両言語に使われている構成語彙「入る、入れる」により、目に何かが入るという字義通りの意味においては同じであるが、慣用句の意味が反対である。日本語における<痛くない>という否定形が違いを生み出している。J6,M6において、日本語は<愛>を表しているが、モンゴル語は<憎み>を表す。

両言語共に「目」は真っ先に世界を見る意味では一番大事な部位であり、肉体部位として敏感に感じるものが共通な認識であり、それは慣用句の意味に転換されたと思われる。

日本語の場合、述語が否定形ではあるが、愛を表す程度は「目に入れる」動作により実現されている。目の痛み・不快感よりも優先的に愛する・可愛がるという心情程度を表し、「目に入れる」具体的な動作を抽象的に捉え、プラス行為に転じさせている。例文：

J/a: 初孫は目に入れても痛くないと言いますね。 (小笠原、1992: 19)

このように初孫なら誰よりも愛するという意味を示す。モンゴルも初孫を息子や娘よりも愛するという認識はあるが、慣用句には表現されていない。しかし、нүдний цөцгий мэтは<目の腫のように愛する>という表現もあり、大事にする意味を示すが、慣用句ではない。

「нүдэндээ хийе гэсэн ч алга (逐語：目に入れようとしてもない)」のような表現があり、非常に稀で、手の付かない物に対して使う場合もあるが、愛するという意味は含めていない。

モンゴル語の場合、目にほこりなどの物質が入る時の痛みや不快感などを与える経験は、嫌いな人に対する憎み・不快感などの心情に転換された認識であり、目の具体的経験に基づき、つまり具象化による慣用句的意味を成す。目の不快感に加えて「くず」という言葉を構成要素に取ることによって、憎みの程度を強める構成となっている。

さらに、нүдэнд орсон хог, шүдэнд орсон мах (逐語：目に入ったくず、歯間に入った肉)と言い、身体の不快感を広げた表現もある。モンゴル語において、「目に入る」意味はマイナスの意味が一般的であり、これと同じような用例も他にある。例えば、нүдэнд орсон өргөс

(逐語：目に入ったとげ) とあり、憎みを意味する。

このように、日本語において「目」は抽象化され、モンゴル語の場合は「目」の具象化に基づき慣用句の意味に転換しており、認知的な違いにより表現の違いが生じていると示したい。

2. 毒 — 毒が入る.:

J7: 「目の毒」 — 見ると欲しくなるもの。また、見ると精神に良くないもの

M7: 「**нүдний хор орох (目の毒が入る)**」 — олны шунан шохоорхох

(皆の欲しいという視線)

ここで使われる「毒」の意味は、①生命または健康を害するものや薬物、②人の心を傷つける悪いもの、③災いであり、両言語共に目の性質とは関係ない意味を示す言葉であり、実物か何かの悪い現象・行為に対する意味に関連付けられる。

両言語において②の意味で使われ、目の基本的な機能を通じるが、見すぎるのが精神に良くないという意味を<毒>が表し、基本的に共通する意味である。つまり、「見る」動作は心情を動かす動機付けになるわけである。

しかし、慣用句の意味説明からは分かりにくいのが、使い方に対して両言語において意味ニュアンスの違いが生まれる。

例文を見てみよう。

J/b: そんな雑誌、子供には目の毒だから見せないでくださいよ。

(井上、2008 : 310)

J/c: どうせ買えない高級品ばかりだから、かえって目の毒ですよ。

(小笠原、1992 : 18)

日本語において<見ないほうが良い>という意味が強く、人の精神を損なう意味を示す。対象者(主語)を中心に捉え、その精神を表している。

モンゴル語においては、上記の①～③の説明に加え、さらに④<嫉妬して耐えられない気持ち>がある(Я.Ц,1966:693)。これは<嫉妬>を意味する。例文を見よう。

M/d: Дэжидмаа ганц охин учраас эрх танхивтар, аав ээж нь түүнийг харцуулын нүдний хор орохоос болгоомжлон, олны хөлтэй газар бараг явуулдаггүй байв.

(Г.А、1999 : 93)

(逐訳：デジドマーは甘えん坊の一人娘のため、親が彼女を男らの目の毒が入るのを防いで、公の場にあまり行かせない。)

モンゴル語においては主語ではなく第三者の目、つまり他人の目を気にし、ネガティブの意味で捉えるのが一般的である。

他人の欲張りの目が映ったものを使いたくないという認識があるが、その由来に関する

解説はまだ見当たらない。それにより、〈使うのを避けたほうが良い〉という注意が払われる。その認識の由来は宗教か信念によるものであろうかと推定されるが、ここで解説し切れないことであるため、今後の考察にしておきたい。

両言語において「目の毒」の意味は共通するものの、参加者に対する視点によって意味ニュアンスの違いが生じている。つまり、日本語は主語が中心であり、モンゴル語は主語以外の参加者を中心に、「毒」の意味程度が示される。

3. 「鋭い」—「鋭い」:

J8: 「目が鋭い」— 目つきが厳しく、人の心に突き刺されるような様子

M8: 「нүд хурц (目が鋭い)」— аливааг ялгах, олж харах нь хурдан
(物事を見分け、認識するのが速い)

日本語の「目が早い(関心や注意が素早く向く)」の意味に類似する。

モンゴル語において хурц (鋭い) は慣用句によく使われ、他の部位に対しても現れる。例えば、ухаан хурц (逐語: 知恵が鋭い) と言って賢い意味を、үг хэл хурц (逐語: 言葉口が鋭い) と言って〈口が上手い〉ことを示し、基本的に良い意味として捉える。「目」の機能、つまり視力に対する意味で хурц нүдтэй (鋭い目を持っている) とも言い、慣用句と違って、視覚部位の基本機能に対する意味を成す。「хурц (鋭い)」は人間を対象にする場合において良い意味で捉えられていることが分かる。нүд хурц (逐語: 目が鋭い) の場合も良い意味で捉えられ、判断力や認識力が優れていることを示す。例えば、「Бурууд нүд хурц (逐語: 悪事には目が鋭い)」という諺もあり、悪いことを見逃さないという意味である。この場合は日本語の〈目を光らせる〉の意味に近いが、その動作の様子というより動作の良い結果を示す。

このような意味から、ここで使われる「хурц (鋭い)」は、直視や直感の鋭さやその能力を示し、人の心情とは関係がない。一方、日本語の場合が目付きから読み取られる心情を表す。

ただ視線が鋭いその様子を示す時は「ширүүн харц (逐語: 鋭い視線)」と言って、日本語の「目が鋭い」の構成要素に近い構成であり、どのような目を持っているかという「目の様子」が示され、語彙そのままの意味であるため慣用句の意味を含めない。

日本語の場合、目の様子から伺われる心情を表している。例文:

J/d: 彼に言うのはまずいと思っていたが、何か感じたらしく目が鋭くなったので、とても誤魔化しきれなかった。(井上、2008: 181)

このように、「鋭い」の意味解釈により同様な構成要素でありながら、示す意味ニュアンスが異なることがある。

4. 肥える—肥える：

J9: 「目が肥える」— 良いものを見分ける力がつく

M9: 「нүд өөхлөх (目が肥える)」— зан авир бардам болж, хэр баргийн юмыг тоохоо болих (鼻が高くなり、大抵の物を無視するような態度になる)

日本語の場合、鑑識力を意味し、モンゴル語は悪い性格を言うマイナスの意味を示す。

日本語における「肥える」の意味は、①地味が豊かになる、②体の肉が増す、太る、③経験を積み、良いものを見る定める力がつく、豊かになる、である。この③は、慣用句における意味を示す。

モンゴル語には「өөхлөх (肥える)」は、өөх суух, гаргалах (脂肪がつく、太る)であり、この動詞は「өөх (脂肪)」という名詞から派生され、通常の意味において体の変化のみしか表せないようである。

日本語において「肥える」は上記説明の①の意味から派生されたと思われ、つまり「豊か」の意味を基盤に慣用句に転換しており、能力が増すというプラスの意味で捉えられる。田中 (2002b : 216) においても、日本語の「目が肥える」は、<土地や生物の体格が豊かになること>という意味から、物理的豊かさと能力的豊かさの類似性の基づくメタファーによって拡張されている、とその意味成立のプロセスを解説している。

一方、モンゴル語のほうの「өөхлөх (肥える)」の体に脂肪がつく意味を活かしたため、それをマイナスの意味で捉えている。太っている人に対する悪い印象がなく、むしろ快感の意味で捉える。しかし、どのように太っても目に脂肪がつくわけがないだろうが、むしろ<目に脂肪が付いたとしたら物が見えなくなる>という意味で捉え、転じて<見分ける力がなくなる>ことを表すようになったと推定される。

実際に視力の障害に当たる年を取るか病気により目の白身が曇って見える様子を нүдний үүл (逐語：目の雲) と言い、その様子の想像に「脂肪」が使用されて慣用句の意味を成していると思われる。このように、「脂肪」という言葉は目と一緒に使われることもなく、それを悪い現象として転じさせているため<見分けする力がない、正しい判断力ができない>という意味として捉えられ、マイナスの意味が示される。

それぞれの例文を示そう。

M/e: Нүүр талын өнгөнд нүд нь ялихгүй өөхөлж, намайгаа хаялаа гэж найзыгаа зэмлээд яах вэ. (Г.А,1999:90)

(逐訳：外見に目が少し肥えて、私を捨てたと友達に文句を言いたくないな。)

J/e: 展示会回りをしているうちに目が肥えてきた。

J/f: 奥さまはさすがに目が肥えていらっしゃるから着物の趣味がよろしいですね。

(小笠原、1992 : 19)

構成要素をどのような意味で捉えているか、それらの目との関連性により慣用句の意味が成立され、それによって両言語間の慣用句における解釈の違いが生じる。

上記の分析の結果をまとめると、日本語とモンゴル語の同一構成要素を持つ慣用句は、両国民や両言語において構成要素の言葉や概念をどのように捉えているかによって、慣用句で表す意味が成り立っていることが分かる。構成要素の概念だけでなく、主語の「目」をどのように捉えている（抽象化・具象化）か、誰を焦点に述べる傾向（主語・対象者）かによって意味解釈が左右されることも示しておきたい。

5.4 本節のまとめ

モンゴル語と日本語の慣用句において統語的構成において似ているものが多いが、それなりに意味解釈が一致するわけにはいかないようである。

基本構造が似ている言語間において慣用句の意味や構造の異なりが生じる一つの要因は異なる文化的背景による捉え方の違いが言語に反映されているからと考えられ、そのような観点から慣用句の意味を考察してきた。考察の結果を以下においてまとめる。

5.2において、両言語の「目」を含む慣用句の意味分類を行い、独特な表現に着目し構成や意味を分析した結果、両言語における「目」を含む慣用句を大きく二つに分け、それぞれの割合を示した（表 18 参照）。

(1) 視覚感覚の意味に「目」の視覚器官としての基本的な機能に関する視力、視線、視覚の働きなどを表す慣用句を含める。（日：28 句/モ：17 句）。

(2) 視覚感覚以外のことを表す意味は大多数を占めていることが注目される。日本語の 84%（148 句）、モンゴル語の 87%（113 句）がこのような意味に含まれる。

両言語共に感情を表す意味が圧倒的に多く、さらに能力、行動、注目などの意味が現れ、両言語間に大きな差が見られない。

表 23 において、「目」の基本動作や基本的な機能の意味に基づく表現について分類した。目の「変化」や「移動」という動作により慣用的意味が成立していく語彙的構成を示し、目の基本的な機能から慣用句の意味へ転換していく際、初山（1989）、伊藤（1999）らが指摘した通り「身体の日常経験により動機付けられている」という点に関連している。

この種の構成要素が身体部位慣用句の意味にどのくらい影響するかについて両言語の場合を比較したら、両言語共に「目」の変化や移動の意味として類似する慣用句が多いが、一方、意味がずれる場合も少なくないことが分かった。例えば、「目がない—нүдгүй（判断

力ない) 構成は同一であるが、意味は違う。

このような表現に注目しながら分析を進めてきた (5.3 や 5.4 参照)。

5.3 では、表 22 の用例を参照に、両言語の独特な表現を対象にその意味違いの要因を探り、文化的な観点から考察してきた。その考察をまとめる。

1. 伝統産業・自然現象 (J: 目から鱗が落ちる、目に浮かぶ、目が出る; M: нүд хужирлах (目に塩与える)、нүд бэлчээх (目を放牧させる)、нүд ухах (目を掘る)、нүд чичлэх (目を突く))

2. 習慣・礼儀: (J: 目を落とす; M: нүдэндээ галтай (目に火がある))

上記の通りに分析や考察をしてきたが、当該国民の伝統的な習慣や環境などが言語表現に影響することを示し、慣用句から文化的な要素が伺われる記述とする (5.3.1 参照)。

次に、両言語の同一構成の表現の意味の違いに着目し、その背景を明示させながら、相違点を示すことを試みた。分析対象とした用例は下記の通りであるが、詳しい解説は 5.3.2 を参照されたい。

1. J: 目に入れても痛くない — M: нүдэнд орсон хог (逐語: 目に入ったくず)

2. J: 目の毒 — M: нүдний хор орох (逐語: 目の毒が入る)

3. J: 目が鋭い — M: нүд хурц (逐語: 目が鋭い)

4. J: 目が肥える — M: нүд өөхлөх (逐語: 目が肥える)

本節の結果をまとめると、両言語共に「目」の基本動作や変化を示す語彙構成が多く、それらの殆どが感情・心情表現であることが分かった。このように、目の基本機能、つまり身体の日常的な経験や感覚に基づく意味転換が多く見られるが、動機づけが同じであるにしても意味が異なることも現れる。

従って、両言語間に慣用句の意味の違いが生じる要因の一つは異なる文化であることを示したく、対象慣用句において伝統産業や環境や習慣などによって独特な表現が作り出され、慣用句の意味成立に対して文化の影響が強いことを指摘したい。

構成要素の概念だけでなく、主語の「目」をどのように捉えている (抽象化・具象化) か、焦点対象者によって意味解釈が左右されることも示しておく。

5.5 感情表現の意味成立の対照分析

5.5.1 両言語の感情表現の意味的分類

顔から読み取られる感情について、工藤（2000：127）では、顔の表情の違いが分かる三つの領域を確定している。それは、①目の上の眉の周辺部分、②目の周りの部分、③口の周辺部分と指摘し、人の気持ちは目の周りの部分にもっとも現れることを強調している。その通りに、日本語において身体部位の中で「目」、「鼻」、「口」、が感情を表す代表的な部位である（楠見 1996：38-42）。これは多くの言語において共通されるだろう。

本研究においても、日本語とモンゴル語の「目」を含む慣用句においても感情表現の多さが認められる。それらの語彙構成から見ると、殆どが人間共通の身体部位の動作やその変化により、その意味が感情の意味に拡張しているようである。

感情は身体部位を通じて感覚し、表出されるものであり、身体と感情は密接な関連性を持つ。楠見（2007）では、感情表現が形成される表層として、1. 感覚・運動レベル（身体的な感覚）、2. スキーマレベル（身体と文化の両者の影響を受ける中間に位置する）、3. 概念レベル（比喩）に基づいていることを主張している。

身体語彙慣用句が示す感情表現についての研究では Lakoff and Johnson(1986)が提案した「概念メタファー」手法に基づき、近年では感情とそれを表出する言語間に認知的なプロセスが基盤であることが主張されるようになってきた。日本語の身体語彙慣用句に対して、松木（1995）、山梨（1995）、橋本（2000）、田中（2003）、ケキゼ・田中（2004）、有菌（2009）らでは身体部位を感情の容器として捉え、その意味成立のプロセスを議論している。

一方、身体の生理的な変化に動機付けられる感情状態に関して、伊藤（1999）では、慣用句の具象性と慣用的意味の関係を挙げる中、身体部位の変化は感情の変化であることを指摘している。例えば「目を丸くする」「目が飛び出る」のような、目が通常の状態から大きく変化するという「具象性」から〈驚く〉感情の変化を表す慣用句としての意味が生じていることを示している。その通り、身体部位の具体性を基盤に意味が成立している感情表現が多いように見えるが、両言語間において意味解釈が異なる場合もあり、注目を引く。

従って、本節において日本語とモンゴル語の「目」を含む慣用句における感情表現を対象にその分類を行い、その中で独特な表現を対象に意味成立における相違点を明らかにすることを目的とする。分析の際、感情表現の意味成立への影響として考えられる「色彩」や「共感」に対する認識を中心に考察を進める。

用例を述べると、両言語において「目」を大きくして驚きを表す感情などの共通する表現もあれば、日本語の喜びを表す「目の正月」や嫌悪を表す「目の上の瘤」、「目の敵」等、

モンゴル語の嫌悪を表す нүд хорсох (逐語：目がうずく)、快感を表す нүдэнд дулаан (逐語：目に温かい) などの感情やその評価に対する特有な表現も現れ、意味が解釈しにくい心情・感情を示す表現が現れる。

先行研究において、「目」で表される感情の分類を、中村 (1979) の「喜・怒・哀・怖・恥・好・厭・昂寂・安・驚」という 10 項目を参照にしながら分類を行う。以下、表 24 では、「目」の慣用句で表わされる感情・心情を 13 項目に分類し、関連の用例を両言語別に並べ、モンゴル語の慣用句に逐語を添付する。

表 24 感情・心情表現の分類

(I) 感情	日本語	モンゴル語 (逐語)
好	目がない 目に入れても痛くない	нүдээ өгөх (目をやる)
愛	目を細める	—
喜び	目を細くする	—
	目を輝かす 目が輝く	нүдээ гялалзуулах (目を光らす) нүд нь гэрэлтэх (目が輝く)
	目の保養 目の薬	нүд хужирлах (目に塩与える)
	目の正月	нүдний зугаа (目の遊び)
	目を喜ばせる	нүд баясгах (目を喜ばせる)
	目を潤ませる	нүд цийлэгнэх (目が潤む)
	—	нүд сэргэх (目が冴える)
	驚き	目を丸くする
目が点になる		—
目を疑う		нүдэндээ ч итгэхгүй (目も信じない)
目を皿にする		—
目を三角にする		нүдээ дүрлийлгэх (目を丸める)
目を白黒させる		—
目が吊り上がる		нүд нь орой дээрээ гарах (目が頭の上に出る)
目をぱちくりさせる		нүдээ анивчуулах (目を瞬く)
目を剥く		нүдэндээ итгэхгүй (目を信じない)
目が出る 目が飛び出る		нүд бүлтийлгэх (目を突き出す) нүд нь бүлтийх (目が突き出る)

	目を見張る	нүдээ бүлтийлгэх (目が突き出す)
怒り	目が鋭い	—
	目の色を変える	нүдээ улайлгах (目を赤くする)
	目に角を立てる	нүдээ гурвалжлуулах (目を三角にする)
	—	нүд ухах (目を掘るほど) нүдээ ухуулах (目を掘らせる)
嫌悪	目の上のこぶ	нүдэнд орсон хог (目に入ったくず) нүдэнд орсон өргөс (目に入ったとげ)
	目の敵 目の敵にする	—
	目を側立てる	нүдээ жартайлгах (目を鋭くする) нүднийхээ булангаар ч харахгүй (目の角でも見ない)
	目も当てられない	нэг нүдээр ч харахгүй (片目でも見ない)
	—	нүд хорсох (目がうずく)
	—	нүд үзүүрлэх (目を鋭くする)
	—	нүднээс далд болгох (目に見えなくする)
恐怖	—	нүд нь бүлтэлзэх (目が回る)
恥	目を伏せる	—
	目から火が出る	—
		нүдний булай (目の厭わしさ)
(II) 心情		
愉快	—	нүдэнд дулаан (目に暖かい) нүд дүүрэн (目に満ちた) нүдэндээ галтай (目に火がある)
不快	—	нүднээс гарах (目から出る) нүдэнд хүйтэн (目に冷たい) нүд хальтирах (目が滑る) нүдэнд тусахгүй (目に映らない) нүдээрээ инээх (目で笑う)
不満	—	нүд нь цадахгүй (目がいっぱいにならない) нүд хараах (目が呪う)

欲望	目の毒	нүдний хорхой (目の虫)
	—	нүдээ унагаах (目を落とす)
	目が眩む	нүдээ улайлгах (目を赤くする)
	—	нүдний хор орох (目の毒が入る)
敬意	目を落とす	—

感情・心情は13項目の下位分類に分けられるが、その中、日本語は35句、モンゴル語は45句が現れる。両言語共通に〈驚き〉、〈喜び〉、〈怒り〉、〈嫌悪〉などが多く、日本語独特に〈愛〉や〈敬意〉、モンゴル語独特に〈愉快・不快感〉や〈不満〉などの感情評価に関する表現が存在している。

そして、それぞれの構成要素に基づき、意味が成立する動機づけを比較する。

感情・心情	日蒙語	動機付け	構成要素
1. 喜び	共通：	目の様子の変化「輝き」 目の楽しみ「正月」や「遊び」 目に入れる物「保養、薬」や「塩」	
	日本語特有：	目の形の変化「細くする」	
	モンゴル語特有：	目の様子の変化「冴える」	
2. 驚き	共通：	目の形の変化「丸い、三角、飛び出る、吊りあがる」 目の動きの変化「ばちくりさせる」 目の機能「疑う」や「信じない」	
	日本語特有：	目の色の変化「色を変える」	
3. 怒り	共通：	目の色の変化「色」や「赤」 目の形の変化「角」や「三角」	
	日本語特有：	目の様子の変化「鋭い」	
	モンゴル語特有：	目に与える刺激「掘る」	
4. 嫌悪：	共通：	目の動きの変化「側立てる、当てられない」	
	日本語共通：	目の不快感「瘤、敵」	
	モンゴル語特有：	目の刺激「鋭くする、うずく」 目の動きの変化「目の角でも、片目でも」	
5. 恐怖：	モンゴル語特有：	目の様子の変化「回る」	
6. 恥：	日本語特有：	目の移動「伏せる」 目の感覚「火が出る」	

- モンゴル語特有：目の感覚「嶮しさ」
7. 愉快： モンゴル語特有：目の感覚「温かい、火がある、満ちた」
8. 不快： モンゴル語特有：目の感覚「出る、冷たい、滑る」
9. 不満： モンゴル語特有：目の感覚「いっぱいにならない」
目の機能「呪う」
10. 欲望： 共通： 目に与える刺激「毒」や「虫」
目の感覚「眩む」や「赤くする」
モンゴル語特有：目の移動「落とす」
目の刺激「毒が入る」
11. 敬意： 日本語特有： 目を移動「落とす」

このように、「目の形の変化」、「目の動き」「目の色の変化」「目の様子の変化」「目の移動」などの目から伺われる表情に基づいた表現が両言語共通に現れ、伊藤（1999）が主張する身体部位の「具象性」に基づく慣用的意味の拡張が認められる。

類似の用例を言えば、目の形・様子から共通に現れる感情として、驚きを表す「目を丸くする」「目が出る」「目が飛び出る」「目を三角にする」「目を皿にする」「目が吊りあがる」、「нүдээ бүлтийлгэх（目を丸くする） нүдээ дүрлийлгэх（目を丸める） нүд нь орой дээрээ гарах（目が頭の上に出る） нүдээ бүлтийлгэх（目が突き出る）」や、喜びを表す「目が輝く」、「нүдээ гялалзуулах（目を光らす）」、「нүд нь гэрэлтэх（目が輝く）」や、怒りを表す「目の色を変える」、「目に角を立てる」、「нүдээ гурвалжлуулах（目を三角にする）」や、嫌悪を表す「目を側立てる」、「нүднийхээ булангаар ч харахгүй（目の角でも見ない）」や、欲望を表す「目の毒」、「目が眩む」、「нүдний хорхой（目の虫）」、「нүдээ улайлгах（目を赤くする）」などがある。

このように、両言語において「目」の表情から伺われる感情・心情は一般に〈驚き〉、〈喜び〉、〈怒り〉、〈嫌悪〉、〈欲望〉である。形式から言えば、基本的に目の丸い形が驚きに、三角形が怒りに、目の角が嫌悪にそれぞれ捉えられる概念となる。

「目」を含む慣用句の意味成立に関わるこれまでの研究では生理的基盤においても、社会的要因においても成立する意味をメタファーやメトニミーによる認知的プロセスとして解説されている。そこから意味の捉え方やそれに影響を及ぼすと考えられる当該国民の文化・社会的背景ははっきりと見えない。

従って、本研究では意味成立の背景を追求し、類似表現の意味の違いにおける（5.3）文化的背景を解説してきた。表 21 において示されている両言語の構成が類似で意味が異なる「目の毒」「目を落とす」や「нүдэндээ галтай（目に火がある）」などの意味分析について「5.3」を参照されたい。そして、ここでの分類に基づき、以下、共通しない表現を対象にそれらの意味的背景を考察する（5.5.2）。

5.5.2 両言語特有の感情表現の意味的背景

両言語共通の表現として、目の部位の様子や変化に基づき、その表情から拡張される慣用句が多いことが分かった。異なる点も見られるが、それは異なる文化・社会的影響が背景にあると考えられ、そのような違いにおいて以下考察を試みる。対象語彙は、両言語それぞれに特有に現れる「目」を含む感情表現や感情評価表現である。

1. モンゴル語特有の感情表現

表 23 で見てきた通り、構成要素や意味解釈が異なる感情表現がいくつか現れ、その意味に影響する背景について考察する。

モンゴル語特有の捉え方は、目の色で表される欲望や、目で認識する感情評価の表現などである。色を使う感情は「*нүдээ улайлгах* (目を赤くする)」に限られているが、感情評価の表現が多いことが分かった。

感情評価は、他人を対象にした、つまり第三者の心情・感情を判断し、その評価を表すには「目」部位が使用されることが多いようである。例えば、*нүдэнд дулаан* (目に暖かい)、*нүд дүүрэн* (目に満ちた)、*нүдэндээ галтай* (目に火がある)、*нүднээс гарах* (目から出る)、*нүдэнд хүйтэн* (目に冷たい)、*нүд хальгирах* (目が滑る)、*нүдээрээ инээх* (目で笑う、) *нүд нь цадахгүй* (目がいっぱいにならない)、*нүд хараах* (目が呪う) などである。

それぞれの意味的背景に関する考察を進める。

(1) 色彩が表す感情

M10: 「*нүдээ улайлгах* (目を赤くする)」— 1. 怒り、2. 欲望の気持ち・様子

目の色を示すことによって驚きや怒りや欲望などを表すが、両言語間に捉え方の違いが見られる。日本語の「目を白黒させる」は〈驚き〉を、「目の色を変える」は〈怒り〉を、モンゴル語の「目を赤くする」は〈欲望〉を表している。目の色に関する感情表現は少ないが、色彩を使って表す感情にはどのような意味があり、それはどのような動機付けがあるかについて考察する。

モンゴル語独特に現れる「*нүдээ улайлгах* (逐語：目を赤くする)」慣用句があり、「赤」が「欲望」として捉えている。普段「顔が赤くなる」など、生理的現象により身体に赤みが現れる表情・症状と関係があるだろうが、そのような意味のプロセスによるのが1.の〈怒り〉の意味であると考えられる。

谷口 (2003 : 167) における「人間は怒りを感じた時には、体温や血圧が上昇し、体が

震える、という生理的現象が起こる」という生理的な変化から考えれば、怒りの時に目も赤くなる生理的基盤が認められる。

一方、2. の〈欲望〉の意味においては、モンゴル語の「**нүдээ улайлгах**（逐語：目を赤くする）」は生理的現象に関係が薄く、別の要因で意味が形成されていると考えられる。

お金などに対する欲望により生理的に目が赤くなることはまず無いだろうが、これは身体現象より文化的な概念が影響していることと思われる。そして目の様子などを軽視し、そこで使われる色彩の意味に重点を置いて解説する。

モンゴルで赤い色が基本的に「火」や「社会革命」などの影響から良いイメージである。一方、戦争体験か食事生活に関しての血をイメージする「赤」と捉えていると考える。モンゴル語国語辞典において、「**улаан**（赤い）」の意味は「**цусны өнгө**（血の色）」と記述されている。（**Я.Цэвэл 1966:587**）

モンゴルは昔から日常生活で主食は肉であり、家畜肉を各家庭で加工する習慣があるが、生肉の血を不快に思いがちである。

「赤」が表す欲望の意味として、モンゴル語では **Мөнгө цагаан нүд улаан**（逐語：銭が白く、目が赤く）」という諺があり、欲深いという意味を表す。さらに、**мөнгөнд улайрах**（逐語：お金に赤くなる）があり、意味は「お金に夢中」といって欲望を表している。

「赤」との対立する色が「白」であり、「**улаан цайм худлаа хэлэх**（逐語：赤白に嘘つく）」と言って、日本語の「真っ赤な嘘」に類似する表現であるが、この二つの色を対立させる認識があるようである。「赤白」の対立は上記の諺にも現れていたが、慣用表現によく使われることを示す。

「赤白」の対立は伝統的料理生活から受け継がれたと思われる。「**улаан**（赤）」は「**улай**（赤身）」から発生した色である一方、「**цагаан**（白）」は「**цагаа**（発酵乳）」という乳製品の名前が語源であるため、主な食べ物から発生したことが興味深い。つまり、遊牧民は四季や気候に合わせて冬は肉を、夏は乳製品を食べる習慣があり、それらを代表する色は「赤・白」である。乳製品を「**цагаан идээ**（白色の食品）」と言って、清潔な意味として認識する。乳製品を使う習慣のお正月を「**цагаан сар**（白いお正月）」と言い、白色の物を食べて、新年を清らかな気持ちで迎えるという考え方があり、「白」は良いことの象徴である。それに対して、「赤」は血の色としてのマイナスイメージを意識しがちである。従って、白黒に見えるはずの「目」が赤身のように見えるというイメージで「**нүдээ улайлгах**（目を赤くする）」は欲望を表す意味に繋がる。

一方、日本語において目の赤色で表す感情表現は無いようである。他の色に関しては、怒りの意味を表す「目の色を変える」とあるが、具体的な色が示されていない。色彩とは関係なく、目の動きにより視線が変わる様子を表しているのである。

さらに、驚きを表す「目を白黒させる」には色彩の意味が捉えられるが、これは「目」

という部位のの基本構造の動きを示すものであり、色彩のシンボルが現れないと考えられる。ここで扱っていないが、日本語に「白い目で見ると」という嫌悪を表す表現があるが、白い色は両国共通に清潔さを象徴する意味だろうが、この場合に対しても色に対する概念でなく、目の動きによる表情に焦点が置かれた表現であると言いたい。

両言語における「目」の色の構造に関しては、両言語共に同じアジア民族として「目の黒いうち」のように、具体的な色に対する共通概念を持っており、色に対する類似表現や概念も当たり前であることを示す。

まとめると、モンゴル語は伝統的生活から色彩をイメージし、それに基づいて慣用句の意味を作り出していることが分かった。日本語の場合は、目で色彩に対するイメージが目を含む慣用句に影響がないようである。

2. 共感が表す評価:

「表 23」において、モンゴル語特有に現れる評価の慣用句が多いことが分かった。例えば、нүдэнд дулаан（目に暖かい）、нүд дүүрэн（目に満ちた）、нүдэндээ галтай（目に火がある）、нүднээс гарах（目から出る）、нүдэнд хүйтэн（目に冷たい）、нүд хальтирах（目が滑る）、нүдээрээ инээх（目で笑う、）нүдэнд тусахгүй（目に映らない）、нүд нь цадахгүй（目がいっぱいにならない）、нүд хараах（目が呪う）などである。

評価は、他人を対象にした、つまり第三者の心情・態度・様子を判断し、その評価を表すには「目」部位が使用されることが多いようである。用例を見ると、そのような評価は「視覚」で見て、「感覚」で評価する共感の結果として表出される。構成要素には目の感覚、つまり視覚に機能に関係ない語彙が多く、評価する対象や意味も様々であることが興味深い。そして、それらの意味の背景を考察したい。分析の対象用例は下記の三つの通りである。

M11: нүдэнд дулаан（目に暖かい）、нүд дүүрэн（目に満ちた）、нүдэндээ галтай（目に火がある） — 他人に対する「快感」評価を表す慣用句

M12: нүднээс гарах（目から出る）、нүдэнд хүйтэн（目に冷たい）、нүд хальтирах（目が滑る） — 他人に対する「不快」評価の慣用句

M13: нүд нь цадахгүй（目がいっぱいにならない）、нүд хараах（目が呪う）、нүдэнд тусахгүй（目に映らない） — 他人に対する「不満」を表す慣用句

そして考察として、まず、「нүдэнд дулаан（逐語：目に暖かい）」を取り扱う。これは、他人の外見・性格・人柄などに対する良いイメージの評価であり、「暖かい」という言葉で現れる。「あたたかい」は視覚の機能とは関係ない感覚であるが、各国において良いイメー

ジを成す言葉であるだろう。日本語においても「暖かい」は良いイメージの言葉であり、「目」を使って表す表現が無いが、「ふところが暖かい」「暖かい人」など人に対する良い評価の言葉である。

自然に頼る人間において「暖かい」は、基本的に火や太陽の恵みから生まれる感覚であるだろう。従って、「暖かい」感覚は人に癒される気持ちを与える良いイメージの言葉である。その気持ちは、見た目の良い人を「暖かい」と感じる動機づけとなり、それによってこのような表現が生まれたと考える。モンゴル語においてこれの反対の表現は **нүдэнд хүйтэн** (逐語：目に冷たい) であり、感じの悪い人に対して言う。両者とも、目で見て、心で感じる評価であり、共感から生まれた表現となる。伴って、目は視覚を越えて働くような感覚器官として機能される。目で見ない限り、他人への評価が実感されないため、モンゴル語において目の機能を拡張させた表現として形成されている。

次に、**нүд дүүрэн** (逐語：目に満ちた) は、「目いっぱいに見える」ものを意味し、人に対すると体系的に魅力的な人に対して言う良いイメージの評価であり、これの反対表現は **нүднээс гарах** (逐語：目から出る) である。

構成要素の「**дүүрэн** (満ちた)」は「いっぱい」という意味の言葉であり、このくいっぱい」のイメージは人を対象にすると、やや太っていて体型が大きい人と言う。力士を敬う習慣のモンゴルでは昔から体が大きくて、筋肉や脂肪が適切に整っている人に対する良いイメージや美意識が高い。物に対しても「**дүүрэн** (逐語：いっぱい)」の良いイメージが維持される。「**сав дүүрэн** (逐語：容器いっぱい)」などの表現がたくさんあって<物が容器に溢れる>イメージの言葉であり、お正月になると家の中の容器やお皿などに食べ物を溢れるほどに並べるよう気を使い、それにより来年も食べ物で溢れることを象徴する習慣がある。

このように、人や物に対する良いイメージが、慣用句において人の見た目や外見に対する魅力的というイメージに転換したわけである。

この慣用句に反する **нүднээс гарах** (目から出る) は人の痩せたり、疲れ果てたりしている姿に対して言う。構成要素の「**гарах** (逐語：出る)」によって「目いっぱいに見えない」という、視界に捉われないようにイメージした表現である。「**нүд хальгирах** (逐語：目が滑る)」も同じような評価であるが、人の体型中心ではない場合もある。悪い現象や悪事を直視できないという意味でも使用される。

基本的に、モンゴルでは人の体型・見た目に対する良いイメージは慣用句の意味成立に活かされていると言えよう。このような評価は昔の日本には同じであっただろうが、現在はこれとは反対のイメージに変わってきていると思う。

最後に、「**нүд нь цадахгүй** (逐語：目がいっぱいならない)」、「**нүд хараах** (逐語：目が呪う)」などの<不満>を表す表現を対象にする。これは殆ど子供に対して言う傾向であり、それほど悪い評価でもない。基本的に食べ物に対しての心情として言うが<お腹が満たれて

も、視線がまだ食べ物に向いている」という「また食べたい」という気持ちが表される。構成要素の「цахдах（逐語：お腹がいっぱいになる）」は実際にお腹の感覚を示す言葉であり、その意味が転じて「目」に対しての感覚として使われていると言える。

また「нүд хараах（逐語：目が呪う）」も類似の意味であるが、良い物に対しての欲しいという気持ちを表す表現であり、日本語の「目を奪う」、「目の毒」に近い意味を示す。上記と違って、対象物は食べ物に限らないこともあり、特に子供に対してよく使う表現である。それは、子供が見た物なら何でも欲しいという好奇心を持っているため、その心情を隠せずに表情に出す様子を描く表現となる。構成要素の「хараах（逐語：呪う）」は、字義通りに「呪う」という意味しか把握されないが、人が欲しい物を手に入れることができなかつたら、気持ちがその物から離れず、常に目に見える様子を描いたと思われる。そのため、視覚による欲望が働くという意味を示すような「хараах（呪う）」により構成されたと思われる。

このように、目の様子から「満腹感」や「満足感」が無いという心情を読み取る意味では目の移動に基づき拡張した表現であると考えられる。しかし、表情が素直に現れる子供や人に対して言う評価であるため、この言葉の動機づけというより誰に向いているかという態度から生まれた表現であるかと推定される。

2. 日本語特有の感情表現

日本語特有に現れる表現である愛や恥や敬意を表す「目を細める」「目に入れても痛くない」「目を落とす」「目を伏せる」などがモンゴル語に無い構成であり、あったとしてもこれとは異なる意味を表すことがある。このような敬意や恥に関する表現は社会的ルールから習慣化された感情の表し方であると考えられる。「目に入れても痛くない」、「目を落とす」の意味に関する考察を上述しており、(4.3)を参照されたい。

表 23 から見える通り、モンゴル語における「嫌悪」を表す нүдээ жартайлгах（逐語：目を鋭くする）、нүднийхээ булангаар ч харахгүй（逐語：目の角でも見ない）、нэг нүдээр ч харахгүй（逐語：片目でも見ない）、нүд хорсох（逐語：目がうずく）、нүд үзүүрлэх（逐語：目を鋭くする）、нүднээс далд болгох（逐語：目に見えなくする）などの表現は日本語に現れないことが注目される。さらに「愉快」、「不快」、「不満」などの他人の心情・様子などに対する表現も見られ、日本語とは異なる性質の表現となる。

日本語の方から考えてみれば、日本語にこのような表現が存在していないのが、社会ルールや文化的な背景に規定されていることが言語表現に現れていると認識される。つまり、他人への感情評価を避ける傾向であることに裏付けられているだろう。

言語構造から見れば、他人の心情・感情に対する評価を「～のよう」「～そう」「～みた

い」のように間接的に表すことがあるが、結果が出される性質の慣用句で直接的に表さないようである。

日本人の感情の表し方について、工藤（2000：170-172）は「私たちは自由に感情を表しているかと思っているかもしれませんが。ところが、実際には、感情の表し方は、暗黙のうちに決められています。それを取り仕切っているのは、文化の力、つまり、しきたりです」と言う通り、感情の表し方において文化・社会的背景があることが示されている。

さらに「日本人は、「人の輪」の文化です。感情の表し方も、こうした文化の特質を維持するために決められています。そのため、相手に対する気配りを忘れず、自分本位の主張はできるだけ抑えられ、仲間同士が攻撃し合う怒り顔や怒り声は、御法度になっています。それは、上下関係を存続させるためにも欠かせない」と示されている（工藤、2000：172-175）。

そして、工藤（2000）では、日本人の感情の表し方が「縮小」「抑制」などに分類され、感情を抑えるか抑えて表したり、感情を隠して微笑んだりする表情であると示している。

このように、日本人は自分の感情を抑えて表すだけでなく、他人の心情などに対する判断や評価も避ける傾向であると考えられる。

表 23 から見えるように、モンゴル語と違い、他人に対する〈嫌悪〉の感情やその他の評価を示す表現が少ないことが文化・社会に裏付けられるものであると思われる。

5.6 本章のまとめ

本章では、日本語とモンゴル語の感情を表す慣用句を対象に分析や考察を進め、それらの文化・社会的な背景の考察を行う。分析の結果、両言語において「目の形の変化」、「目の動き」、「目の色の変化」、「目の様子の変化」、「目の移動」など、目から伺われる表情に基づいた表現は共通であり、伊藤（1999）が主張する身体部位の「具象性」に基づく慣用的意味の拡張が検証された。例えば、驚きを表す「目を丸くする」「目が飛び出る」「目を三角にする」「目を皿にする」「目が吊りあがる」や、「нүдээ бүлтийлгэх（目を丸くする） нүдээ дүрлийлгэх（目を丸める） нүд нь орой дээрээ гарах（目が頭の上に出る） нүдээ бүлтийлгэх（目が突き出る）」などのように、両言語において「目」の表情から伺われる感情・心情は一般に〈驚き〉、〈喜び〉、〈怒り〉、〈嫌悪〉、〈欲望〉であることが分かった。

まず、色彩意識による表現として、モンゴル語特有の感情表現では目の色で表される欲望や、目で認識する感情評価の表現を対象にし、色彩がどのように感情に影響しているか、その背景について文化的な観点から考察した。

M10: 「нүдээ улайлгах（目を赤くする）」 — 2. 欲望の気持ち・様子

ここでは、目の生理的現象というより、「赤」の認識に影響され、意味が形成されたとと言える。モンゴルの伝統的な家畜産業による習慣が色彩の意識に影響し、それによって慣用句における色彩語彙の意味が成立されることを明らかにした。一方、日本語においては色彩のイメージを使って「目」を含む慣用句の意味を形成することは稀なようである。

次に、共感による感情表現を分析した結果、力士への好感を始め、人の外見に対する一般的なイメージが人や物に対する評価に転換し、慣用句の意味を成立していることが明示される。

その次に、目の様子に基づき他人の心情に対する評価を表す表現が成立されていることが分かった。その結果、目の様子から満腹感や満足感の無さを表す心情を読み取り、それが慣用句の動機付けにもなるが、それと同時に対象者（特に、子供や目下の人）に対応した表現が生まれることが把握される。

最後に、日本語特有に現れる表現である愛や〈恥〉や〈敬意〉を表す「目を細める」「目に入れても痛くない」「目を落とす」「目を伏せる」などがモンゴル語に無い意味・構成であることが注目され、このような表現は社会的ルールから習慣化された感情の表し方であると考えられる。

一方、表 23 からも見える通り、モンゴル語における〈嫌悪〉、〈愉快〉、〈不快〉、〈不満〉などの他人の心情・様子などに対する評価、それを表す慣用句は日本語に現れないことも特徴的であり、日本語にこのような表現が存在していないのが社会ルールなどの文化的な背景に規定されていることという認識に至った。工藤（2000）の指摘にあるように、日本

人は他人への感情評価を避ける傾向があることが伺われる。

日本語では、他人への感情評価を「～のよう」「～そう」「～みたい」のように間接的に表すことがあるが、これに対してモンゴル語は直接的に表すため、そのような表現を促し、社会・文化的な差異を見せる。このような対照分析はより拡大させ、今後の課題としたい。

第6章. 結論

本論文において日本語とモンゴル語の「目」を含む慣用句の形式的・統語的・意味的な分類や考察を行ってきた。その結果、以下の通りに結論付ける。

第2章では、日本語とモンゴル語における「慣用句」の定義を取り上げ、両言語における定義や概念を確認し、「二つ以上の語から成り、定型的な形式構成を持ち、構成要素全体で一つの意味を表す固定された表現である」ことを見た。

第3章では、日本語とモンゴル語の「目」を含む慣用句の統語的な分析を行い、両言語の対象慣用句の構成を対照し、同じ文法構造と言われる日本語とモンゴル語の慣用句構造に見られる相違表現を明白にした。

両言語の対象慣用句は、基本的に3語から成る表現が一番多く、語彙的構造には差が見られないことが分かった。その大多数を示すのが動詞慣用句であり日本語の85.2%、モンゴル語の86.8%を示すことが分かり、それらを対象に統語的構成に対する分析を行った。

第4章では、統語的な対照考察に基づき、モンゴル語独特に現れる統語的要素が意味成立に関与する可能性について検討した結果は次の通りである。

日本語の「N+ガ+V」に対してモンゴル語の「N+ \emptyset +V」の主格だけでなく、「N+ \emptyset +**НЬ**+V」主格+所有接合語構成による慣用句が対応することが分かった。主格使用例の両言語共通に現れる意味は、①感情（喜、驚）、②心情（ネガティブ状態）、③無力（無集中力、無判断力）、④表現力（言語力）が基本的である。

従って、モンゴル語における「主格+所有接合語」の分析により、第三者の感情・評価に対するマイナスの意味が多いことが観察され、それは、対象者が第三者であるため、自分よりも表出度が強く現れ、その意味表示は「**НЬ**」なしでは不可能に近いと言えよう。そして、マイナスマイナス評価と「**НЬ**」の関係性について解説した。

慣用句レベルにおいて、モンゴル語における通常の「**НЬ**」の待遇表現（心理近接性）を表す意味が三人称を焦点にしなが、一人称や二人称を表す時に使われ、その場合は親しみを表すことがある。文レベルにおいては、「**НЬ**」が無い場合、「N+ \emptyset +V」構成表現を見れば、「目」の身体部位自体の様子が描かれ、慣用句の程度が「**НЬ**」を使った慣用句より低いことが観察された。

さらに、両言語の「対格」使用例を分析した結果、両言語においてその用法や意味は基本的に似ているものの、モンゴル語の「対格+再帰所有接辞」用法が目立ち、その慣用句の意味への影響について検討した。その結果、「対格」のみの場合、対象者の外界に対する意図的な行動や非意図的な心情が表され、それに対して「再帰所有接辞」が必要とされる要因は、対象者の意図と判断による話し手への感情評価や態度を表出する動作であると考

えられる。

身体部位を対象にする表現であるため特徴的であり、「再帰所有接辞」により強調される「目」とは、人間の分解不可能所有物であるため、視力器官の働きとは異なる意味対応を表す目途が実現されていると考えられ、このような統語的な構成要素により慣用句の意味が成り立つ可能性が促される。つまり、モンゴル語の慣用句における対格後続の再帰所有接辞は慣用句の意味ニュアンスに貢献できることを指摘しておきたい。

また、日本語とモンゴル語の所有構造を示す「ある」、「もつ」「-тай」の意味を検討し、両言語の慣用句における対照考察の結果を示す。モンゴル語の「N+тай」が日本語の「N持ち」の構造と意味と用法に近いが、身体部位を対象にする特殊な意味においては「ある」、「-тай」により構成されており、それらの分析を行った。

慣用句における所有の構造は、日本語は「ある」動詞、モンゴル語は「-тай」接辞により構成され、両言語共に「目」を通じる鑑識力を意味している。日本語の「ある」は身体部位を対象とする場合は属性物として捉え、その属性物の長期的な保持性を示す。つまり、抽象物として捉える場合に限って本来備わっている所有物の一面の「存在」を意味していると考えられる。そのため、分離不可能所有物に対しては典型的な所有構造を成す「持つ」が示す意図性が不必要であり、従って非意図性を持つ「ある」が有効的であることが分かる。

これに対して、モンゴル語の場合は「-тай」が身体部位を「属性」として捉える捉え方や、属性物をく長期的に保持されるものとする認識において「ある」の用法に類似し、身体部位を含む慣用句における特徴として伺われる。しかし、モンゴル語の「-тай」が広範囲に見られ、日本語の「ある」の所有の用法には制限があると言える。

このように、第4章で行った統語的分析を通して、慣用句の意味成立には構成語彙の意味分析だけでなく、統語的な構成要素も影響する可能性があることが明らかになった。

第5章では、日本語とモンゴル語の「目」を含む慣用句の意味成立に対する分析を行い、それらの背景について対照考察した。その結果、両言語において「目の形の変化」、「目の動き」「目の色の変化」「目の様子の変化」「目の移動」などの目から伺われる表情に基づいた表現が共通され、両言語において「目」の表情から伺われる感情・心情は一般的に〈驚き〉、〈喜び〉、〈怒り〉、〈嫌悪〉、〈欲望〉である。この場合において、先行研究による「生理的基盤」や、身体部位の「具象性」に基づき慣用的意味が拡張することが検証される。

さらに、文化的な背景に関する考察の結果、当該国民の伝統的産業や生活環境や習慣や社会的ルールなどが慣用句の意味成立に影響していることが明示され、それらに関する解説を記述した。

特に、色彩認識による表現として、モンゴル語特有の感情表現では目の色で表される〈欲望〉の意味は伝統的生活によるものであることを指摘した。また、共感による感情表現も

現れ、それらは自国民に対するプロトタイプ的なイメージが反映され、他人の外見や内面への評価を表す表現が生まれる基盤となることが明示された。

このような文化的な背景と共に、「目の様子」に基づく概念が他人の心情に対する評価を表す表現として成立されていることも伺われる。

日本語特有に現れる表現に関しては、〈愛〉、〈恥〉、〈敬意〉などを表す「目を細める」「目に入れても痛くない」「目を落とす」「目を伏せる」などが社会的ルールから習慣化された感情の表し方であると考えられる。これらの表現はモンゴル語に現れない意味・構成であるがことが異なる文化であることを示す。

一方、モンゴル語における〈嫌悪〉、〈愉快〉、〈不快〉、〈不満〉などの他人の心情・様子などに対する評価、それを表す慣用句は日本語に現れないことも特徴的であり、日本語にこのような表現が存在していないのが、工藤（2000）の指摘にあるように、日本人は他人への感情評価を避ける傾向であることに背景化されていると認識される。要するに、モンゴル語は感情や他人への評価などを直接的に表す傾向であることが言語表現から伺われることを促している。

上記の通りであり、従来の研究では固定されていると指摘される慣用句の統語的・意味的分析を行うことで慣用句の意味成立に統語的な要素や文化・社会的な要素の影響が考えられ、そのような分析の可能性があることが示せた。

さらに、同じアジア大陸の国であり、言語構造が同じと見なされる日本語とモンゴル語の慣用句において、異なる統語的な構成要素により表現の意味が異なり、さらに独特な文化・社会により表現の意味解釈や意味成立には相違点が生じることを明らかにした。

参考文献

日本語の文献：

- 有菌智美（2008）「「顔」の意味拡張に対する認知的考察」『言葉と文化』第9号、287-301
- 有菌智美（2009）『身体部位詞を構成要素に持つ日本語慣用表現の認知言語学的研究』名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士論文
- 一ノ瀬恵（1988）「モンゴル語の人称名詞と人称関係小辞について」『日本モンゴル学会紀要』第19巻、15-29
- 石田プリシラ（1998）「慣用句の変異形について－形式的固定性をめぐって－」『筑波応用言語学研究』5号、43 - 56
- 伊藤眞（1999）「慣用句の具象性についての一考察」『言語文化論集』51、95-177
- 梅谷博之（2012）「モンゴル語の所有を表す接辞」『北方言語研究』第2巻、47-72
- エルデネビレグ ウヤンガ（2009）「日本語とモンゴル語の格関係の対照」『信大言語教』19、1-11
- 小沢重男（1993）『モンゴル語の話』大学書林
- 金水敏（2004）グローバル時代における日本語－“客観化”をめぐって－『日語日文学研究』第49輯、15-30
- 角田太作（1991）『世界の言語と日本語』くろしお出版
- 賀川洋（1997）『誤解される日本人』大日本印刷株式会社
- 笠川紘史（2007）「身体語彙を含むイディオムの日英比較」『中京英文学』27号、35-55
- 河上誓作（1996）『認知言語学の基礎』研究社出版
- 金田一晴彦・林大・柴田武（1988）『日本語百科大事典』大修館書店
- 川島嘉美（2008）「所有表現の認知的研究：名詞化における容認性逆転現象」『金沢大学学術情報リポジトリ』第16号、35-44
- 李明玉（2007）『日本語と韓国語の慣用表現の差異』笠間書院
- 林八龍（2002）『日・韓両国語の慣用的表現の対照研究』明治書院
- 菊地康人（2000）「所有の「ある」と「もっている」」『世界の日本語教育』第10号、147-163
- 工藤力（2000）『しぐさと表情の心理分析』福村出版
- 国広哲弥（1985）「慣用句論」『日本語学』第4巻第1号、4-14
- ゲキゼチアナ・田中聡子（2004）「日露慣用表現に見る身体と精神の捉え方」『言語文化論集』25巻第1号、55-84

- 小池清治・スベトラニコロワ（2003）「慣用句の分類とその応用」『宇都宮大学国際学部研究論集』第16号、89-104
- 小池清治・小林賢次・細川英雄・山口佳也（2002）『日本語表現・文型辞典』朝倉書店
- 小泉保ら（1989）『日本語基本動詞用法事典』大修館書店
- 鯉淵信一（1992）『騎馬民族の心 モンゴルの草原から』日本放送出版協会
- 小柳昇（2009）『〈所有〉の意味観点をもつ他動詞文の分析ー語彙概念構造における「場所の焦点化」と「所有者の出来事構造化」のプロセスー』拓殖大学大学院言語教育研究科日本語教育専攻修士論文
- Cowie, A. P. 【南出康世、石川慎一郎監訳】（2009）『慣用連語とコロケーション コース・辞書・言語教育への応用』くろしお出版
- 阪田雪子（2004）「連語・慣用句」『講座 日本語と日本語教育 第7巻日本語の語彙・意味』明治書院、224-252
- 塩谷（2008）「モンゴル語の内臓を表す若干の語彙に見られる意味のシンボリズムー特に慣用句及び派生語に言及してー」『日本モンゴル学会紀要』第38号、51-63
- 新井政議（1992）『成語林 故事ことわざ慣用句』旺文社
- 篠原和子・片岡邦好（2008）『ことば・空間・身体』三美印刷
- 鈴木孝夫（1973）『ことばと文化』岩波新書
- Surenjav Oyunzul（2010）『日本語とモンゴル語の「頭部」の身体語彙慣用句の対照研究ー「目」の身体語彙を中心にー』、広島大学大学院国際協力研究科修士論文
- スレンジャブ オユンズル（2013）「日本語とモンゴル語の「目」を含む慣用句の比較研究ーモンゴル語の所有接合語「нъ」を中心にー」『比較文化研究』第107号、31-42
- スレンジャブ オユンズル（2014）「日本語とモンゴル語の所有表現の比較ー「目」を含む慣用句を中心にー」『比較文化研究』第110号、79-91
- 田中克彦（1993）『ことばのエコロジー 言語・民族・国際化』農山魚村文化協会
- 田中聡子（2002a）「「口」の慣用表現ーメタファーとメトニミーの相互作用ー」『言葉と文化』3号、5-20
- 田中聡子（2002b）「視覚表現に見る視覚から高次認識への連続性ー視覚の文化モデルー」『言語文化論集』23巻第2号、155-170
- 田中聡子（2003）「心としての身体 慣用表現から見た頭・腹・胸」『言語文化論集』第24巻第2号、111-124
- 田中セツ子（2005）『現代モンゴル語口語辞典』大学書林
- 田中聡子、クキゼ タチアナ（2004）「日露慣用表現に見る身体と精神の捉え方」『言語文化論集』第25巻第2号、55-83

- 谷口一美 (2003) 『認知意味論の新発展 メタファーとメトミニー』 英語学モノグラフシリーズ 20、研究社
- ダニーミン・佐野洋 (2001) 「日本語学習者のための慣用句データベースの作成 統計処理を用いた一手法の提案」『コンピュータと教育』 62-8、55-62
- 中京大学 (2007) 『中京英文学』 第 27 号、中京大学英米文化・文学会
- 築島謙三 (1984) 『「日本人論」の中の日本人』 大日本図書株式会社
- 辻幸夫 (2002) 『認知言語学キーワード辞典』 研究社株式会社
- 寺村秀夫 (1975) 「表現の比較というものについて」『国語シリーズ別冊 3 日本語と日本語教育 発音表現編』 文化庁、146-150
- 寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味 第 I 巻』、くろしお出版
- 中村明 (1993) 『感情表現辞典』 東京堂出版
- 中村明 (1995) 『感覚表現辞典』 東京堂出版
- 賈惠京・吉田則夫 (2006) 「身体語を含む慣用句についての日韓対照研究」『岡山大学教育学部研究』 第 132 号、115-121
- 中右実・巻下吉夫・瀬戸賢一 (1997) 『文化と発想とレトリック』 研究社印刷株式会社
- 野田尚史 (1997) 『新日本語文法選書 1 「は」と「が」』 くろしお出版
- 橋本邦彦 (1999) 「目のメタファー 日本語とモンゴル語の対照研究」『表現研究』 第 69 号、52-60
- 橋本邦彦 (2002) 「身体メタファーに見る自己理解」『室蘭工業大学紀要』 第 52 号、23-31
- 橋本邦彦 (2006) 「モンゴル語 3 人称後接語のトピック標示/焦点標示」『認知科学研究』 4 号、7-23
- 橋本邦彦 (2010) 「存在と所有の間—モンゴル語の存在文と所有文の意味論—」『北海道言語研究会』 No.8、105-127
- 娜仁托娅 (2011) 「モンゴル語の小辞 mini, cini, ni, cü, le, bol に関する考察: 取り立ての観点から—」『北方言語研究』 (1)、165-184
- ナヤンバートル アマルジャルガル, 堀江薫 (2006) モンゴル語の所有表現と「所有傾斜」—共同格の接尾辞-tai を中心に—『言語処理学会』第 12 回年次大会発表論文集、604-607
- 原沢伊都夫 (2003) 「所有の意味から有する存在文について: 意志性の有無の観点から」『静岡大学留学生センター紀要』 第 2 号、1-11
- 傍恒平 (1984) 『からだ言葉の本』 筑摩書房
- 馬場典子 (2002) 「「腹が立つ」の動機づけに関する一考察」『言葉と文化』 第 3 号、31-44
- 星野命 (1976) 「身体語彙による表現」『日本語講座第 4 巻・日本語の語彙と表現』 大修館、153-182

- 程長善（1996）「日本語慣用句の語彙的な特徴に関する一考察」『経営研究』第9巻第3号
455-470
- 前田富祺（1993）「日本語の感情を表すことば」『日本語学』1月号、4-13
- 牧野誠一（1996）『ウチとソトの言語文化学 文法を文化で切る』株成会社アルク
- 松浦照子（2003）「感覚表現と感情（特集 感情を表す言葉）」『日本語学』22(1)、46-64
- 松原純一（1999）「現代日本語の慣用句」『聖徳大学研究紀要』第10号、93-99
- 松本曜（2003）『認知意味論 シリーズ認知言語学入門』第3巻、大修館書店
- 水野正規（1991）「モンゴル語の所属小辞」『日本モンゴル学会紀要』第22巻、42-56
- 宮地敦子（1979）『身体語彙の史的研究』明治書院
- 宮島裕（1975）『日本語の表現の類型 日本語と日本語教育』日本語シリーズ別冊三、文化
庁
- 宮島裕（1977）「慣用句と連語成句」『日本語教育』第4巻1号、298-310
- 宮島裕（1982）『慣用句の意味と用法』明治書院
- 村木新次郎（1997）「慣用句・機能動詞結合・自由な語結合」『日本語学』第4巻、第1号、
15-27
- 初山洋介（1997）「慣用句の体系的分類—隠喩・換喩・提喩に基づく慣用的意味の成立を中
心に—」『名古屋大学国際国文学』80号、29-43
- 初山洋介（2006a）「認知意味論の新発展—メタファーを中心に—」『日本語認知言語学会論
文集』6号、505-507
- 森田良行（1985）「動詞の慣用句」『日本語学』第4巻第1号、37-44
- 森田良行（1989）「人間関係を表す慣用表現」『言語』第18巻、岩波書店、35-41
- 山梨正明（1988）『比喩と理解』東京大学出版会
- 山梨正明（1995）『認知文法論』ひつじ書房
- 山本寛太（1975）「慣用句とその教育の問題」『覆刻文化庁シリーズ 8 語源・慣用句』明
治図書、245-305
- 山本和之（1998）『日英語の分析と対照研究』窓映社
- 山本雅子（2010）存在表現「ある」「いる」の意味—事態解釈の観点から—『言語と文化』
第22号、55-71
- 吉川佐紀子（1999）「日本人の表情 会話時の表情は何を伝えるか」『日本語学』第18巻
5-9号、36-43
- 吉田則夫・支洪濤（2002）「身体部位名称を含む慣用句についての計量的分析」『岡山大学
教育学部研究』第121号、157-165
- 吉田則夫・支洪濤（2003）「身体部位名称を含む慣用句についての日中対照研究」『岡山大
学教育学部研』第124号、93-100

吉野耕造 (1988) 「モンゴル語親族語彙と共感的同一化」『モンゴル学会紀要』19、73-93
吉永尚 (2008) 『心理動詞と動作動詞のインターフェイス』廣橋研三
由井紀久子 (2000) 日本語における所有表現の意味『ひつじ研究叢書』第21巻、115-124

モンゴル語の文献：

- Г.Аким (1999) “Монгол өвөрмөц хэлцийн тайлбар толь” II хэвлэл Улаанбаатар
- Г.Аким (1985) “Монгол-Орос, Орос-монгол өвөрмөц хэлцийн толь” Улаанбаатар
- Г.Анхбаяр, М.Танимори (1999) “Япон-Монгол сонин толь” Коюү планинг центр
- Ч.Арьяасүрэн, Х.Нямбуу, Г.Чингэл (1992) “Монгол ёс заншлын их тайлбар толь” Улаанбаатар
- Ч.Арьяасүрэн, Х.Нямбуу (1990) “Монгол ёс заншлын бага тайлбар толь” Улаанбаатар
- Д.Бадамдорж (1997) “Орчин цагийн монгол хэлний утга судлалын үндэс” Сүхбаатар хэвлэл
- Д.Бадамдорж (2006) “Монгол хэлний үгийн сангийн утга зүй” Улаанбаатар
- М.Базаррагчаа (2000) "Монгол хэл" Улаанбаатар
- Ц.Батаа (2012) “Зүйр үгийн сурган хүмүүжүүлэх увдис” Битпресс
- Ж.Бат-Ирээдүй (2009) “Монгол хэлний хэлзүйн дагавар, нөхцөл, баймж үгийн сан”
Мон-Эдьюкэшн Пресс Пабблишинг
- Д.Баттогтох (2008) “100 хэлц эх, хэлц дасгал, хэлц сорилго” БСШУЯ Албан бус
боловсрол, зайны сургалтын үндэсний төвийн хэвлэх үйлдвэр
- П.Бямбасан (2006) “Монгол хэлний онол бүтцийн асуудалд” VII Хэл зохиолын хүрээлэн
Монголын Алтай судлаачдын холбоо, Улаанбаатар
- Л.Дашням, Д.Намуун (2005) “Монгол хэвшмэл хэллэг, хэлц үгийн тайлбар толь” Адмон
- С.Лувсандамба, Л.Дамдинжав (1989) "Монгол хэл 4-10" Улсын хэвлэлийн газар
- Ц.Индраанил, А.Номин (2005) “Монгол түмний өвөрмөгц яриа” Оногдахуй
- Монголын Шинжлэх Ухааны Академи, Хэл Шинжлэлийн Хүрээлэн (1986) “Орчин цагийн
монгол хэлний үгийн сангийн судлалын үндэс” Улаанбаатар
- Н.Нансалмаа (2005) "Үгийн сан судлал" Улаанбаатар
- Ш.Озава (1995) ”Орчин үеийн монгол-япон хэлний товч толь” Дайгакушэрин
- Л.Олзвой (2007) “Монгол хэлний хэлц үг” Улаанбаатар
- Ц.Өлзийхутаг (1973) "Монгол хэлний үгийн сангийн судлал" Улаанбаатар
- Б.Сумъяабаатар (1986) "Хэлц үг" Улаанбаатар
- Д.Төмөрсүх, Г.Хоролсүрэн, Н.Цэвээнсүрэн (2007) “Өвөрмөц хэлцийн тайлбар” Улаанбаатар
- Д.Төмөртоого (1977) ”Монгол-Англи-Япон толь” Каймэй шэин
- Ж.Төмөрцэрэн (1974) ”Монгол хэлний үгийн сангийн судлал” Улаанбаатар

И.Уранчимэг, Ц.Жаргал (2008) “Хэлц үгийн утга” Улаанбаатар

Я.Цэвэл (1966) ”Монгол хэлний товч тайлбар толь” Улаанбаатар

Л.Чулуунбаатар, Ц.Онон (2010) “Япон монгол хэлний өвөрмөц хэлцийн толь” Улаанбаатар

謝辞

本研究を遂行し学位論文をまとめるにあたり、終始暖かい激励とご指導、ご鞭撻を頂いた広島大学大学院国際協力研究科の佐藤暢治先生、浮田三郎先生、深見兼孝先生、マハラジャン ケシャブ ラル先生に心より感謝を申し上げます。博士課程への進学及び研究全般にわたる多大なご支援やご指導をしていただいた先生たちに深く感謝致します。先生方のご助言やご指導なくしては、本論文の完成は不可能であったことを記すとともに、深甚の謝意を表します。

そして、学位論文審査において、貴重なご指導とご助言を頂いた広島大学大学院国際協力研究科の先生方々や大阪外国語大学名誉教授橋本勝先生に深く感謝致します。

また、広島大学大学院に留学する機会を与えていただき、研究活動の道に導いていただいた広島大学大学院教育学研究科の倉地暁美先生にも、ここで改めて御礼を申し上げます。

修士課程進学から現在にわたり温かく見守っていただくと共に、多くのご支援を贈りました広島大学大学院国際協力研究科の学生支援室の優しい職員の皆様にも重ねて謝辞を表します。さらに、博士課程在学中、同期生や先輩たちの存在が、研究を進めていく上で、大きな励みとなったことを心より感謝を申し上げます。

最後に、本研究を進めるにあたり、ご支援、ご応援、ご協力を頂きながら、ここにお名前を記すことが出来なかった多くの方々や友達たちや家族に心から感謝を捧げます。

広島大学大学院国際協力研究科

Surenjav Oyunzul

2014年8月